TURN JOURNAL 2018

文化
オリンピアード

TOKYO 2020

TOKYO 2020
PARALYMPIC GAMES

TURNジャーナルは、その年の活動を振り返りながら、現場にいた人々が何に出会い、何を考え、何に喜び、悩んだかを記録し、発信していくための冊子だ。

アート、福祉、障害、コミュニティ… TURNにまつわる事柄は、他者に説明する際に難しさを感じるものが多い。どう、言えばいいのか、言葉が詰まることも多々ある。一方で、わかりやすさを追求すれば、こぼれ落ちる情報や思いも出てくる。

しかし、それを躊躇していては、TURNの世界は広がらない。

この冊子では、あえてTURNの諸活動の価値、意味合いを定義し、言語化することで、わかりやすさ、理解しやすさを心がけて編集、制作した。

初めての人にとっては、TURNとどう出会い、つながっていけばいいのか、その入口ガイドブック的な役割になるだろう。

すでに深くつながっている人からすれば、自らの体験、思考を再確認する冊子となるはずだ。場合によっては、定義のされ方に違和感を覚えることもあるかもしれない。その時は、ぜひその違和感の正体を見つめることで、また新たなイシューと出会ってほしいと思う。

みなさんがそれぞれの視点で、TURNを“読み解く”一助となるよう、この冊子を活用していただければ幸いだ。

表紙アートワーク：日比野克彦

TURN JOURNAL
2018

5 TURNとは？

6 巻頭インタビュー

「人と人の距離を縮めていく」日比野克彦

日比野克彦が、TURN に託してきた想いや国内外で展開してきた中で感じたこと、そしてこれからの社会におけるアートの可能性について語る。

10 特 集

風が吹き、夢はおどる
—小茂根福祉園とTURNのこれまでとこれから—

2015年からTURNに参加してきた小茂根福祉園。TURNの変遷とともに４年という時間をともに過ごしてきた。施設がアートプロジェクトを進める過程で起きたさまざまな葛藤や変化、そしていつしか育まれ始めた夢まで、関係者からのインタビューをもとにその活動を振り返る。

39 TURN 2018

40 TURN 交流プログラム

TURN 交流プログラムは、アーティストと福祉施設や多様なコミュニティが互いに「出会う」プロセスを大切にしている。4 年目を迎え、広がりを見せるTURN 交流プログラムから、スタイルや表現もさまざまな活動をピックアップして紹介する。

40 森山開次　休日としてのTURN
42 池田晶紀と川瀬一絵　友達の家に遊びにいくように
44 テンギョウ·クラ　TURNと出会いカルチャーダイブする
47 岩田とも子　「公園」に寄り添う人たちとの出会い

48 TURN LAND

福祉施設やコミュニティスペースをアーティストとともに地域にひらき、文化施設としての機能をつくりだす TURN LAND。2 年目を迎え、施設が持つ資源を活かした多彩なプログラムを紹介しながら、それぞれの地域へのひらき方を考える。

48 ハーモニー〈世田谷区〉
56 クラフト工房 La Mano〈町田市〉
62 気まぐれ八百屋だんだん〈大田区〉
64 東大生態調和農学機構〈西東京市〉

66 特別寄稿

TURNの参加者や関係者から、それぞれの関わりの中で生まれた考察や期待など、思い思いに執筆してもらった３つの特別寄稿。

66 「TURN で見つけたもの」瀬戸口裕子
68 「であっTURN、まわっTURN、くるくるTURN」マリー／Sasa
70 「TURNフェスから学んだこと」佐藤慎也

72 TURNフェス４

年に一度開催しているTURNフェス。４回目を迎えた今回は「日常非常日（ビッジョッビジョッビ）」をテーマに、一人ひとり異なる日常が出会うことで生まれる“違い”を知り、それを楽しむフェスティバルが開催された。アーティストへのインタビューやコラムも織り交ぜながらフェス４で何が起きていたかを振り返る。

73 インタビュー①《NENNE｜ねんね》山城大督
89 インタビュー②《共生するアトリエ》伊勢克也
96 コラム「鈴木一郎太の３日連続トークシリーズで語られたこと」
104 コラム「きょうだい児」
118 「TURNフェス４に託したこと」森 司

122 TURNミーティング

TURNの可能性について考え、語り合うTURNミーティング。今回は、第４〜７回までを収録。「地域への広がり」、「手業（てわざ）からはじまる交流」、「ダイバーシティを見据えた人材育成やアクセシビリティ」などTURNに関わるテーマとともに、各方面で活躍するゲストを交えてトークを行った。

130 コラム「TURNと私」奥山理子

134 地球上のいろいろなところにもあるTURN

2016年から継続的に海外でも展開してきたTURN。これまでの海外展開について振り返るコラムと、2018年の「TURN - LA TOLA」のレポートから、TURNの世界への広がりについて考察する。

135 レポート「他者と出会い、共有する時間」畑まりあ
140 インタビュー「地域住民とアートの実践」サムエル·ティトゥアニャ

142 あとがきにかえて　森 司

本書の主な撮影者については、以下のとおり記号を表記しています。
冨田了平＝A　西野正将＝B　樋口勇輝＝C　伊藤友二＝D

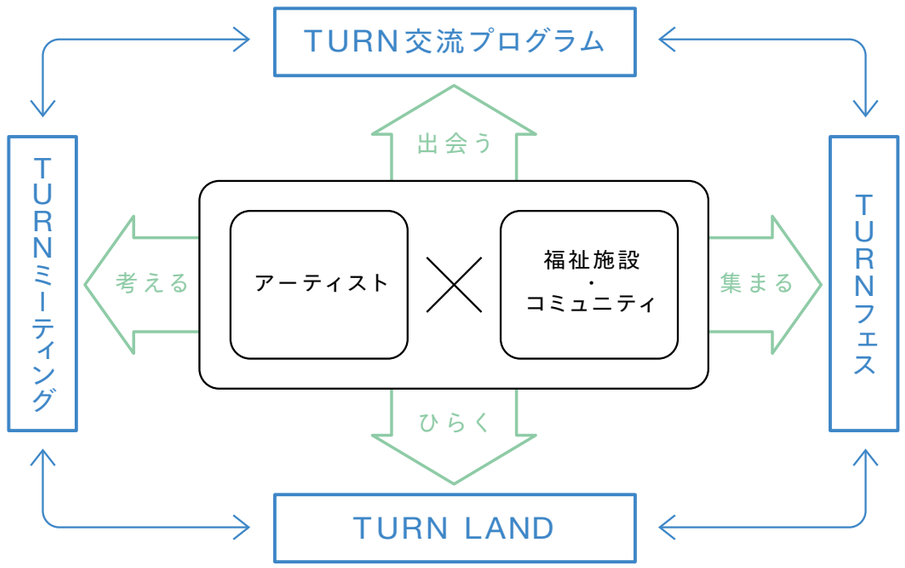
“違い”を超えた出会いで
表現を生み出すアートプロジェクト

TURN

障害の有無、世代、性、国籍、住環境などの背景や習慣の違いを超えた多様な人々の出会いによる相互作用を、表現として生み出すアートプロジェクト。
アーティストが、福祉施設や社会的支援を必要とする人のコミュニティへ赴き、出会いと共働活動を重ねる「TURN交流プログラム」と、TURNの活動が日常的に実践される場を地域につくり出す「TURN LAND」を基本に据え、「TURNフェス」と「TURNミーティング」の開催によって広くその意義を発信している。また、2016年より、さまざまな機関と連携し、国内のみならず海外の複数カ国で展開している。日本及び現地の参加アーティストが伝統的な技術や所作を携えて一定期間、福祉施設やコミュニティに赴き、TURN交流プログラムと発表を実施している。

TURNは、日本財団アール・ブリュット美術館合同企画展 2014–2015「TURN（ひとがはじめからもっている力）／陸から海へ」をきっかけに生まれ、2015年度に、東京2020オリンピック・パラリンピックの文化プログラムを先導する東京都のリーディングプロジェクトの一つとして始動した。2017年度より、東京2020公認文化オリンピアードとして実施している。

監修｜日比野克彦（アーティスト、東京藝術大学美術学部長・美術学部先端芸術表現科教授）
主催｜東京都／アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）／
特定非営利活動法人 Art’s Embrace／国立大学法人東京藝術大学



TURNを創り出すプログラム相関図

巻頭インタビュー

人と人の距離を縮めていく

日比野克彦（TURN監修者）

「TURN」という言葉とともに、プロジェクトのコンセプトを設計している日比野克彦。四年間を経た今、彼はTURNという言葉にどんな思いを抱いているのか。立ち上げからともに歩むプロジェクトディレクター森司が、人間の持つ力、アートの可能性、そしてTURNのこれからを日比野に聞いた――。

聞き手：森 司（TURNプロジェクトディレクター）

B

人間の衝動に着目していきたい

――TURNという言葉に託したいことは？

人が人をもてなしたり、気持ちを慮（おもんぱか）ったりしながら、相手の立場に立ち、反射神経的に身体が動く。そうしたことが多様性を認め合う上で、一番大事な行動になってくると思います。「障害者に優しくしないといけない」「シルバーシートは高齢者に譲る」といった社会がつくったルールを守る意識ではなく、身体が反応するということです。相手の気持ちを思いながら「大変だろうな」「助かるだろうな」と、互いに思い合う力が人間の力の一番大きなところだと思います。それを福祉の人たちだけではなく、社会全体の人たちで行っていくことが必要です。そうした考え方、行為をTURNという言葉に託しています。

――支援ではなく、他者を思いながら体が反応してサポートをする。アートは、そうした人間が本来持っている力を引き出せると日比野さんは以前話されていましたね。

はい、そうした人間の持つ力を呼び起こしてくれたり、気づいたりできるようにしてくれる一つの道筋としてアートがあると思っています。
知識を人間的に理解しようとすると、「治療」「治癒」のような形で「壊れたところを直す」というニュアンスの言い方になり、そうした考え方をもとに医学とか福祉が浸透していきました。「なんで生きているんだろう」「宇宙ってなんだろう」とか、「なんで？」を理解するために立証していくと科学になります。一方で、立証しないと、永遠にロマンとかミステリーと言われるものになり、どちらかというとアート的なまま存在することになる。見つめている方向はアートも科学も同じですが、理解しようとする人間が異なるとアプローチも異なります。
TURNが「ひとがはじめからもっている力」を公言しているように、アーティストは命を感じたり、宇宙を見つめたりすることが発想の根源にあると考えています。そうしたアーティストの特性を活かして、科学的に解明する前の「髄」の部分や、社会的にシステム化する前の人間の衝動とか、そうした側面に着目していくことがTURNの目指すところです。

――日比野さんは昔から、手グセを、個性として認めるというワークショップを行っています。それは日比野さんがTURNという言葉に出会う前から持っていた眼差しや世界観だと思います。そこにいたる根っこの部分を聞かせていただけますか？

いろいろな説明の仕方がありますが、一番わかりやすいのは、書道学校に通っていた小学生のときの話です。字が上手な子がいる隣で、僕は紙が破れるように書きました。怒られると思っていたところ、自分が褒められて。「これでいいんだ」と思えた体験です。後々、この書道の先生が、関谷義道[※1]先生だったと大人になって気がつきました。

――そうした原体験があるんですね。TURNは多くの団体やコミュニティと連携するようになりました。

TURNに関心を持つ海外の大学の先生や作家たちは、どのような反応をされているのでしょう？

社会的な課題は国や都市によって異なります。例えばブラジルでは、障害者とか高齢者問題の以前に、貧困問題があります。また南米では、アートと工芸は全く別のものとして捉えられています。アートと社会はつながっていませんが、工芸はつながっています。その中で、アートとともに工芸を使いながら、社会課題と向き合うTURNの側面は、南米含め他の国の人にとって掴みやすいのでは思います。南米ではこれらの側面があると、社会からの評価も高くなる可能性があり、自分たちが持つ歴史的な価値も再認識でき、次なる時代のアートシーンを創造できると考えているようでした。
BIENALSUR（ビエンナーレスール）[※2]は多文化や多様性などをテーマに複数のまちで同時多発的にプロジェクトを実践し、ペルー国立高等美術学校では地域との連携に焦点をあてたセクションが新設されました。今年度TURNを実施したエクアドルでも、大学やアーティストが課題を抱える地域で交流しながら活動を実践していくことが行われており、そうしたことへの共感をとおして、TURNの現場が広がっています。

――海外での反応をとおして、「西洋美術の文脈へのカウンターとしての知的な存在」というより、「あっそれ欲しかったものかもしれない！」と反射神経的に手を伸ばしたくなる運動体としてTURNの可能性が見いだされているように感じます。それは日比野さんが現地で体感した手触り感をもとにつくられているからではないかと思います。

パッケージにした活動を現地に持っていくと「そんなはずじゃなかった」となりがちです。だから、異なる場所や状況に応じて、それぞれに手触り感がわかるインストールの仕方をカスタマイズしています。それぞれのプロジェクトに応じてアーティストの面談、伝統工芸のリサーチ、施設の視察などをとおして形にしているのです。

――場所に応じてオーダーメイドでスタイルを設計するのは、日比野さんだからこそできることかもしれません。海外の現場に赴くTURNの参加アーティストへはどのような託し方をしているのでしょうか？

モノをつくることが上手で、現地の材料で器用につくれるアーティストもいます。そうした人たちがつくるものは見た目のいいものができるのは予めわかっています。でも、必ずしもコミュニケーションが得意なわけではありません。そうしたときに、人をつないでいくような他の役割の人をチームにいれて託すことも大事だと考えています。モノもつくり、コミュニケーション能力もあり、海外のサバイバルも問題ないというアーティストを育てるのは結構難しい。だから、組み合わせを大事にしています。

――一人で立っていられるからこそアーティストだという考え方もあると思いますが、日比野さんの考え方はそうではないですよね。むしろ、それぞれの持っている特性をかけ合わせることで、面白いものや新しいものができたらいいし、さらに地域のいろいろな人が混ざりあって化学変化もする。それこそ、TURNというものかもしれません。TURNがもたらす変化において、目指すイメージはありますか？

例えば粟島[※3]や莇平（あざみひら）[※4]でのプロジェクトもTURNだなと思うんです。いわゆる課題のある地域にアーティストが交流して、島民を巻き込みながら作品を発表する。アーティストはいなくなるけど、島民たちには交流での経験の影響がじんわりと残る。そして繰り返しアーティストが赴く。粟島ではその結果、行政も島の魅力に気づき、経済的な投資も起こりました。アートから見るとTURNもアーティスト・イン・レジデンスも似ているけれど、行政から見ると区別されます。TURNの方が福祉的な側面があるから、社会的な意味は見えやす

A

TURNフェス4のツアー風景

い。TURNの活動を社会に対してわかりやすく翻訳して、つないでくれるところが出てくるといいと考えています。全てのアートプロジェクトが、アートだけの活動ではなく、社会に必要な活動として伝えられて認められていくのがTURNの最終的な一つの目標だと思います。

——TURNが認められることを目指す一方で、時代から求められるようになるかもしれません。日比野さんが言っているようなことが、場合によってはかなり先取り感とともに行われているように思います。社会的に必要な活動として、アートはどのような機能を果たすのでしょうか？

アートの魅力は、モノをつくるプロセスや生まれる段階にもあると考えています。最終形を展示する一方で、本来ここだけじゃないなって。完成ではなく、変化していくプロセス、ぐちゃぐちゃしたところ。制作していて、一瞬にして絵ができあがることがあるんですよ。自分でもわからない瞬間に絵ができる。その時間が、アートの面白さだと思っています。できたものだけ見せると、つくれる面白さを見せられていない気がして、観客に対して申し訳なく思うことや、アートの面白さはそこだけじゃないという気持ちがあります。そうした思いから、公開制作や身体を含めたものづくりを行い始めました。ギャラリーから展覧会のオーダーがあった際に、「何もないところから公開し、最終日に完成させる」ということも行ってきました。自身が魅力に感じている、人が作品に関わっている時間も見せたかったからです。だから、TURN交流プログラムやTURN LANDなどで、人と接しながら、プロセスの手跡が残っていくことを今のTURNでもやっているのだと思います。

——そうやってつくられたものの強度を考えたときに、弱かったり、できてないと言われたりもする。でもそこを日比野さんはよしとする振る舞いがあると思いますが、日比野さんが考えるアート的「質」というのは、従来のものとは違うところを見据えていることでしょうか？

もし物理的な強度として求められるならば、本当に保存していきたい人がやってくれるだろうと思っています。例えば油絵や大理石というものは、その質感に惚れたから、強度がある美しさも保存されるというところもあると思います。でも強度のために、つくりたいものに対して手間がかかったり、やりたいことをストレートにできなかったりすることは避けたいのです。それは一番最初に段ボールをいじり始めた頃からそうです。物質に頼らない美しさやよさがあってもいい。

——鉄や石より、段ボールを加工する方が手早くできますよね。表現したい急かす感覚とあまりずれることなくできるダイナミズムや速さは大事なのでしょうか？

かなり重要です。「こうしたい」という気持ちは、気づいたら過ぎ去っている。「こんな感じにしたい」と思ったものは、夢と同じで思い出そうとすると逃げていくので、できるだけ早く形にしないとぬるくなります。時間が経てば経つほど「こうじゃない」と思うこともあるので、自分としては、浮かんできたものを早く定着させたい。

——TURNでも、そのフワっと立ち上ったところのプロセスをみんなに味わってほしい思いはありますか？他のアーティストや施設関係の人たちは、日比野さんのようなダイナミズムの魅力に触れたことがなく、そのプロセスをイメージできない人もいると思いますが、とりあえず場を用意して、体感してもらうことでTURN的な瞬間を触れてもらえるよう仕掛けている感じはありますか？

フワっと思ったことを形に定着させて、見た人がフワっと思うことがある。TURNの場合、交流している中で、フワっと思う瞬間が何回かあると思います。それが目的なので、急いでモノをつくる必要はないとアーティストにはよく言っています。モノが目的ではなく、モノを介して、気持ちの中にフワっと互いに感じられるものがあればよい。とはいえ、やはりモノがあれば、同じものを見つめられて、同じイメージを描ける。なのでモノの必要はあるとは思います。でもそれだけがアートではありません。つくるまでの時間もアートであること、できあがったモノを見る行為、全てがアートだという視点をTURNを通じて発信していきたいです。

——今それを発信したいと思う理由はなんでしょう？

人と人のコミュニケーションの手法として、情報ネットワークに頼っている今日の社会に対する危機感はあります。学生たちを見ていても、コミュニケーションの取り方は、ここ20年ぐらいですごく変わっています。ハラスメント問題という言葉もよく耳にするようになりましたが、考え方によっては人と接することができなくなるようにも思います。これが海外だと、そこまで個人にならないように思います。日本だと、公園で遊んで怪我したら訴えるケースもあり、そうすると誰も人と関われなくなる。どんどん個人の中に個人が押し込められている状況があります。
その一方で、アートには、社会的な基準は明確にはなく、個人の中で一人ひとりの尺度があり、その尺度が存在する感覚はみんなで共有できるもので、この感覚がアートの特性であり、この特性が人と人を互いに向き合える状態にしてくれるのではないかと。人と人の距離を縮め、つないでいけるのが、アートの力だと信じています。

※1　関谷義道 —— 1920年、岐阜県生まれ。書道家、教育者。中学校や大学など教育機関で教鞭を執った後、「心の書」の普及に努めた。海外での展示多数。ニューヨーク近代美術館に作品が所蔵された。1984年に岐阜県芸術文化活動特別奨励賞受賞、1992年に岐阜県教育功労者［芸術振興］受賞、1999年に勲五等瑞宝章受章、2000年に岐阜ふるさと文化賞受賞。

※2　BIENALSUR —— 国際南米現代美術ビエンナーレ。2016年にスタートし、アルゼンチン・ブエノスアイレスを中心に16カ国32都市の団体や組織と連携して開催された。

※3　粟島 —— 香川県三豊市。アーティスト・イン・レジデンス「粟島芸術家村」や、瀬戸内国際芸術祭の舞台。「粟島芸術家村」のディレクターも務める日比野は、海や自然を取り入れて地域住民とともに展開するワークショップやプログラムをディレクションしている。

※4　莇平 —— 新潟県十日町市の集落。2003年に新潟で開催された「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」において、日比野は、莇平の集落の住民たちとともに始めた朝顔を育てるかたちで「明後日朝顔プロジェクト」をスタートした。地域住民とともに協働しながら継続し、現在、苗植えやロープ貼りから収穫祭まで、年間をとおして活動している。

［写真6・7頁］ショートステイ中に日比野が制作した作品

日比野克彦
アーティスト、東京藝術大学美術学部長・美術学部先端芸術表現科教授、岐阜県美術館館長、日本サッカー協会社会貢献委員会委員長。1958年、岐阜県生まれ。2015年より東京で始動したTURNの監修を務める。

特集

風が吹き、夢はおどる

小茂根福祉園とTURNのこれまでとこれから

取材・文：長瀬光弘

今、障害者通所施設「板橋区立小茂根福祉園」とTURN参加アーティストたちが〝ある夢〟を追いかけている。

その夢は、簡単には生まれなかった。

不安と緊張で始まった最初の出会い。

「こんにちは」が通用しないこともある、小茂根福祉園を利用するメンバー（利用者）との、ぎこちないコミュニケーションに戸惑うアーティスト。

「TURNって何？ アーティストってどういう人？」というさまざまなはてなからスタートする、施設側のTURNの受け止め方。

全ては手探りから始まった。それは、今でも続いているかもしれない。それでも、着実に交流を重ねることで、いつしか夢が育まれ始めていた――。

登　場　人　物

工藤かおる

小茂根福祉園の前園長。2015年のTURNスタートから2017年4月まで、園長としてプロジェクト運営に携わる。現在は都内の別の福祉施設で園長を務めている。

高田紀子

社会福祉士、介護福祉士。小茂根福祉園アート活動推進委員。TURNにおいては、小茂根福祉園側の実行リーダーとして、積極的に活動に参加する。

水谷貞子

小茂根福祉園の現在の園長。前園長から引き継ぐ形で、2017年4月からTURNに関わる。

加藤未礼

コミュニケーションデザイナー。1974年生まれ。「おおきな木」を2008年に開業。プロジェクトごとにチームを結成し、福祉施設の現場に入る。また、障害者施設のスタッフと一緒に考え、その施設の価値を見出し課題の解決を行うデザインワークを各地で開催。

富塚絵美

アートディレクター、演出・振付、パフォーマー。1985年生まれ。通称ちょり。東京藝術大学大学院を修了後、一般社団法人谷中のおかってを設立、ディレクターとしてアートプロジェクトを企画運営。TURNには初年度から参加。

大西健太郎

ダンサー。1985年生まれ。東京藝術大学大学院先端芸術表現科修了後、東京・谷中界隈を活動拠点とする。その場所・ひと・習慣の魅力と出会い「こころがおどる」ことを求めつづけるパフォーマー。「風」をテーマにダンス・パフォーマンス作品の公演を行う。

宮田 篤

美術家。1984年生まれ。2009年愛知県立芸術大学大学院美術研究科美術専攻修了。ワークショップ やドローイングによって他者との関わりの中にある差異を見つめることを制作の契機にしている。

奥山理子

TURNコーディネーター。2015年のTURN始動時より、アーティストと交流施設などをつなぐ役割を担う。

A

小茂根福祉園で「手の会話」を行う大西健太郎（左）と利用者

Episode ⓪

小茂根福祉園について

「小茂根福祉園は東京都板橋区にある知的に障がいのある人の福祉施設です」
これは、小茂根福祉園のホームページに記載されている文言だ。1982年に板橋区から管理運営委託を受けて開設。設立70年を超える社会福祉法人恩賜財団東京都同胞援護会が運営している。2011年には指定障害者福祉サービス事業者として、就労継続支援Ｂ型サービス（定員30人）と生活介護サービス（定員40人）を開始し、今も継続している。
東京メトロ有楽町線「小竹向原駅」から歩いて15分ほどの閑静な住宅街の一角に小茂根福祉園はある。建物は3階建てとなっており、1階は生活介護サービスを利用するメンバー、2階は就労継続支援Ｂ型サービスを利用するメンバーが主に使用している。
生活介護サービスでは、自立した日常生活または社会生活を営むことができるよう、介護を必要とする方に対して、食事や排泄、移動などの介護を行うとともに、創作活動や生産活動、社会参加の機会を提供。就労継続支援Ｂ型サービスでは、自立した日常生活または社会生活を営むことができるよう、雇用によらない就労の機会を提供し、生産活動を行うほか、生活支援や余暇支援を行い、社会参加の機会を提供している。
小茂根福祉園のスローガンは「Yes! I'm here」。このスローガンに込められているのは、かけがえのない家族と社会の一員として私が私らしくいられるよう、ゆっくりと人との関わりを築きながら長くこの地域に住み続けられるように、という願いだ。「住み慣れた地域での“私らしい普通の暮らし”を支援します」「地域と協働し誰もが住みやすく優しい街づくりに貢献します」という基本理念を基に掲げられている。

小茂根福祉園の特徴は『KOMONEST（コモネスト）』というグッズやコーヒーのブランドを持っていることだ。メンバーが描いた絵を用いてデザインされたバッグや財布などの小物。オリジナルブレンドで自家焙煎する「フクロウ珈琲」などを定期的に販売している。こうした活動を始めた経緯を工藤かおる前園長はこう語る。
「利用者は企業から受託した軽作業によって賃金を得ています。しかし、それだけをやっていてもなかなか賃金を上げることはできません。少しでも利用者の賃金を増やせないか、と考えていたところアートディレクターの加藤未礼さんと出会い、2009年に『KOMONEST』というブランドを立ち上げました」
メンバーの描いた絵が、デザイナーの力を借りることで価値のある商品となる。受託作業だけでなく、自分たちで価値のあるものを生み出し、販売することで、わずかながらでも賃金を上げることができた。「区立施設なので、設備投資にも限界があります。限られた資源の中で、高い価値のものを生み出すのに、ブランディングは大きな力となりました」と工藤前園長は続ける。
「『KOMONEST』という活動を行う小茂根福祉園なら、TURNにもきっと協力してくれるのではないか」。ある日、TURN参加アーティストである富塚絵美は、知人からこのように、小茂根福祉園について教えてもらった。TURNへの参加施設を探していたTURNコーディネーターの奥山理子が富塚からその情報を聞いたところから、小茂根福祉園との関係は始まっていく…。

Episode ①

2015年 秋 ― 2016年 3月

すれ違いから始まる物語

はてながいっぱい

（何を言ってるんだろう、この人たちは？）
2015年秋、小茂根福祉園の２階にある、こぢんまりとした会議スペース。机を挟んで、工藤前園長、小茂根福祉園職員たちとコーディネーターの奥山、アーティストの富塚が向き合っていた。運営スタッフと富塚は過去に他のアートプロジェクトでともにした関係だ。小茂根福祉園と富塚の両者はこの日が初対面だった。
「TURNに参加していただけないでしょうか？」
奥山が尋ねるも、小茂根福祉園側の人間は困惑した表情のままだった。
「何のことだかさっぱりわからなかったんです（笑）。もともとアートのこともよく知らない。アーティストがここに来て何をするんだろう。それによって、何が起きるんだろう。何もイメージできなかったんですよ」
初めてTURNについて説明を受けた時のことを工藤前園長はこう振り返る。
同席していた小茂根福祉園職員たちのうちの一人が高田紀子だった。彼女は後にTURNの活動に深く関わっていき、園内に新設されるアート活動推進委員会※の委員となる存在だ。しかし、この日は工藤前園長と同様、はっきりとした理解には及ばなかった。「小茂根福祉園に普段来ないような女性が二人いらっしゃって、何かを話してくださるんですけど…。そもそもアーティストって何をされている方なのかもわからないですし、TURNが何をするのかもわからない。はてながいっぱいでした」。
重い空気が室内を包む中「東京2020オリンピック・パラリンピックの文化プログラムを先導する東京都のリーディングプロジェクトの一つでもあります」という奥山の一言で、流れは一変する。
工藤前園長が、東京2020オリンピック・パラリンピックの一端に、小茂根福祉園が関われることに強い関心を抱いたのだ。それは、園長としてのメンバーや職員に対する思いから来ていた。
「東京2020オリンピック・パラリンピック関連のプロジェクトに、小茂根福祉園の名前が出れば、施設のことをいろいろな人に知ってもらえる機会となります。利用者さんにとってよいことにもなるし、職員も喜ぶでしょう。はっきりとはわからないままでしたけど、悪いことにはならないだろうって、参加することを決めました」

貴重な気づき

正式に参加施設となった小茂根福祉園だが、しばらくは手持ち無沙汰な時間を過ごす。高田は当時を振り返る。
「アーティストの富塚さんが来る、と運営スタッフから聞いていたんですけど、一向に運営側から連絡がなくて。とりあえず待っていればいいのかな、と工藤前園長と話をしていました」（高田）
この待ちぼうけは、TURN運営チームとアーティスト間の意思疎通がうまく取れていなかったことや、運営体制が十分整っていなかったことに起因する。小茂根福祉園には富塚が定期的に伺う予定と運営側が伝えていたが、運営チームとアーティストの役割分担や、TURN交流プログラム（以下、交流プログラム）というプログラム自体の設計を模索しながら進めている段階であった。そして、“交流”という言葉が持つイメージの共有が十分ではなかった。こうしたすれ違いはアートプロジェクトにおいては、往々にして起きるものだが、初めてのTURNフェス（以下、フェス）を控え、工藤前園長には不安がよぎる。
「ウェブサイトでフェスの事前情報を見ると、参加施設やアーティストなどの名前がはっきりと出ているのに、小茂根福祉園の名前はどこにもなかった。『あれ？ どうなってるの？』という気持ちでした」（工藤前園長）
運営チームは改めて話し合いの場を持った。アーティストとの連携不足だったことなどの不手際を詫び、フェスでのクレジットについても明記することを約束し、工藤前園長も一定の納得を示した。しかし、どうにも腑に落ちない。
「なんだかこのままフェスをやってもTURNに参加したという気に全然ならないな、と。利用者さんに何と言っていいかわからないし、職員も知りたいと思ったので、富塚さんに『ぜひフェスの前に、小茂根福祉園に来てください』と誘ってみたんです」
その声かけに富塚も快諾。フェスを目前に控えた2016年2月、小茂根福祉園に改めてアーティストが訪れることになった。
いきなりのすれ違いから始まった、小茂根福祉園との歩み。だが、このつまずきを経たことで運営チームは「アーティストと施設・コミュニティ間の調整」や「プログラムの設計」に対する意識を格段に向上させることになる。以降の交流プログラムにおいては、参加施設、コミュニティの特性を考慮し、それぞれのアーティストにどのように参加してもらえば、よりよい交流ができるのかを慎重に判断している。つまずきがあったからこそ、早い段階で貴重な気づきを得ることができたのだ。
今振り返れば“さもありなん”な話に思えるが、当時はプロジェクトを立ち上げたばかり。運営チーム、アーティスト、施設それぞれがTURNにおける“交流”とはなんなのかを模索する重要な時期だったとも言える。

2016年２月に行われたアルミホイルをまとうワークショップの様子。利用者と富塚絵美（右）

終わってみたら

富塚が小茂根福祉園に訪れた際に行ったのが、アルミホイルを使ったユニークなワークショップだった。キラキラと光るアルミホイルの“魔力”を借りて、誰もが主役となれる遊び場を創出したのだ。
「富塚さんがアルミホイルを体に巻きつけて登場したんですよね。それがキラキラして、綺麗なんだけど、おかしくもあって。とにかく華やかだった。利用者も喜んでました。それで、職員や利用者も一緒になってアルミホイルを体中に巻きつけたんです。好きなだけ使っていいよと言われて、みんな創作意欲が湧いたんでしょうね」（工藤前園長）
「大丈夫かなって最初は不安だったんです。利用者がどういう反応するのか、職員がどう受け止めるのか。でも終わってみたら杞憂に終わりました」（高田）
二人が揃って口にしたこの日の感想がある。
「終わってみたら、なんだか楽しかった」
運営チームはつまずきが発生したことで、「小茂根福祉園との関係は一回で終わりかもしれない」という懸念を抱いていた。しかし、結果的に、この日の体験が大きな礎となり、小茂根福祉園はここから長い時間をかけてTURNに参加していくことになる。

※アート活動推進委員会 ―― 小茂根福祉園のアート活動全般をマネジメントしている委員会。利用者の好きな（得意な）表現方法でその人らしさが見えてくる創造を目指し、別称『ART＋（アートプラス）』と呼んでいる。利用者の日常から発見された『きらりグッと！』を形に残す活動も行っている。

Episode ②

2016年4月―2017年3月

“交流”の意味

「葛藤していきましょう」

2016年4月、TURNは２年目を迎えた。小茂根福祉園も継続して参加する意向を示し、次の交流プログラムをどのような形で行うか、運営チームが検討することになる。
「大西健太郎に一人で小茂根福祉園に行ってもらおう」
TURNプロジェクトディレクターの森司は２年目を迎えるにあたって、こうした考えを持っていた。今までは富塚と一緒に活動することが多かった大西だが、単独で施設と関わるいいタイミングなのではとの思いからだ。
実は大西は、前述の富塚による、アルミホイルを用いたワークショップにサポート役として参加していた。大西と富塚は東京藝術大学でともに学んだ仲で、卒業後も同じ団体でアートイベントの企画や運営も行っている。高田はそのときの大西の様子を鮮明に記憶していた。
「あまり話さない人でしたね。でも、イケメンだし、スタイルもいいし、存在感はありました。言葉は発さないんですけど、楽器とかアルミをうまく使って利用者と楽しそうにしていて、なんかすごい人だな、と思って見ていたのを覚えています」（高田）
不思議とメンバーと馴染んでいたその姿を覚えていた高田。運営チームから大西がメインで交流すると聞き、「いいじゃないですか」という言葉が自然と出たという。

一方の大西は、小茂根福祉園との交流プログラムに単独で挑むことになり、緊張の日々を送っていた。富塚と訪れた際は、決まったワークショップがあり、役割もあったから、それをこなせばよかった。しかし、交流プログラムではメンバーや職員との交流を重ね、ゼロから価値や表現を見出す必要がある。恐怖心があったと、そのときの心境を素直に語る。
「正直、怖かったです。すごく、緊張していた。どう接すればいいのか、何をすればいいのか。全く想像できない。１回は訪れていたけど、次は一人だし、無目的ですからね。初めて一人で行ったときは、周りもろくに見られないし、自分の心もうまくひらけなかったことを覚えています」（大西）
高田はそんな大西を連れて、施設を案内した。メンバー一人ひとりに「この前来ていた、アルミホイルの人ですよ」と紹介をする。覚えている人もいれば、覚えていない人もいる。まばらな反応の中、うつむき加減の大西に高田は「これから一緒に葛藤していきましょう」と声を掛けた。

空間に浸る

大西は毎週のように小茂根福祉園に訪問し、自分なりの交流プログラムを模索し始める。その中で、大西はメンバーと同じ作業をしたり、昼食をともにしたり、ただ横に座ってみたり、メンバーと多くの時間をともにした。しかし、どうもしっくりこない。
「何度か通いながら、この空間に自分を浸す感覚で時間を過ごしていました。でも、なかなか浸かった感じがしなかった。まだ､頭が堅かったんでしょうね。接し方が、自分の範疇の中でしかできてなかったんです」（大西）
小茂根福祉園のメンバーは人懐っこい傾向がある。訪れた人に対して、あたかも昔からの知り合いだったかのように話しかけてくる人もいる。同時にそれは、「コミュニケーションを重ねながら、少しずつ距離を縮めていく」という“常識的”とされる交流方法が意味をなさないことでもある。それに、大西は気づいた。
「例えば、人と会ったら『こんにちは』と言いたくなりますよね。でも、小茂根のメンバーは『こんにちは』で始まる出会い方じゃないんです。視野に入った瞬間から出会っている、といいますか。自分の中にある“出会いとはこういうものだ”と思っている通りには出会わせてくれない。それが、メンバーたちの特性なんだろうし、面白さでもある。そうしたことに気づいていきました」（大西）
当たり前だと思っていたものが、当たり前ではない空間。大西は小茂根福祉園に浸るうちに「自分の中のフレームが取り払われていった感覚」を味わう。しかし、同時に「手立てがなくなった」という思いもあった。
「これ以上、自分からどう働きかければいいかわからなくなった時期があったんです。ちょっと苦しかったですね､そのときは｡メンバーがいろいろ話しかけてきて、それに乗るんだけど、そこから先の広がりが見えない。でも、今振り返ればそうした思いを抱けたことで、本当の意味でメンバーに出会えるチャンスが生まれました」（大西）
大西はそうした葛藤の中で、メンバーの“体の中”に強い関心を抱くようになる。話しかけてくるメンバー一人ひとりの体の中には何が渦巻いているのか。交流と言っても、言葉によるコミュニケーションが全てではないのではないか。そうした考えが頭を巡った。
「手詰まりになったとき、自分が一番素直に相手のことでノックしたいと思えたのがメンバーの“体”でした。彼、彼女らの体の中にどんな風景があるのか、見てみたい。そうした欲求が自然と沸き起こったんです」

新たな一面

メンバーの体にノックしたい。大西はその思いを『風くらげ（影の軌跡）』というアートプログラムで実現しようとした。
メンバーがキラキラしたフィルムを体にまとい、暗い部屋に入り思い思いに体を動かす。その様子をフラッシュを焚いて撮影し、メンバーの体の動きを光の軌跡で表現する、というものだ。
次ページに掲載されている実際の写真を見ていただくのが早いだろう。これこそが、大西が見てみたいと思った“体の中の風景”だった。
「メンバーの体の反応や、歩いたり走ったりする気配。そうしたものをとおして、みんなと出会ってみたかったんです。暗い部屋という緊張感がある空間に入って、一緒に体を動かして掛け合いをする。素直にその動きに関心を注げたし、相手も乗ってきてくれていると感じた。これで間違ってなかった、という手応えはありました」
一つ気になるのは、この説明が難しいプログラムをどのように施設で実行したのかということだ。メンバーは普段、決められたスケジュールに沿って作業をしているから、時間の確保も必要だ。このあたりの実務的なサポートについて、高田が詳しく語ってくれた。
「説明を聞いても、いまいちよくわからなかったんです。だから、まず実物を持ってきてもらって、職員に体験させてもらえないか、大西さんに相談してみたんです。大西さんも協力してくれて、すぐにキラキラしたフィルムの実物を持ってきてくれて、実際に私と何人かの職員で『風くらげ』をやってみたんです」（高田）
工藤前園長は、この事前体験を「研修」と表現した。
「研修したんですよね、１階で。それで、職員は何をするのかは理解できた。どういう意味があるのかまでは分かってなかったと思うんですけどね（笑）。『当日、大西さんとカメラマンさんが来て、暗い部屋でこれこれこういうことをします』。それぐらいの概要がわかっていれば、我々も準備ができるし、どう利用者をサポートすればいいかもイメージできる。そうやって実行に移していきました」（工藤前園長）
実際に職員が体験することで、メンバーに身をもって説明できる。また、言葉だけでなく、実際のアイテムを見せることで、メンバー側にもイメージを持ってもらうようにする。参加する、しないの承諾は、高田がメンバー一人ひとりに行った。
「アイテムを見せながら、一人ひとりに参加の意思を聞いていきました。就労継続支援Ｂ型サービスの利用者さんの中には、作業を優先する人もいますし、利用者さんにも選ぶ権利は当然あります。生活介護サービスの利用者さんなど意思を示すことが難しい人は、実際に少しやってもらって表情を見ながら、続けるかどうか判断しました」
高田は『風くらげ』をとおして、メンバーの新たな一面を見ることができた。10年以上、施設で働く中で、初めて見るような表情を浮かべるメンバーもいたという。
「みんな、あんなにはしゃぐんだっていうのは驚きでした。キラキラしたフィルムを身につけるだけで、違う自分になれる感覚。それが、利用者のみんなも同じように感じるんだな、と新鮮な発見がありました」（高田）
TURN の活動のベースとなっている交流プログラム。この“交流”という言葉にはさまざまな関係性が含まれている。施設、コミュニティのメンバーとアーティストの交流はもちろん、職員とアーティスト、職員とメンバー。あらゆる関係者が“アート”をとおして交流を重ねていく。『風くらげ』でも、アーティストだけでなく、職員もまたメンバーとの新たな交流を経験することになった。

［写真上］『風くらげ』撮影中のメンバーたち。フィルムの巻き方も人それぞれなことがわかる（写真：野口翔平）［写真下］暗闇の中で、メンバーの体の中の風景が光の流れとなって表現される。この写真を含め、『風くらげ』の様子を収めたいくつかの写真はフェス２の会場でも展示された

Episode ③

2017年３月―４月

変化との向き合い方

想像を超えてくる

フェス２を無事に終えた大西と小茂根福祉園。少しの休憩を挟み、次の活動として始めたのが『風あるき』だった。これは『みーらいらい』というメンバーや職員の体の形をかたどったキラキラしたフィルムを棒にくくりつけ、外を散歩する、というものだ。初めての『みーらいらい』制作と『風あるき』は、2017年３月の終わりに実施された。外では桜の花びらが舞い、春の訪れを知らせていた。

「『風あるき』で手に持つ『みーらいらい』の制作は複数人で行うのがポイントです。メンバーに直接触れながら、キラキラしたフィルムの上に寝そべってもらって型を取る。メンバーには、他者に直接体を触れられて介入される経験をしてみてもらいたい、という思いがあったんです。メンバーはそれぞれの世界観を持っていて、自分の居心地のいい場所を見つけるのがうまい。まずは、その空間がどんなものなのかを見てみたかった。さらに、TURN ではそこからはみ出る経験をしてみてほしかったんです」

『風くらげ』で手応えを感じていた大西は、より積極的にメンバーに介入していこうとしていた。メンバーも大西にかなり慣れてきたようで、親しげに接してくれるようになっている。

（さて、『みーらいらい』づくりで、メンバーはどんな反応をするのか？）

大西は想像を膨らませながら、当日を迎える。しかし、そこは小茂根福祉園の面々。またしても大西の想像を超える反応を示してきた。

「まずね、ほとんどの人が寝ないんですよね。寝ないと『みーらいらい』ができないんですけど、簡単には寝ようとしない。あと、寝そべったと思ったら、本当に眠っちゃたり（笑）。昨日あったことをひたすらしゃべってるってだけの人もいて、とにかく想像以上のことがそこら中で起きた。その光景はすごく面白かったですね」（大西）

なんとかつくり上げた『みーらいらい』を手に持ち、いよいよ外へ。キラキラと光る『みーらいらい』は風になびいて、その形を常に変えていく。決まりきった形はない。ともに参加した工藤前園長は『風あるき』の思い出をこう振り返る。

「なんか不思議な形をしたキラキラしたものを手に持って歩くと、童心に返った気分になってね。利用者は童心ともまた違う感情なのかもしれないけど、すごく楽しそうにしていました。『遊園地に行ってすごい楽しい！』というのとはまた違うんですけど、なんだか心地いいというか。走って、『みーらいらい』が揺れているのをみんなで見て、面白いなーっていうのを感じている。そんな体験は長い間この施設で働いていて初めてでした。これが、“アートの力”なのかなって思いました」（工藤前園長）

この２日後、工藤前園長は小茂根福祉園から別の施設へ移ることになる。

TURNとの出会い方

園長の交代は、『風あるき』が実施される前には運営スタッフにも伝えられていた。初期のつまずきをともに経験し、大西の交流プログラムへのフォローをしながら“アートの力”を感じ始めていた工藤前園長がいなくなる。運営チームはこのまま小茂根福祉園での TURN を継続できるのか、不安を抱いた。交流プログラムにおいて、運営チームは、アーティストと施設の間に入り、関係性を構築するサポートを行っている。交流現場にも立会い、その日その日の様子や変化を見ながら、第三者的な視点で双方の活動のフォローアップをする重要な役割を担っているのだ。その過程で、つまずきから始まった工藤前園長との信頼関係は着実に構築されてきていた。そんな矢先の、園長交代だった。

新たに園長に着任したのは水谷貞子。若い頃に小茂根福祉園で勤務していた経験がある。その後、別の施設で施設長を経験し、また小茂根福祉園に戻ってきた。福祉施設職員としては経験の長い水谷園長だが、アートの分野には、とんと無関係な人生を歩んできた。そんな彼女が工藤前園長からの引き継ぎで TURN について聞いたときは、はてながいっぱいだったという。どこかで聞いたような話だ。

「さっぱり何のことだか。『KOMONEST』はわかるんですよ。グッズをつくって、販売するという明確な目的があるので。でも、TURN に関しては…」（水谷）

『みーらいらい』の型を取るメンバーたち。直接体に触れ合うことで、“介入”されている

水谷園長が着任してすぐ、職員とメンバーで花見に出かけた。『みーらいらい』を手にしたメンバーが、桜の木の周りを楽しそうに歩き回るその光景に、水谷園長は衝撃を受けた。
「『はい？』って、心の中で何度もつぶやきました（笑）。影みたいなものを持って、利用者が歩いていて。すごいインパクトでした」
当時、『みーらいらい』という言葉を把握できていなかった水谷園長は、その物体を「影」と表現して受け止めていたらしい。そうしたTURNとの出会い方も、今振り返ると面白い。「私はスクエアに当てはめて物事を考えるタイプだから」と水谷園長は自らの性分を分析する。
工藤前園長はTURNについて一通り水谷園長に説明した後、困惑する表情を浮かべる彼女に「考えないほうがいいですよ。体験して、感じる。それがアートですから」とアドバイスを送った。

期待と疑問

TURNを社会にひらいていくにはどうすればいいか。監修者の日比野克彦とともに、一時期「TURNセンター構想」を模索していた。これは、TURNを日常的に体験できる場をつくろうという目的で立ち上がったもので、TURNセンターという拠点づくりを当初は想定していた。
しかし、活動を続けていく中で、考えが変わっていく。「それぞれの施設で、日常的にTURNが行われ、地域にひらいていくのがいいんじゃないか」。こうした考え方から生まれたのがTURN LAND（以下、LAND）だ。
大西といい関係性を構築しつつある現場を間近に見ていた運営チームは、小茂根福祉園にはぜひともLANDに参加してほしいと思っていた。しかし、LANDの説明を聞いた施設側は難色を示す。
「私がまだTURNをよく理解してなかったし、その上で、地域にひらくっていうのはハードルが高く感じたんです」（水谷）
水谷園長だけでなく、高田も難しさを感じていた。それは、実務を取り仕切る彼女ならではの視点からだった。
「LAND化して、定期的に活動を行って、地域にひらいていく。そのビジョンは理解できました。でもそれを実現するには、より施設側の主体性が必要になってきます。予算も、施設側が管理することになる。ようやく私一人がTURNに慣れてきただけで、まだ他の職員には行き届いていない部分もありましたから、まだ早いのかなと、率直にお伝えしたのを覚えています」（高田）
大西はLAND化の話を聞いたとき、「期待と疑問が半々」な気持ちになった。
「期待というのは、小茂根福祉園に“関係者”と呼ばれる人以外のいろんな人が来て、メンバーとの楽しい交流が生まれればいいんじゃないか、ということ。疑問というのは、真逆の話ですけど、ひらく意味ってなんなのかな、ということです。『風あるき』をしていたときに、メンバーに向かって小さい子が近寄ろうとしてきたんです。それを親御さんが、何か言いながら止めました。その光景が今でも印象強く残っている。きっと反射的にそのように行動させる風景に見えたのだと思います。ひらいていけば、またそういう場面を生み出す可能性もある。それが、いいことなのか、どうなのか。今もまだ答えは出てないんですけどね」（大西）
結局、小茂根福祉園をLAND化するという話は一旦保留となり、これまで通り交流プログラムとして継続していくことになる。何かを続けようとすれば、変化は必ず起きる。その変化に対して、ときに戸惑い、ときに衝撃を受け、ときに立ち止まりながら、向き合っていく。TURNと小茂根福祉園の三年目は、さまざまな変化とともにスタートしていった。

『風あるき』のワンシーン。近くの公園を、『みーらいらい』を持って練り歩いた（写真上下：野口翔平）

Episode ④

2017年 4月― 9月

より近く、より広く

続けていくために

小茂根福祉園では、メンバーごとに一年間の個別支援計画を立てている。高齢者介護施設における、ケアプランのようなものだ。職員がメンバーと面談しながら、その年の目標をつくっていく。面談の中で、メンバーの中から「大西さん」「TURN」という言葉が頻繁に出てくるようになってきていた。
「今では、目標の中に TURN の活動が入っている利用者さんもいます。2017 年に入ってから、特に意識が変わってきたように感じます」（高田）
利用者の中で、確実に大西、TURN の存在は大きくなってきていた。施設側も TURN をより日常的なものにしていこうと、時間の取り方を 2017年度から変えている。それまでは通常の作業時間を調整して、「TURN のため」の時間をわざわざつくっていた。それを、日中の通常の活動時間内に組み込むシフトを作成したのだ。これは、高田以外の職員が『風あるき』のプログラムをメンバー、大西と行うことも意味する。このことについて、2017 年 6 月に行われた第 1 回 TURN ミーティングで高田はある課題とともに語ってくれている。
「大西さんとの活動はとても楽しくて、利用者さんとの距離もどんどん近づいています。一方で 1 回きりの活動で終わってしまう、という課題もありました。アートの活動を福祉施設で継続的に行うにはどうすればいいか。私以外の職員にも少しずつ参加してもらうにはどうすればいいか。そういうことを最近は考えています」（2017 年 6 月 第 1 回 TURN ミーティングの高田の発言より）
大西も参加しながら、どうすれば継続性を保てるか、話し合いを重ねた結果のシフトだった。些細な変化にも思えるが「よそからゲストが来て行う特別なアクティビティ」から、「日常に溶け込むアクティビティ」に変えていこうとする姿勢が見て取れる。
8 月に行われるフェス 3 を控え、『みーらいらい』づくりと『風あるき』をとおした交流が続いた。この時期は、同じプログラムの繰り返しの中でゆっくりと交流が行われた時期だった。この時期について、大西は日報にこう記している。同じプログラムが続き、メンバーがつまらなく思わないか、という懸念から文章は始まる。

―――――

「同じ作業の持続」という懸念をしていたが、作業の種類によっては、むしろその作業を延々繰り返す人もいた。そして、その行為はまったく「同じ」ことに見えなかったということ。いや、言い換えが重なるようだが、行為する身体の見た目だけではなく、興味やこだわりみたいなものの振幅も「同じ」ところに行ったり来たり。徹底的に同じことを反復しているようにも感じた。
これまで自分にとって、興味やこだわりと呼ぶものは、ある変化を伴っていくものだと思っていた。が、この光景を眼の当たりにしたとき、変化しない興味があってもいいんだという気分になった。なぜなら、目の前でゆっくりと『みーらいらい』を振り続ける彼の表情に一点の曇りもなかったからだ。
―― 2017.6.7 日報「変化しない興味があってもいい」（TURN 公式ウェブサイト）より

―――――

高田や大西が話し合いを重ね、少しずつ変わっていこうとしている中、メンバーにとって個々の興味が芽生え始め、その中には“変化しない”という興味のあり方も存在することに気づかされた。

平成29年度（2017） TURNフェス3 交流プログラム予定表②

【交流において取り組むこと】
①実施前にはそれぞれで大西氏と事前に打ち合わせ（1～2名）
②写真の記録を撮ること（TURNフォルダへ）
③ひと言レポート（何でもよい、利用者様子、職員感想、参与観察）を残す（全員）
④レポートを集めて、当日振り返り（プログラム含めて）する（1～2名）
⇒日報記録（ワーク、外それぞれで作成）
⑤大西氏が園内掲示板に掲載する（1F廊下？）

日程（水）	午前	午後	夕方	参加者
7月13日（木）			アート推進委員会	
7月19日	かわせみワーク	就労ワーク	①就労振り返り	
			②かわせみ振り返り	
7月26日	かわせみ外へ	ひばりワーク	①ひばり振り返り	
			②かわせみ振り返り	
8月2日	ひばり外へ	おおたかワーク	①おおたか振り返り	
			②ひばり振り返り	
8月9日	おおたか外へ	就労外へ	①就労振り返り	
			②おおたか振り返り	
			①16:30～17:00 ②17:00～17:30	

小茂根福祉園側で作成したシフト表。高田紀子がいなくてもそれぞれの職員が対応できるような工夫が見える

活動をとおして、メンバーは各々の経験値を蓄えていく

「好きだな、こういうの」

フェス 3 に向け、大西は小茂根福祉園のメンバーが“主役”となるプログラムを実行できないかと考え始める。
「『みーらいらい』づくりの作業をしていると、よく“合いの手”がメンバーから入るんですね。作業が行き詰まったり、困ったりしているメンバーがいたら、その様子を見ているメンバーから『大丈夫ぅ？』といった感じで声がかかるんです。それがきっかけで、会話が始まって、場が動きだす。自分にも『疲れてない？』みたいな声をかけてくることもあって。そうした風景とか掛け合いごと、フェスの会場に持って行けないかな、という構想がありました」
大西はフェス 3 の会場に、『みーらいらい』づくりの作業風景をそのまま再現しようという大胆なプログラムを計画していた。
「運営チームにも手伝ってもらって、美術館の中で、『みーらいらい』づくりができるようなしつらえを用意してもらいました。そこでは、メンバーが主役です。来場者ももてなしたり、一緒に作業をしたりする。来場者には、直接メンバーと触れ合いながら、初めて小茂根福祉園に来たときの僕みたいに混乱して帰ってほしいと思っていました」（大西）
この提案に高田も乗り気だった。そもそも、高田がなぜこうまでして TURN の活動に深くコミットしようとするのか。その理由の一つは“利用者の経験値”にある。
「利用者さんは普段は施設の中で作業をして、家に帰る。その繰り返しです。それだけだと、なかなか利用者さんの経験値は上がりません。やはり、多くの人に触れ合って、刺激を受けることで、利用者さんの表現の幅や何か新しいことを受け入れる幅が広がっていく。だから、TURN でさまざまな体験をして、多くの人と出会うのは、利用者さんにとってすごく大切なことなんです」（高田）
フェス 3 では、実際に来場者がメンバーと触れ合いながら、『みーらいらい』づくりを行った。おもてなしをする側となったメンバーの様子はどうだったのか。またしても、大西は想像を超える風景を目の当たりにする。
「面白かったですね。メンバー、すごい乗り気で。恥ずかしがるかな、とも思ってたんですけど、自分がステージの上にいるというか、スタッフ側になれることが楽しかったみたいです。パフォーマンス力を発揮してくれたなと思いました」
大西はこのとき、メンバーたちは人前で何かをやることに対しては、決して否定的ではないことを知る。むしろ「好きだな、こういうの」という思いを抱いた。この気づきが、あとの活動にも大きく影響を与える。

出会いと気づき

フェス3では、他にもさまざまな出来事が起きている。この後、小茂根福祉園での活動にアーティストとして参加することになる宮田篤がTURNサポーターとしてこの場に居合わせていた。宮田は当日の朝まで、大西がどういうプログラムを展開するのか、ほとんど知らなかった。

「TURNサポーターには事前に説明会があるんですけど、用事があって行けなかったんですね。大西さんのことも資料でプロフィールは拝見していましたが、会うのは初めて。小茂根福祉園のメンバーが来て、ここで『みーらいらい』をつくる、ということは朝知りました。でも、キラキラしたフィルムの上に寝転がって、型を取るというそれ自体はシンプルな一連の作業の流れにきれいさを感じて、すぐに何をやるのか理解できた。誰でもできるなと思ったのと、自分の問題意識にもつながるところがあって、すごく共感しました」

宮田はサポーターとして、来場者に「参加してもいいですし、見てるだけでもいいですよ」といった声がけをして、なるべくその場にいやすい空気をつくるように心がける。メンバーと参加者の間に立ちながら、落ち着いて丁寧に接する立ち居振る舞いは、その日初めてプログラムを知った人間とは思えないほど自然だった。

水谷園長にとっては、初めてのTURNフェスだった。会場に赴き、小茂根福祉園のワークエリアに置いてあったあるパンフレットが目に入る。手に取り、そこに掲載された写真を見て、水谷園長は「あ、こういうことなのか」という気づきを得る。

「『風あるき』の活動報告のようなものが4ページぐらいの小さなパンフレットになって置いてあったんですね。大西さんがつくってくれたようです。そこには、桜の木の周りで、『みーらいらい』を持って歩く利用者さんの写真が掲載されていました。素直に『綺麗な光景だなぁ』って思いましたね。その場にいたときは『は？』って思ってたんですけどね（笑）。初めて客観的に見て『あ、こういうことをやっていたんだ、私たちは』って気づいたんです。工藤さんが言っていたアートの意味が、少し理解できた気がしました」

各地で行われているTURNの風景が“一堂に会す”フェスでは、毎回さまざまな出会い、体験、気づきが生まれる。フェス3でも、小茂根福祉園の活動に大きな影響を与える、出会いや気づきが誕生していた。

フェス3での『みーらいらい』づくりの様子。小茂根福祉園での光景がそのまま東京都美術館でも再現された

Episode ⑤

2017年10月―2018年3月

チャレンジが始まる

不安

2017年10月、フェス3を終えた小茂根福祉園は、保留としていたLAND化を承認した。半年間、TURNに触れてきた水谷園長の理解、職員側の準備などが整ったタイミングだった。水谷園長は、LAND化を承認した背景について振り返る。
「フェスが終わった後に改めて説明に来てくださったんですね。そのときは、以前よりはTURNがどういうものなのか、知ることができていました。一番大きかったのは、『地域にひらく』ことを決して義務のように考えていないということ。それが理解できたし、職員も大丈夫そうだったので、LAND化を決めました」
高田も職員への理解を進めていた。しかし、他の職員への説明にはいつも苦労しているという。
「TURNについてどう言えばいいのか、いつも難しさを感じています。職員に、さまざまな業務で忙しい中、どうやってTURNと向き合ってもらうのか。でも、実は工藤前園長が異動する際に、『アート活動推進委員会』というのを立ち上げてくれたんですね。これは、TURNなどのアート活動に注力するスタッフとして、それで、私以外にも二人、こうした活動に取り組むスタッフを増やしていただき、幾分か活動はしやすくなりました。まさに、置き土産ですね」（高田）
こうした高田の悩みは運営チームも受け取っていた。そこで、関係者の情報共有を目的とした「TURN PAPER」の発行を、少しときを遡った2017年4月からスタートしている。現場とのコミュニケーションから生まれた、新たなメディアだった。
初めてのLANDとしての活動の前に、次なるプログラムが大西から説明された。『「お」ダンス』というものだ。『「お」ダンス』では、参加者がペアになり、言葉を使わずに手や身体の動きだけでコミュニケーションをする「手の会話」を行う。それを観ている周りの人たちが、二人のやりとりの中で心が動かされたときに、「お」と声をかける。「手の会話」をする人と声をかける側との有機的なやりとりそのものが、『「お」ダンス』なのだ。このプログラムを聞いたとき、高田はこれまでで一番「不安だった」という。

職員向けに実施した『「お」ダンス』説明会。実際に職員にも体験してもらう
（写真：田村大が撮影した映像より）

「これまでの活動は、写真や『みーらいらい』など何かしら形に残るものでした。だから、利用者もわかりやすいし、職員への説明もしやすかった。それが、今回はダンスということで形が残らない。しかも、大西さんのダンスを真似するんじゃなくて、利用者自らがダンスする。できるかな、どうやって説明しようかな、という戸惑いがありました」
これまで通り、先に職員が『「お」ダンス』を体験してみた。具体的な物が存在しない初めてのプログラム。高田以外の職員も戸惑いを隠せなかったが、このときには「わからないけど、やってみようか」という雰囲気ができあがりつつあった。
「みんな、言葉にはしないんですけど、とりあえずやってみようかという空気はありました。今思えばですけど、初めてのプログラムが『「お」ダンス』だったらみんなやらなかったかもしれません。交流を重ねてきたからこそ、できるようになったのかな、って思います」

やってみよう

LANDになったタイミングで、前述の宮田が新たなアーティストとして参加することになった。その意図を大西はこう話す。
「しゃべりのトーンが、僕と違うんですよ。違う温度感、表現の仕方で、職員やメンバーとコミュニケーションを取ってくれる。僕は、よく話が脱線しちゃう。すると、会話の摩擦が多くなり過ぎて、これまで職員の人を混乱させてしまうこともあったかもしれない。宮田さんが入ってくれることで、リズムやトーンが変わり、言葉のイメージを乗り換えたり、別の角度から想像する余白が生まれると思って、呼んだんです」（大西）
宮田は職員が考えた『きらりグッと』という言葉を頼りに、活動に参加しようとしていた。ここで、宮田が初めて投稿した日報を読んでみよう。

―――――

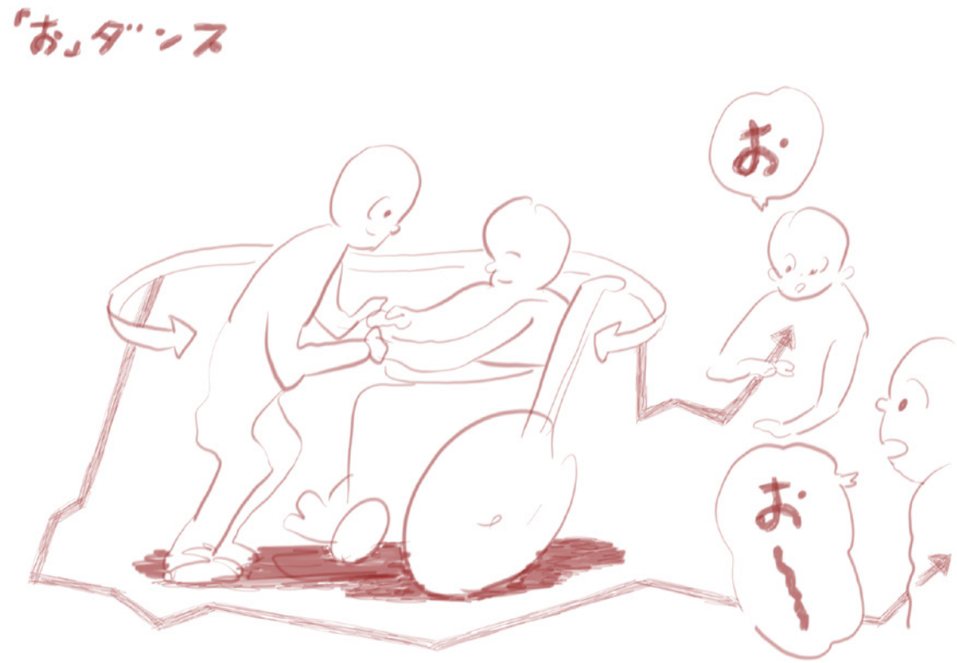
はじめまして、宮田篤です。
ダンサーの大西健太郎さんと小茂根福祉園のみなさんとの『「お」ダンス』プロジェクトの活動をとおして、《TURN版『きらりグッと』をつくる（あるいはそれは何なのか？を考える）》というお話をいただいて、そういうことをしようとしています。
そもそも『きらりグッと』は小茂根福祉園のスタッフが、事故につながる可能性のある行動などを報告してゆく「ヒヤリハット」ということばをもとにひらめいた言葉なのだそうです。
施設の中でどんな運用をしていくか、はこれから考えてゆくそうですが、この言葉があると、小茂根福祉園で日々を過ごしている方の「きらり」としたり「グッと」きたりするような、すぐに言葉にはできないような、何とも言えないものごとを見つけてゆけるような気がします。
何かわからないけれど魅力のある言葉をたよりに、いつもと違う景色をみようとする訳ですから、とてもむつかしそうだなと思いますが、福祉と芸術とのあわいにあるような気もしますし、すてきなことだとも思います。
―― 2017.1.21 日報「あわいをみつめる」
（TURN公式ウェブサイト）より抜粋

宮田は『きらりグッと』を模索する一つの過程として、活動中のメンバーの「グッ」とくる場面をスケッチしている。このスケッチについては大西も「身体の中で起きていることだから、時間が経つと忘れちゃう。こうやって描いておいてくれた絵や線を辿ることで、もう一度身体が思い出せる」と語っている。特に形が残らない『「お」ダンス』において、その時々の仕草や反応をスケッチとして残す宮田の存在は「まさにこのタイミング」にこそ必要だったのだろう。
初めての『「お」ダンス』の日。高田を含めた職員は、一度は体験しているものの、メンバーができるのかどうか、まだ不安を抱えていた。大西も、職員が不安を抱いているということを聞いて、久しぶりの緊張感を漂わせる。
「大西さんが最初に自分が『「お」ダンス』をやって見せたんですよね。『「お」ダンス』も4種類ぐらい用意してくれていて、その中の『手の会話』というのが利用者さんにはすごくわかりやすかったみたいです。利用者さんの反応があったのを見逃さずに『じゃあ、皆さんもやってみましょう。もっと椅子をこっちに引いて』って一気にその場の雰囲気を前に進めました。すごい人だなぁって改めて思いましたね」
「手の会話」とは、二人一組となり、声を発さず、手の動きだけでコミュニケーションをとるダンスだ。片方が右手を上げれば、もう片方も右手を上げる。そういう素直な反応が起きることもあれば、片方が上げた手を包み込むように両手を添える人もいる。全く、反応しない人もいる。
「手と手が触れない、その間の空気を自然と楽しむ様子があって、違和感なく始めることができていた」と高田は言う。これまでのように、職員が説明をして、メンバーの反応を見てから始めていたのとは違い、大西の実演によってメンバーの参加を促すというやり方はこのときが初めてだ。「やってみよう」という空気が、職員とアーティストの間で醸成されていることがよくわかる。
『「お」ダンス』でどういうことが行われているのか、これ以上の説明は、写真と宮田のスケッチ（30-31頁）に頼りたい。

メンバーと『「お」ダンス』を実施している様子

初めての“ひらく”

2018年2月、小茂根福祉園で『Warp Garden（ワープ・ガーデン）』というイベントが行われた。これは、メンバーの保護者を招いて、日々の生活の様子や成果を発表する、というものだ。3回目を迎え、毎回職員が趣向を凝らし、発表プログラムを組んでいる。
ここで、『「お」ダンス』を初めて保護者の前で披露することになった。保護者、という近しい存在ではあるが、小茂根福祉園の中で初めてTURNを“ひらく”ことになる。『Warp Garden』の運営は、高田とは別のグループが担当している。高田が『Warp Garden』の担当者に、TURNをスケジュールに組み込めないかお願いをしていた。
「LANDは外にひらくのが目的です。『Warp Garden』はチャンスだと思いました。でも、『Warp Garden』の担当者たちの中でもいろいろとやりたいことはあるし、準備を進めています。それを邪魔しちゃいけない、という思いはありつつ、チャンスはここしかない、と思ってお願いしました。それで、担当者が快く受け入れてくれたんです」（高田）
職員たちの協力もあり、初めて『「お」ダンス』が保護者の前で披露された。
「保護者の人たちは、普段とはちがう雰囲気のプログラムにすごい喜んでいました。利用者さんの新しい一面を見ることができたのかな、と思います。大西さんにも興味津々で、何か話かけて盛り上がっている親御さんもいましたね（笑）。保護者の理解も進み、結果的にはやってよかったです」（高田）
日頃から、メンバーの活動を保護者に周知しようと職員は努力しているが、「アートは目に見えないものだから、周囲の人に理解してもらうのが難しい」と高田は言う。しかし、百聞は一見にしかず。初めて、保護者にTURNに触れてもらったことで、その理解は一気に進むことになった。



宮田篤による、『「お」ダンス』を表したスケッチ

Episode ⑥

2018年4月―12月

持っている力

職員の経験値

2018年5月末、大西はエクアドルにいた。TURNは海外からの招聘や現地のアートプログラムと連携する形で、2016年から海外展開も行っている。2018年は、エクアドルのラ・トラ地域にあるエクアドル中央大学と連携をした「TURN－LA TOLA」の開催が決まり、大西がアーティストとして参加することになったのだ。
詳細は後述の海外展開についての記事（134～141頁）に譲るが、大西はラ・トラに赴き、新潟県十日町市莇平（あざみひら）に伝わる「シッチョイサ」という盆踊りをベースに現地の人と交流するプログラムを実行した。
この話を聞いて、水谷園長や高田は「海外に行くようなアーティストが、小茂根福祉園に来てくれてたんだ」と喜んだ。
大西が日本を留守にしている間は宮田が小茂根福祉園に赴き、いくつかのプログラムを実行していた。小茂根福祉園の『きらりグッと』とTURN版の『きらりグッと』の違いや共通するところを職員と考えたり、その材料として先行する自身のワークショップ『微分帖』を紹介したりしている。
この時期について、宮田と高田はそれぞれこう語っている。
「小茂根福祉園で日常的に実践している『きらりグッと』とTURN版『きらりグッと』の違いや共通点を一緒に考えることで、TURNが目指しているアートがなんなのか、少し掴めるのではないか、という狙いがありました。それから、『「お」ダンス』でやっていることと『きらりグッと』がどのように関わり合っているのかを考えたいという思いもありました」（宮田）
「宮田さんのワークショップの中で出てきた言葉がとてもわかりやすくて、普段の現場や支援にも重ねられるような内容だったんです。他の職員が『うん、うん』と頷いて聞いていたのがとても印象的でした。宮田さんのわかりやすさもありますし、職員側もTURNや大西さんと出会うことで、経験値やイメージする力が上がっていたんだと思います。非日常の重なりから見えてくるもの、ハインリッヒの法則、宮田さんが考える『きらりグッと』などの話が展開されたことをよく覚えています」（高田）

ジェットコースターのような体験

7月、エクアドルから大西が帰ってきた。小茂根福祉園で、エクアドルでの活動の報告会が行われる。職員やメンバーは、エクアドルがどこなのか、事前に地図で調べたりしていた。「海外から、大西さんが帰ってくる」。みんな、どこかそわそわしていた。
報告会では、現地の人と「シッチョイサ」を踊った体験談が大西から語られる。みんな、興味深そうにその話を聞いている。一通り話し終えた大西は、一ヶ月後に開催されるフェス４について話をし始めた。
「来月のフェス４では、みんなと会場で『シッチョイサ』を踊りたいと思います」
なぜ、フェス４で、小茂根福祉園のメンバーと「シッチョイサ」を踊ろうと思ったのか。そこには、来場者に「旅」をしてもらいたい、という大西の狙いがあった。
「『シッチョイサ』の特徴の一つに、日常の喜怒哀楽を即興で歌い合うという構造があります。その場そのときにしか生まれない踊りの風景が『シッチョイサ』の最大の醍醐味だと思い、小茂根福祉園のエッセンスとかけ合わせたいと考えました。普段の小茂根福祉園には、仕事をしながら、食事をしながら、週に一度のカフェでよそからのお客さんを迎えながら、さまざまな場面で、どこからともなく会話が飛び交っている風景があります。そ

大西健太郎が海外に行っている間、宮田篤と職員は“アート”と改めて向き合う時間を過ごした（写真：野口翔平）

A

TURNフェス４で「シッチョイサ」パフォーマンス中の一枚。メンバーは、思い思いの掛け声を放つ。
大西健太郎は日本神話に登場するヤタガラスに扮して会場を盛り上げた

うした、小茂根福祉園ならではのリズムとキャラクターが凝縮された一瞬一瞬に、よそから来た人は驚かされます。そんなメンバーが『シッチョイサ』を歌うことで、来場者にちょっぴり『旅』をしてもらいたかった。と同時に、来場者の反応を受けたメンバーは、おそらくその反応でさらにかけ合っていくことを面白がってくれるだろうと思っていました。双方からの歌とダンスのかけ合いによって、魅力的な風景が予感できたのです」（大西）
実際に、大西が「シッチョイサ」をメンバーの前で踊ってみると、ほとんどの人が見よう見まねながら踊り始めた。『「お」ダンス』と違い、ある程度の型があるためわかりやすいのだろう。大西が帰国してきていたわずか一ヶ月後に控えたフェス4。急ピッチで準備は進んでいくが、経験値が積まれている現場には焦りや不安は感じられなかった。
フェス４当日。ステージエリアで大西と小茂根福祉園の面々による「シッチョイサ」が披露された。突然沸き起こる盆踊りの掛け声に興味を抱いた観客が周囲を取り巻き、大きな円が自然とできあがる。
その場にいる人をどんどん巻き込みながら、盆踊りの輪はどんどん大きくなっていく。途中、メンバーがマイクの前に立ち、各々自分の好きなものや伝えたいことを「シッチョイサ」の節に合わせて歌い、会場を盛り上げる場面もあった。皆、恥ずかしがりながらも、楽しそうに、そしてどこか誇らしげにマイクに向かっていた。

「シッチョイサ」を終えた大西はこう振り返る。
「予想を遥かに越えるパフォーマンスが繰り広げられました。むしろ予想していたことがおこがましく思えるくらい、一人ひとりが自分の身体と肉声で歌い、その存在感が強烈に場をかき混ぜていました。例えば、あるメンバーが『牛丼、焼きそば、カレーライス…』と歌い出すと、来場者は一瞬ポカンとあっけにとられたような表情をして、その直後どよめきみたいな笑いに転じました。誰も想像しなかった歌だった。好きなものを並べただけなのか、どうなのか。それにしては、こぶしがきいていて険しい表情で歌うものだから、その場にいた人は皆、笑いともシリアスとも怒りとも、どんな感情の形容詞にもつかない心の崖っぷちみたいなところに立たされる。『どうなる、どうなっちゃう?』…。それで、歌いきってみせ、どっと笑いになって引っ張り上げられるんです。ジェットコースターみたいな体験でしたね（笑）」
TURNを始めたばかりの頃からは、想像もできないような光景がそこにはあった。小茂根福祉園のメンバーが持っている力が湧き出るかのように、「シッチョイサぁ！」という掛け声が、会場内に大きく響き渡った。

Episode ⑦

育み始めた夢

2015年から始まった小茂根福祉園とTURNは、紆余曲折を経ながら、四年間という、決して短くない時間をともにしている。アーティスト、メンバー、職員、それぞれの関係性も時間とともに変わり、同時にTURNというものの受け止め方も、また、確実に変わってきている。

それぞれの“TURN”とは…。

「最初はね、全然わからなかったんだけど。アルミホイルに巻かれたり、『みーらいらい』を持って歩いたりしているうちに、何となくTURNを感じられるようになってきたかな、って思ってます。『全部を理解しなきゃいけない』『芸術とはこういうものだ』という先入観がなくなっていった。TURNに参加すると、不思議な心地よさが残るんですよね。身近な人にも、その感覚を味わってほしい。でも言葉で説明するものでもないから、今私が園長を務める施設にもアーティストに来てもらおうかなぁなんて考えているんです」（工藤前園長）

「いつもスクエアの枠に当てはめて物事を考えていたんですけど、TURNではそれをやめました。我々職員は、例えば『一人で軽作業ができるようになる』『買い物ができるようになる』っていうわかりやすい枠の中で利用者さんをサポートすることが多いです。TURNには、それがない。ありのままでよし、どんな表現でもよし、そういう考え方がすごく貴重だと思ったんです。私の立場だと、制度とか規程の縛りの中で、うまく施設運営をしなきゃという意識になりがちです。それを全部取っ払って、『そのままでよし』という時間を与えてくれるTURNはすごくいいなって思う。私やアート活動推進委員のメンバーだけじゃなくて、他の職員にももっとこういう体験をしてもらえるように、これからもフォローしていきたいです」（水谷園長）

「先ほど、利用者さんの経験値について話しましたけど、ここ数年である利用者さんが刺繍を覚えたんですね。TURNが、直接的に影響しているのかわからないですけど、利用者さんにとって『新しいことに取り組む』ハードルが、少しずつ下がってきているように感じます。フェスなどでは、パフォーマーとしての可能性も見せていますしね（笑）。それから、利用者さんだけでなく、職員も経験値を重ねているはずです。“直接的な支援”だけでなく、利用者さんを温かく見守る人が一人でも増える“間接的な支援”の醸成も職員にとっては大切。でも、なかなかそうした機会がないのも現状です。TURNなら、それができる。若い職員や他の施設にもこうした機会を広げられるように、まずはこの小茂根福祉園での活動をしっかりと続けられるようにしたいですね」（高田）
この、“間接的な支援”については、水谷園長も言及している。
「地域にひらくと言っても、いろいろな意味があると思います。小茂根福祉園としての“ひらく”というのは、例えば利用者さんが一人で外に出てしまった時に、施設に電話をかけてくれる地域の人、見守ってくれる人が増える、ということ。その為には、利用者さんに対する理解を広める必要もありますし、地域の人とのコミュニケーションも重要になってきます。その一つのきっかけにTURNがなればいいと思っています」（水谷園長）

「だじゃれが好きなんです、ぼく。だじゃれは、何かと何かが結びついてできるもの。そういう構造を生み出すのが好き、と言ってもいい。例えば『きらりグッと』と『ヒヤリハット』という言葉がだじゃれによって出会ってしまったら、ぼくの中ではもうそれは切り離すことができない。AとBという言葉のあいだをイメージが行き交って、お互いに連想し合うことで、イメージが増幅していく。『「お」ダンス』にもその可能性を感じているんです。誰かと誰かが出会って、向き合って、何かが生まれる。構造は一度できあがってしまえば、100年後にも残ります。そうしたものを生み出せるように、今メンバーや職員の皆さんと一緒に歩んでいるのかもしれません」（宮田）

写真：野口翔平

「TURNは、まず何よりもメンバーと職員が新たな関係を築く場であってほしいと思っています。アーティストみたいな立場の人や園関係者以外の人が参加することで、職員とメンバーの普段の関係性がぶれた時に、相手や自分の新たな一面に気づく。他者が介入することで慣れ親しんだ関係がちょっと回転して、別の側面が見えてくるイメージ。小茂根福祉園の職員の皆さんは、利用者さんのいろんな表情を見つけて即興演劇のように反応する達人だと思うんです」（大西）
大西は、一呼吸おいて、話を続ける。
「小茂根福祉園のみんなと興行を開催したいんです（笑）。『「お」ダンス』はそのための稽古でもある。初めての人は、『「お」ダンス』をどうやって見ればいいのか、わからないと思うんですよね。二人が向き合って、手で会話している。それを取り囲む人たちが、時折「お」という掛け声をかける。それを、観客が取り囲んで見ている。観客はどうしたらいいかわからないでしょうね。しかも、ダンスをしているのは、常に想像を超えてくる小茂根福祉園のメンバーたちですから。『自分も声をかければいいの？』『ただ見てればいいの？』『次はどんな動きが起きるの？』いろんな感情が渦巻くはずです。800人の劇場で、『「お」ダンス』をやりきって、観客がみんな戸惑い、衝撃を受け、立てなくなっちゃう。そんな光景が生まれたらいいなと思いますね」（大西）

人が生まれつき持っている力を、TURNは信じている。アートはその力を引き出すことができる、と信じている。小茂根福祉園を舞台に、アーティスト、メンバー、職員はアートを通じた交流を続け、いつしかともに夢を育み始めた。これから先、どうなっていくのかは誰にもわからない。しかし、想像をいつも超えてくるメンバーのことだ。きっと、誰も見たことのない光景に出会わせてくれるだろう。

長瀬光弘
ディレクター、エディター。1987年、岐阜県生まれ。明治大学卒業後、印刷会社営業職を経て、制作会社でディレクター、エディター職を経験。2018年よりフリーランスに。Webメディアのディレクションや情報誌、ブランディングツール制作など幅広く活動中。現在、子育てのために岐阜と東京の2拠点生活。

TURN

2018

TURN交流プログラム

TURN交流プログラム①

ダンサー森山開次の休日としてのTURN

「休みの日に遊びに来てください」
TURN運営スタッフのこの言葉から、ダンサー森山開次のTURN交流プログラムは始まった。森山は、2016年から1年に二、三度のペースで、多忙を極めるスケジュールの合間を縫って、カメラマンの冨田了平をパートナーに福祉施設へ赴いては、数日間の“休日”を過ごしている。
森山の知名度の高さから、交流前の施設は高揚感と緊張感に包まれる。しかし森山の人柄と佇まいは、施設のいつも通りの日常を肯定してくれているようで、その不安はたちまち払拭される。一方で施設の利用者たちはというと、そうした職員の不安や緊張をよそに、“金髪で長い髪のお兄さん”に縦横無尽にさまざまな強度で関わってくる。施設の人たちや空間を相手に、ふいに生まれ、流れ、繰り返される即興性の高い掛け合いの数々は、森山開次というアーティストに、見学でもリサーチでも、本番でもない新たな出会い方の模索を促している。
ここでは、森山が近年行ったダンスを介した交流の一部を紹介する。

写真3点：冨田了平が撮影した映像から抜粋

2017年 冬　こころみ学園（栃木県足利市）

人里離れた場所で、野良仕事とともにある知的障害者の人たちの暮らしに身を置いた。1969年に設立されたこころみ学園は、1980年にココ・ファーム・ワイナリーを開設。現在、国際線ファーストクラスで採用されるような日本ワインを生産していることでも知られる。白い吐息と雑巾がけ。森の中で運ぶ椎茸の原木。炊事、洗濯。そして山の斜面に切り開かれた葡萄畑でのダンスと、観客は一匹のヤギ。

2018年 春
クラフト工房 La Mano（東京都町田市）

紡ぐ、染める、縫う、織るといった施設の日常の作業とその作業に打ち込む障害のある人たちのLa Mano（スペイン語で「手」）。森山自身が手作業を得意とする。1日目に紡いだ糸を腕に巻き、2日目に染めたTシャツをまとって踊った。

2018年 秋
金町学園（東京都葛飾区）

聴覚に障害のある子供たちが暮らす金町学園には、音と静寂が同居する。声も含め全身を使ってコミュニケーションを取るかと思えば、何かに夢中になって作業をするときはぴたっと静まり返り、そのコントラストに驚く。目と手に意識を行きわたらせて行うコミュニケーションに、ダンスを感じた。

［これまでの交流先］

2016年12月14～15日
認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ（静岡県浜松市）

2016年12月15～16日
みずのき（京都府亀岡市）

2016年12月21日
きょうされんリサイクル洗びんセンター（東京都昭島市）

森山開次

ダンサー・振付家。2001年エディンバラフェスティバルにて「今年最も才能あるダンサーの一人」と評された後、演出振付出演するダンス作品の発表を開始。2007年ヴェネチアビエンナーレ招聘。2012年発表『曼荼羅の宇宙』にて芸術選奨文部科学大臣新人賞ほか三賞受賞。2013年スポーツ祭東京（東京国体）開会式 式典演技メインパフォーマー。平成25年度文化庁文化交流使。2018年SLOW MOVEMENT『The Eternal Symphony 2nd.mov.-』を振付。主な作品に『LIVE BONE』『サーカス』『不思議の国のアリス』テレビ『からだであそぼ』など。

友達の家に遊びにいくように

写真家の池田晶紀と川瀬一絵は、TURN初年度から3年間、昭島市にある「きょうされんリサイクル洗びんセンター」※との交流を行っている。びんやリユースカップの洗浄などを行う施設だ。お互いが自己紹介をするかのようにポートレート撮影を行った「はじめまして」の初年度、もう一歩相手のことを知るためにそれぞれの好きなことをテーマに撮影した次年度、ある一人のメンバー（利用者）の好きなことに深く向き合った3年目。相手に寄り添うことを何よりも大切にしながら、積み重ねてきた信頼関係を基盤とした交流が今も続いている。

4年目となった今年度は、きょうされんリサイクル洗びんセンターで働く人たちが生活する「グループホームフラワー（以下､フラワー）」に出向くこととなった。「きょうされんリサイクル洗びんセンターで働いている人たちの普段の暮らしぶりを見てみたい」という川瀬の関心がきっかけだ。

男女6人のメンバーと“世話人”と呼ばれる職員がともに暮らしているフラワーでは、帰宅後にそれぞれのペースで洗濯をして風呂に入り、みんなで食卓を囲んで夕ごはんを食べる。食後はテレビを見ながらおしゃべりしたり、それぞれ自室で趣味を楽しんだり。池田と川瀬は、そんなプライベートな空間へ、まるで友達の家に遊びにいくかのように自然に通い続けている。フラワーに住んでいるメンバーも、ごく当たり前に、でもちょっと嬉しそうに二人の訪問を受け入れていた。これまで重ねてきた信頼関係と、「家」という場所だから見せる緩んだ表情が印象的な、それぞれのプライベートで穏やかな一面に出会う時間となった。

4年目にしてもなお発見の尽きない両者の交流は、アーティストと担当職員がお互いのやりたいことを密にやりとりできる関係性があるからこそ成り立っている。池田、川瀬、きょうされんリサイクル洗びんセンターは一つのチームで、これからも新たな交流を続けていくだろう。

※ 1977年に結成された共同作業所全国連絡会（現きょうされん）と、東都生活協同組合が1994年に立ち上げた、社会福祉法人きょうされんが運営している。

（3点とも）「フラワーの日常より」© Kazue Kawase

シリーズ休日の写真館「パジャマでおじゃま」© Masanori Ikeda 2018

「フラワーの日常より」© Kazue Kawase

池田晶紀

写真家。1978年横浜市生まれ。1999年自ら運営していた「ドラックアウトスタジオ」で発表活動を始める。2003年よりポートレイト・シリーズ『休日の写真館』の制作・発表を始める。2006年写真事務所「ゆかい」設立。2010年スタジオを馬喰町へ移転。オルタナティブ・スペースを併設し、再び「ドラックアウトスタジオ」の名で運営を開始。

川瀬一絵

写真家。島根県出雲市生まれ。島根大学教育学部、東京綜合写真専門学校卒業。2007年より写真家・池田晶紀の主宰する写真事務所「ゆかい」に所属。テーマを定めずに衝動的に撮り、それらを編集しながら衝動の訳を探るような作品づくりをしている。

テンギョウ・クラが
TURNと出会いカルチャーダイブする

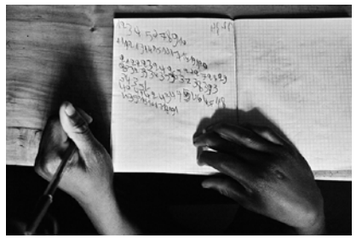
テンギョウ・クラは、ヴァガボンド（放浪者）を自身の生き方としている。世界中を放浪しながら出会いとその物語を紡いできた彼が、昨年度からTURNのさまざまな交流先へも滞在の幅を広げてきた。彼のカルチャーダイブは、常に新しい視点と刺激を両者にもたらし、豊かな出会いの時間になる。訪問先では、表現者としてではなく一人の人としてその場に入り、ひたすらにその時間と出会いを楽しむような独自の「過ごし」を行っている。
何かを起こすのでなくその場に身体一つでカルチャーダイブし、その場や人々に対し全身で関心を持ち愛情を向けるヴァガボンドと出会うことで、異質なものとの出会いに対して警戒が解かれ希望を感じることができるのだ。

2017年度

アルス・ノヴァ、のヴぁ公民館、ハーモニー、小又の里、たまりば、桃三ふれあいの家、かがやき亭、はぁとぴあ原宿、綾瀬ひまわり園と性質や地域の異なるさまざまな場を訪れた。

2017年秋から半年間

ジンバブエやタンザニアなど６カ国のアフリカ諸国を放浪したテンギョウは、聴覚、視覚、知的、身体などさまざまな障害を持つ子供たちが通う施設、アルビノ当事者の団体、孤児院といった福祉施設やコミュニティを訪問した。



「Monochrome Photography Awards 2018」において佳作に入る

障害を持つ人たちとの出会いも多くなったアフリカ滞在は、出会いを次の出会いへとつないでいくテンギョウらしいカルチャーダイブとなった。

2018年春

その後、アフリカでの経験から、日本の聾の子供たちと出会ってみたいという思いが生まれ、2018 年の夏に葛飾区の金町学園との交流が実現した。金町学園は、２歳から18歳までの聾の子供たちが暮らす場だ。子供たちが行う、身体や表情をいっぱいに使ったコミュニケーションは、アフリカの子供たちと変わらないと感じることもあったという。

2018年冬 (1)

京都のNPO法人スウィングを訪れた。「ユーモアあふれる、ゆるやかながら芯の強い世界観を持った活動、メンバー、施設職員の皆さんと出会い、その雰囲気の中にいるだけで安心感に包まれる体験をした」とテンギョウは言う。最終日にはテンギョウもスウィングの代名詞的活動「ゴミコロリ」のキャラクター衣装を着て1日過ごしてしまうほどスウィングの魅力にどっぷり浸かったカルチャーダイブとなった。

2018年冬 (2)

テンギョウはさらにそこから、滋賀のやまなみ工房へと向かった。素朴で丁寧な職員に囲まれ、解放された雰囲気の利用者たちとの時間は、とても穏やかであった。場の雰囲気は大きく異なるが、やまなみ工房でもスウィングで感じた「安心感」があったという。その安心感はおそらく、利用者の日々の安心と喜びが、それぞれの活動の原点となっていることから生まれているのだろう。

テンギョウ・クラ

教師・コミュニケーター・ストーリーテラー。ヴァガボンド（そこに属さない者）を自身のライフスタイルとして、国や地域を問わず移動と滞在を繰り返しストーリーを制作している。滞在した地域の人々との交流を通じて在住者と来訪者の関係性に揺らぎを生み出すカルチャーダイブをとおして、そこに多様なコミュニケーションの可能性を見出す。国際交流についての小論文で文部大臣賞（当時）受賞。教師としてはノルウェーで初の公式原爆展を企画・開催、ラトビアの首都リガで外国人教師として初めて最優秀教師賞にノミネートなど。

「公園」に寄り添う人たちとの出会い

アーティストの岩田とも子は、植物や地形など身近な自然物に関心を持ち制作を続けている。最初の打ち合わせで、まちの中にある自然環境であり、人や生き物が行き交う公園に、毎日清掃するために通っている人たちがいることに関心を持ち、岩田と「富士清掃サービス」との交流がはじまった。町田市にある社会福祉法人富士福祉会が運営する富士清掃サービスでは、公園やさまざまな施設の清掃業務を請け負っている。岩田は、2018年春からそのメンバーとともに、忠生公園の清掃活動に参加。雨の日も雪の日も、ほぼ365日公園を清掃し続けるメンバーだからこそ知っている植物や人々の様子の移り変わりなどを、休憩時間のささやかな対話や所作から丁寧に拾い上げ、スケッチや日報に残していった。これまでアート活動などを行っていない富士清掃サービスにとって、少々緊張しながらのスタートだったが、岩田の日報に現れる働く人たちの静かな雰囲気や独特の魅力によって、「自分たちの当たり前な日常がまるで宝物のように見えてきた」と担当職員から驚きと喜びの声が上がった。

岩田が描いた公園のスケッチ

作業の参加は初日ということで私は少し緊張して硬い笑顔になった。緊張するとそんなふうに顔にでてしまうのだが、朝会で入所者さんたちの輪の中に入ると自然とその表情が解けた。はっきりと理由はわからないが漂っているリズムが多様であるせいかもしれない。
―― 2018年7月17日の日報より

途中の休憩でベテランさんと少しだけ言葉を交わす。少し早口な方なので私はそれとなく自分も早めに話してみたらなんとなく伝わりやすかったような気がした。気のせいかもしれないけど同じ波長にのれた気がしてちょっとうれしかった。
―― 2018年8月24日の日報より

何かいつもと違うことがあった場合もあいまいにせずに共有するというのはここで大事にされていることのように思った。それはここに限らず私自身の他の現場でも必要とされることな気がしている。
―― 2018年9月28日の日報より

清掃活動中に拾ったゴミとそれに似ている自然物

岩田とも子

1983年神奈川県出身。2008年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。身近な自然物の観察・採集から宇宙的なサイクルを体感するような制作をするアーティスト。生き物に対する素朴な視点、そこからはじまる学びと表現を大切にしている。

TURN LAND

TURN LAND ①

ハーモニー

世田谷区上町にある「ハーモニー」は、特定非営利活動法人やっとこが運営する就労継続支援Ｂ型事業所。統合失調症や躁鬱病、パーソナリティ障害、発達障害などを抱える30人ほどのメンバーが登録し、作業をしたり、趣味の活動をしたり、思い思いに過ごせる場所を提供している。また、幻聴や妄想などの症状を持つメンバーの悩みを共有するミーティングを設けたり、メンバーの体験をもとにした「幻聴妄想かるた」を製作したりするなど、独自の切り口で活動を展開している。

TURNとの関わり ——— TURNには初年度の2015年から参加。これまでにアーティストのジェームズ・ジャック、サム・ストッカーと交流プログラムを実施し、メンバーとともに表現活動を行ってきた。TURNフェスにも毎年参加している。
2017年度からはTURN LANDの取り組みを始め、アーティストの深澤孝史とともに「かみまちハーモニーランド」を企画。深澤がハーモニーに通い、メンバーにインタビューを行う中で、「幻聴や妄想も、その背景には彼らが生き延びていくための原始の信仰に似た思いがある」「ハーモニーには、彼らの数だけの複数の現実が共在している」というインスピレーションを得る。そこから、複数の現実が折り重なって存在する「かみまちハーモニーランド」を構想し、誰もが参加できる場所としてハーモニーをひらいた。

ハーモニーのメンバーからそれぞれの体験について話を聴くアーティストの深澤孝史（左端）

「かみまちハーモニーランド」が生まれるまで

深澤孝史とハーモニーの7ヶ月

2017年　8月

・共通の知人である田中みゆき（キュレーター）の紹介をとおして、
　深澤とハーモニー施設長の新澤が初対面

9月27日（水）

・深澤はハーモニーとの交流初日、愛の予防センター（53頁を参照）に参加
・メンバーそれぞれのエピソードやゆかりの地についてヒアリング
・ハーモニーの周辺をまち歩きしながらリサーチ

11月6日（月）～11月10日（金）

・ハーモニーに通いメンバーと交流を深める
・メンバーにインタビューを行い、映像で記録する
・TURN LAND開催に向けて作品制作

12月11日（月）

・TURN LAND準備室を開設
・TURN LANDに関わるボランティアへの説明会を実施

12月12日（火）～15日（金）

準備室メンバーとともにメンバーへインタビュー
・企画を検討
・伊藤萌里（デザイナー）と
　TURN LANDパンフレット制作の打ち合わせ

2018年　1月11日（木）

・メンバーの相関図づくりワークショップ
　深澤がメンバーにインタビューした、
　「それぞれの生きる現実」を図解した相関図にする

2月中旬

・TURN LANDオープンに向けて準備大詰め

2月23日（金）～3月3日（土）

「かみまちハーモニーランド」オープン！

“地域”ってなんだろう？

新澤克憲（ハーモニー施設長）

ハーモニーには幻覚や妄想などの精神症状やさまざまな心配事や周囲との関係に苦労している人たち（メンバー）がやってきます。いわゆる就労支援的な作業もしていますが、ハーモニーが日々、暮らしていくうえでの拠り所（＝居場所）になるような活動を大事にしています。
2008年からメンバーたちの日常のさまざまなエピソードを題材として「幻聴妄想かるた」をつくり始めました。「脳の中に機械が埋め込まれ、しっちゃかめっちゃかだ」「いつもナチュラルハイ」などのユニークな「かるた」により、ハーモニーの活動を知ってもらえる機会が増えました。

2017年はTURN LANDに参加しました。福祉現場で仕事をしてきた自分には、自分たちの地域でのアートプロジェクトに期待するものがありました。
それは「ハーモニーが何かを発信することで、まちで暮らす当事者たちが生活をする場（＝地域）で直面する日々の生きづらさを緩和させていくことはできないだろうか」ということでした。例えば「友達をつくることの難しさ」や「退院後の住居確保の困難」であったり、「まちの医療機関でなかなか大変さをわかってもらえない」ことであったり、こういうことに共通する根っこの事柄、精神障害に対する先入観を解いて、心のトラブルについての新たな視点を示す手立てとして、アートの力を借りることができないかということです。

TURN LANDでパートナーとなるアーティストは、メンバーたちの「妄想力」に負けないほどの想像力で「目に見えないものを実体化すること」が得意で、かつそれをメンバーたちと楽しみながらやっていける人がいいなと漠然と思っていました。
深澤孝史さんを紹介していただき、「幻聴妄想かるた」の新作の素材となるメンバーたちのエピソードをたくさん持って会いに行きました。深澤さんのプロジェクトには「気がつくと人と人が出会うような仕掛け」があったり「場所とその場所にまつわる時間の流れ」が取りこまれているように感じられ、ハーモニーが自分たちの施設を地域にひらいていく上で必要な力が含まれているように感じたのです。
わたしたちはプロジェクトの名称を『世田谷信仰振興センター』としました。「幻聴や妄想も背景には彼らが生き延びていくための原始の信仰に似た思いがあるのではないか」という深澤さんの仮説には意表を突かれましたが、私の日々の実感にも合致していました。幻聴や妄想は、精神疾患に伴う症状ではありますが、事故など生命が危うくなる事態、強い心理的ストレス下においても体験するといいます。メンバーたちの体験した不思議な話を聞いてみると、幻聴や妄想が自分自身の過酷な境遇を生き延びるために与えられたギフト（贈物）のように思えることもあるのです。「幻聴」や「妄想」などの精神症状と「信仰」に共通する「ともに生きるための根源的な力」を見つけることは精神障害というものの新しい捉え方につながるかもしれないと考えたのです。

施設を公開してのアトラクション、2回の講演、3回のツアーなど多彩な内容を持つプロジェクトは、嵐のように過ぎていきました。私自身も本当に得がたい刺激を受けた9日間でした。
心残りがあるとすれば、『信仰振興センター』という名称が事務局の判断で使えなくなり、紆余曲折の末『かみまちハーモニーランド』と変更せざるを得なかったことです。そのためスケジュールがずれこみ、地域への告知が遅れました。「地域」をテーマにした企画であったにも関わらず、最終的に地元からの来場者が少なかったことが何より残念なことでした。

新澤克憲
精神保健福祉士、介護福祉士。1960年広島県生まれ。東京学芸大学教育学部卒業後、デイケアの職員や塾講師、職業能力開発センターでの木工修行を経て1995年共同作業所ハーモニー（現在は就労継続支援B型事業所）開設と同時に施設長。アウトサイダーフォーク・パンク・バンド、“ラブ・エロ・ピース”のギター担当。

地域・社会に無意識をひらく ―生き抜く力を学べる福祉拠点としてのハーモニーランド―

深澤孝史（アーティスト）

ハーモニーとプロジェクトができると聞いたときに初めに思ったのが、東京都の推進する多様性とは根底の部分での相容れなさ、ある種の矛盾が、精神障害の性質として備わっているのではないかということです。例えば、ハーモニーにはROさんという方がメンバーにいて、彼は「写ルンです」や「光ファイバー」を発明しました。他にも東大総長もいますし、神と婚姻関係を結んだ世界の救世主もいます。もちろん本人以外はそんな事実はないと考えています。しかし彼らがそういう認識の現実で生きていることも事実であり、それらは当事者にとっての「固有の現実」とも言えるのです。

私はメンバーからインタビューをさせていただきとても考えさせられました。
精神障害を発症する方の多くは、虐待の体験やなんらかのトラウマ、受け入れがたい過去（現実）があります。そうした受け入れがたい現実で死なないために、火事場の馬鹿力が発動するかのごとく、意識と無意識を隔てる殻が破られ、それぞれの受け入れがたい現実と無意識が結びつくことで、「固有の現実」を再創造することをしてきた人たちなのではないかと。その再創造された現実を、当事者以外の私たちは、妄想と呼んでいるではないだろうか。
私は、「固有の現実」というものを創造せざるを得なくなるような限界ギリギリに発動される、無意識を知覚できるようになる力を、「信仰」と呼ぶことにしました。自らの意識を超越し、無茶苦茶な現実をなんとか肯定することで、絶望せずに生きる力を手に入れている。信仰は宗教以前の話で、「信仰」が人間の普遍的な機能だとしたら、「宗教」はその機能を応用した装置のようなものだと思います。

そうしてぐるぐる考えていたときに、「世田谷信仰振興センター」（宗教を想起してしまうということで「かみまちハーモニーランド」と企画名は変わりました）という企画の名前が頭の中に浮上してきました。彼らの「固有の現実」を認めることが、彼らの生存権とつながっていると考えたからです。そうだとしたら国は、生存権の向上に努めなければなりませんので、公的に生きる力としての「信仰」の力の増進を進めなければいけません。
というわけでハーモニーを、「信仰」のプロフェッショナルであるメンバーから生きる力を学ぶことができる福祉拠点として開くことができたら面白いのではと思ったのです。
現在の都市の多様性の捉え方は、一つの現実、一つの都市社会を前提にして、その上で多様な人が安心、安全に都市のインフラを享受して過ごせる社会というものを目指していますが、ハーモニーでは、多様性というよりは、多様な現実と向き合う力が必要になります。「信仰力」とは「矛盾力」とも言えるかもしれません。

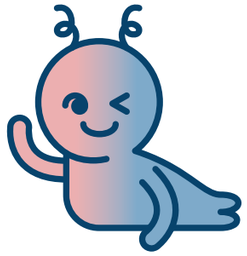
公的な事実から生じたものでも、人間性を失っているものや判断はたくさんあふれているし、逆に虚構やフィクションと捉えられているものでも、人間性に根ざしているものもたくさんある。精神障害に限らず、現代社会において私たちは矛盾について向き合っていかなければいけない局面が益々増えているように思います。ハーモニーはそういった「信仰力」＝「矛盾力」を学ばさせてくれる場所なんだと思います。

深澤孝史
美術家。1984年山梨県生まれ。場や歴史、そこに関わる人の特性に着目し、他者とともにある方法を模索するプロジェクトを全国各地で展開。主な活動として、タイ南部の独自の暮らしを続けている村で行った《Football field for buffalo》（2018、Thailand Biennale Krabi）、漂着神伝説が数多く残る奥能登で、漂着廃棄物を現代の漂着神として祀る神社を建立した《神話の続き》（2017、奥能登国際芸術祭）、郊外の団地で住民の「とくい」を運用する《とくいの銀行》（2011〜、取手アートプロジェクト）など。

誌上再現！

かみまちハーモニーランド

かみまちハーモニーランドはさまざまなハモ人（はもじん）が住んでいる不思議なランドだよ。このランドはハモ人の数だけ「現実」が存在する不思議な世界で、それらの「現実」が折り重なっている場所なんだ。 僕たちは普段の暮らしで現実は一つしかないと思い込んで 暮らしているけれど、本当はたくさんあるんだ。多様な「現実」を信仰しているハモ人たちがときに楽しく、ときに苦しく暮らすハーモニーランドに 一緒に迷い込んでみよう！



実 施 概 要

開催日：2018年 2月23日（金）～ 3月3日（土） ※2月25日(日)はお休み
場所：ハーモニー（東京都世田谷区世田谷3-4-1 アップビル 2F）、ハーモニー近隣

プログラム一覧

① **オープニングイベント**
2月23日（金） 18:00 ～ 20:20
トーク「私たちが複数の現実を信じるということ」

② **愛の予防センター**
2月 24日（土） 13:00 ～ 15:00

③ **1日体験＆現実アトラクションスタンプラリー**
2月 26日（月）～ 3月 2日（金） 10:00 ～ 16:00

④ **田中さんと行く 池尻、宝拾いツアー**
2月 26日（月） 13:00 ～ 15:30

⑤ **金原さんと行く 水戸黄門殺害現場検証ツアー**
3 月 2 日（金） 13:00 ～ 15:30

⑥ **クロージングイベント**
3月 2日（金） 18:30 ～ 20:30
トーク「声と共に生きるということ」

⑦ **オプショナルツアー**
3月 3日（土）

会期中に会場で配布したパンフレット

① オープニングイベント

トーク「私たちが複数の現実を信じるということ ー幻聴・妄想と信仰をめぐって」
ゲスト：秋田光軌（浄土宗大蓮寺副住職。浄土宗應典院主幹・應典院寺町倶楽部事務局長）

かみまちハーモニーランドのオープニングイベントとして、大阪から浄土宗の僧侶である秋田光軌をゲストに招いた。秋田は、仏教の教えを伝えるのみならず、哲学対話や演劇的手法などを交えて、人が死生への問いに取り組むことができるよう活動を行っている。自身の拠点である應典院での活動について紹介いただくとともに、幻聴・妄想と信仰について学び、考えるトークを行った。
秋田は「幻聴や妄想だけではなく、人それぞれに信じている物語が存在していて、例えば愛や正義などもそれぞれの信じるもう一つの物語である」と語った。会場からは「アートは現実を多視的に見るので、『思い込み』と共通性がある」という意見も挙がり、幻聴・妄想と信仰、そしてアートについて、各々が考えを巡らす時間となった。

② 愛の予防センター

「愛の予防センター」とは、ハーモニーで毎週水曜日に行われているミーティングのこと。施設長の新澤がファシリテーターを務め、メンバーが近況や苦労話について報告し、困ったことがあればどうしたらいいかを皆で話し合っている。かみまちハーモニーランドでは、来場者も一緒に愛の予防センターを体験。一人で悩んでいることも、誰かに話すことで解決策が見つかったり、前向きに受け止められたりして、来場者も愛の予防センターの効果を実感。終始笑いが絶えない和やかな雰囲気の中、ミーティングは行われた。
後半は、メンバーの経験をもとに作られた「幻聴妄想かるた」でかるた大会を実施。メンバー自ら読み札を読み上げ、そのときの状況や心境について話していった。グループにわかれて競い合い、一番多く札を取った人には、「田中さんと行く 池尻、宝拾いツアー」で参加者と拾ったお宝がプレゼントされた。

8月17日（金）～19日（日）に開催したTURNフェス4では、TURN LANDの活動記録を展示するとともに、最終日には、「幻聴妄想かるた」の第3弾を紹介するトーク＆かるた大会を行った。前半は、かるた制作に携わった編集者の米津いつかと佐藤恵美、デザイナーのライラ・カセムをゲストに招き、制作の裏話を伺った。後半は、来場者と一緒にかるた大会を実施。お手つきが頻出する白熱したかるた大会となった。

C

［写真上］メンバーの数奇な体験を題材にした「幻聴妄想かるた」［写真下］フェス4の会場で行ったかるた大会

③ 1日体験 & 現実アトラクション

会期中の平日は、かみまちハーモニーランドをマイペースに味わうことができる1日体験を実施。参加者はそれぞれ多様な現実を持つメンバー（ハモ人）たちとお話ししたり、お茶を飲んだり、まったり過ごしたりする。ハモ人たちの生きる現実を体験できる「現実アトラクションスタンプラリー」も実施。一つ体験するごとに「ハモちゃん」スタンプを押して、スタンプが集まった分だけハモ人に近づくことができる仕組みだ。

現実アトラクションを体験するごとにオリジナルスタンプが押してもらえる

④ 田中さんと行く 池尻、宝拾いツアー

ハーモニーのメンバー田中さんは夏になると躁状態になり、ハイテンションで寝られない日々が続く。ある大雨の夜、躁状態が極限になった田中さんは、お母さんの目を盗んで家を飛び出し、池尻のまちをさまよった。「池尻」は窪地で昔は大きな池だったようで、雨の日にはお宝が流れつくという伝承がある。その伝承通り、田中さんはお宝（乳母車にのせたぬいぐるみ）を発見！ そのお宝を手に、友人宅を突然訪ね驚かせる…。そんな実際にあった出来事を追体験するのがこのツアー。「あのときはハイテンションだったので…」と当時を振り返る田中さんと一緒に池尻を歩く。50年以上池尻で暮らす田中さんから土地の歴史を教えてもらないながら、宝探しツアーを楽しんだ。

田中さんのガイドのもと、ツアー参加者と一緒に池尻を散策

⑤ 金原さんと行く 水戸黄門殺害現場検証ツアー

ハーモニーのメンバーの金原さんは、前世では古代エジプトの女性と結婚。彼女との間にできた三人の子供たちは現代へと渡り、FBI長官、大リーガー、ピアニストなど、いずれも大成し活躍しているという。ある日、ハーモニーの近くにある自動販売機のボタンを押したら、惑星ゴアを爆破してしまったそう。実は悪の組織の代表であった水戸黄門を、羽根木公園で射殺したという経験も持つ。ツアーでは梅の花が咲く羽根木公園で、金原さんが実際に水戸黄門と戦った現場を訪れ、そのときのエピソードを振り返った。

「恋人ウォント！」と叫んで水戸黄門を仕留めた金原さん。参加者全員でそのときのポーズを再現

⑥ クロージングイベント

トーク「声と共に生きるということ」

ゲスト：藤本 豊（ヒアリング・ヴォイシズ東京例会主催／立教大学コミュニティ福祉学部、明治大学文学部 兼任講師）

最終日には、1週間の出来事を振り返り、メンバーや参加者から意見や感想を出し合った。さらに、幻聴の当事者とヒアリング・ヴォイシズ東京例会を主宰している藤本豊をゲストにお招きしてトークを実施。

———

ヒアリング・ヴォイシズとは、オランダの社会精神医学者マリウス・ロウムは、「幻聴」を治療の対象ではなく誰にでもある体験と考えて、声が聞こえる人々と一緒に、聞こえる体験を理解し、共有化する作業を始めた。これがヒアリング・ヴォイシズの始まりである。声が聞こえる人の体験を受け止め、その体験を真摯に聞くことで、声に振り回されずに暮らしていける対処方法を一緒に考えている。

———

幻聴は、聞こえている人にとってはその人が体験している現実であるという点で、夢と同じ。怖い思いをしてもそれが夢だとわかれば本人も安心する。体験している現実を否定するのではなく、どう共存していくかを考えることが大事だという話があった。また、自分の思っていることを言える場、語れる場があることの大切さについて、参加者からの感想が挙がり、1週間の締めくくりにふさわしい濃密なクロージングイベントとなった。

かみまちハーモニーランドを振り返るアーティストの深澤孝史と新澤施設長

オプショナルツアー

⑦ 益山さんと行く静岡ツアー

最終日にはオプショナルツアーとして、世田谷区を飛び出し、ハーモニーのメンバー益山さんと一緒に静岡ツアーを行い、静岡市を訪れた。静岡出身の益山さんは、静岡が日本国から不当な扱いを受けているという考えのもと、首都が静岡に移転されることを望んでおり、盗聴されているのを利用して静岡のよさをアピールするなど静岡の普及活動を行っている。ツアーでは、益山さんの案内のもと静岡県庁や葵タワーなどを巡った。

詩人としても活動している益山さんと一緒に静岡を巡った

クラフト工房 La Mano

東京都町田市にあるクラフト工房 La Mano（ラマノ）は、1992年に心身に障害を持つ人が働く場として設立された。「La Mano」とはスペイン語で「手」を意味し、「ものづくりや手仕事で社会とつながる」をモットーに、天然素材を使った染め、織りの製品をつくっている。また、アトリエ活動としてアート作品の制作やグッズづくりを行うほか、一般の人が参加できるワークショップなども実施。四季折々の植物が彩る豊かな自然に囲まれた環境で、築100年の古民家の母屋を中心に、メンバーと職員、地域ボランティアスタッフが協力し合い活動を行っている。

TURNとの関わり ――― TURNには2015年の初年度より交流プログラムに参加。アーティストの五十嵐靖晃が平日のラマノに通い、メンバーとともに作業を通じて交流を行う中で、ラマノにいる一人ひとりをつなぐコミュニケーションのあり方として「糸」に着目。ラマノで紡ぎ、藍染した糸を使ったインスタレーション作品をTURNフェスで発表した。
2018年春からは、TURN LANDの取り組みとして、一から綿花を育てる「手のプロジェクト ― 綿花から糸へ‥―」をスタート。高野賢二施設長を中心としたラマノの職員と五十嵐、参加者が協働し、「手仕事」や「自然とつながること」を大切にしながら、多様な人が交じり合う場を地域にひらいている。2ヶ月に1回のペースで週末に開催。畑を耕し、種をまき、綿花を収穫して糸を紡ぎ、そして藍染するまで、1年かけてゆっくりと展開中。

5月に実施した「手のプロジェクト」。参加者と一緒に綿花の種まきをするアーティストの五十嵐靖晃（左）

TURN LANDの日々から気づき、発信していく新しいLa Manoの魅力

高野賢二（クラフト工房La Mano 施設長）

クラフト工房La Mano（以下、ラマノ）がTURN LAND（以下、LAND）での「手のプロジェクト」を行うことになったきっかけは、2015年の11月にTURNの交流プログラムとして、アーティストの五十嵐靖晃さんがラマノにやって来たところから始まりました。五十嵐さんとの交流プログラムが進む中で、私はTURNセンター構想会議に参加していました。会議では障害のある人たちやマイノリティな人たちにとって、どのような場があれば、地域や社会とつながっていけるのか、また、どのような場を必要としているのかという課題をそれぞれの立場から話し合いをしてきました。私も含めてだと思いますが、なぜ、TURNや構想会議に関わったのかと言えば、福祉施設が抱える課題を解決していく何かがTURNにはあるのではないかという期待感があったからだと思います。

福祉施設が抱える課題というのは、現場で障害のある方の支援をする上での課題もありますが、それだけではなく、福祉（障害のある人）という場から見た社会、社会から見た福祉（障害のある人）がどのようにお互いに行き交えばよいのか、そのためには何が必要なのかという課題があります。双方の課題の根幹にあるものは、社会が障害者のことを知る機会が少ない、障害者が社会に出づらいという背景があるからだと思います。

とは言え、以前に比べれば、各段に環境面でのバリアフリー化は進んでいると思いますし、障害のある人たちに向けてのさまざまなイベントも多く開催されていると感じます。TURNの事業があること自体大きな変化だと思います。

そんな時代の流れの中で2016年に実施されたTURNセンター構想会議のとき、既に「アーティストとの交流プログラム」があり、またTURNフェスがある中で、多様な背景を持つ人たちが、集えるようなセンター的なスペースの役割や定義、そこに障害のある人たちが赴いて、何をしたいのか、何を必要としているのかが、それぞれの思いを時間をかけて話し合いましたが、何か決めてに欠ける感じがありました。そんなとき、TURNセンター構想会議で日比野さんが提案した「LAND」という言葉、障害のある人たちが活動するフィールドを「島」として、障害のある人たちが赴くのではなく、障害のある人たちのところへ赴く考えに、自分たちの活動と重なり合う部分が多く、とてもしっくりと感じました。障害のある人たちのありのままを知ってもらうことで伝えられることがあると思います。そういう意味で、「LAND」は未知なる場所なのかもしれません。

外国に行ったとき、人は誰しも言葉や文化など戸惑うことがあると思います。そのときに、自分たちの言葉や文化を押し通そうとは思わないと思います。少なくとも、その国、土地の言葉や文化を理解しようと思うでしょう。それは、障害のある人たちのフィールドでも同じだと思います。そこには、彼らの言葉があり、価値観が存在します。言葉も一つではないかもしれません。ただ場をひらくのでなく、その人がどんな障害で、ラマノではどんなことをしているのかを知ってもらった上で接してもらったら、きっと感じる視点も違うのかなと思います。

これまで、ラマノは、地域に施設を積極的にひらいて来ました。夏と冬に開催される染織展では、染め織りやアートに親しむファンの方が各回600人近く訪れます。また、普段の活動を支えて下さる地域のボランティアさんは、年間延べ1,000人に上ります。他にも、月1回、施設の設備を地域に開放する染めのワークショップを開催し、年間延べ80人が参加します。年間を通じての見学者や来訪者も200人ほどになります。全てを合わせると、年間2,500人の方が、何かしらでラマノを訪れ、関わっています。

ラマノの活動目的の一つに、「地域にとって存在価値のある場」というのがあります。これには二つの価値が存在します。一つは、地域の障害のある人たちにとって必要とされる価値。もう一つは地域住民にとっても必要とされる価値だと思います。障害のある人たちにとっての価値とは、活動ができる場があることです。地域住民に

とって必要とされている価値は、ラマノの豊かな自然環境と障害のある人たちと生み出すものづくりやアートの価値だと思っています。障害のある人たちの活動の場があること、そして活動の先が地域や社会の価値につながっていることで、持続可能な活動となっているのだと思います。

十分に場をひらいているように思う中、なぜラマノでTURN LAND（以下、LAND）を行ってみたいと思ったのか、それは、LANDによって施設の、障害のある人たちの、新しい魅力の発見につながるのではと思ったからです。LANDを行うにあたって、まず、スタッフたちに、ラマノの場を使ってどんなことをしてみたいかを募りました。毎月、利用者の一人がゲストとして登場し、その利用者の得意とすることを参加者と行う案などがでましたが、本人や毎月の企画や準備を考えると、続いていくのだろうか、また誰がやるのかという課題もでました。そんな中、五十嵐さんやTURNの方とも会議を重ねもっとラマノの得意とする事で、普段のラマノの活動の延長上にあるものづくりを中心にしたらどうか、また、その活動にはラマノを意味する「手」をテーマにしたらどうかということになりました。手を動かす、手仕事、手にまつわることを行っていこう。その一つとして、ラマノでもなじみ深い綿花を育てて、糸に紡ぐというプロジェクトが始動しました。

2018年の3月からスタートした活動「手のプロジェクト」の参加者の背景はさまざまですが、皆さん共通して、何かものづくりや手仕事に興味があったり、地域や近所の方、ラマノの場所が好きだったりという方が多かったです。また、参加した人が次回、友人とまた参加するという流れもありました。
自分たちで土を耕し、種をまき、水をやり、花が咲いて、綿の実を付け、綿を紡いで糸にした活動は、延べ128人の参加者になりました。
各回、参加者の顔ぶれも少しずつ異なりましたが、その時々、集った方々の雰囲気というのが毎回ありました。初めて会う人たちなのに、なんとなく昔から知っているような、久しぶりに会う、親戚の集まりみたいな空気が流れていました。古い民家の持つ力かもしれません。
1年目のラマノのLANDは、場所や環境の魅力を伝えることができました。ただ、なかなか、ラマノのメンバーが参加する仕組みができなかったこともあり、参加者からは、もっと利用者の方と関わることができればという声もありました。
2年目のLANDでは、場の魅力だけでなく、そこで働く利用者の魅力をどう伝えることができるかがテーマかもしれません。そのためのガイドブックのようなツールもつくろうと考えています。この人はお話しをすることが好き、触られるのが嫌とか、アイドルが好きなど、また、障害についての豆知識があってもよいかもしれません。自閉症とは、ダウン症とはなど、触れてはいけないのではなく、知ってもらう。また、場を訪れた人と利用者の距離感も大事だと思います。近くもないけど離れてもいないような距離感…何か、一緒に時間を共有できるようなものがあるといいなと思います。その一つが糸を紡ぐことかもしれませんし、一緒にコーヒーを入れて飲むことかもしれません。それぞれが、それぞれに存在しながらも、ゆるやかに見えない糸でつながっているような、そんな「LAND」（場所）にしていきたいです。

高野賢二
クラフト工房 La Mano 施設長。学生時代に染色を学び、2000年にLa Manoに入社。町田市にある築90年の民家で、障害のある人とともにものづくりに励むとともに、物をつくるための場づくりを考えている。料理が趣味で、「手のプロジェクト」と同時開催で行われている「手づくりおひるごはんの会」ではLa Manoで採れた食材を使い、料理に腕を振るう。

写真とともに振り返る「手のプロジェクト」

vol.1　3月11日（日）

いきなりの重労働で始まる畑づくり

普段からラマノのお庭の手入れを行っているボランティアスタッフの指導のもと、畑づくりを行う。綿花の畑をつくる場所として選んだのは、敷地内の日当たりのよい斜面。まずは全体の雑草を抜き、スコップで60～70cm程の深さを掘り返すのは、結構な重労働。振り返ってみても、「手のプロジェクト」で一番の体力仕事の日だったかもしれない。

vol.2　5月20日（日）

ふわふわとした種をまく

前回耕した畑をもう一度耕し、数日水に浸けておいた綿花の種をまく。種は白い繊維に包まれてふわふわしているのが特徴的。一ヶ所に数粒まいて、たっぷり水をやり、最後にカラスから種を守るためのカバーをつけて完成。季節ごとに野菜や果物がなるラマノのお庭を散策するのも、毎回の楽しみの一つだ。

［写真は全てA］

vol.3　7月22日(日)

愛着がわいてくる、畑の手入れ

苗の間引きと植え替えを行い、畑の手入れ。根っこを傷つけないように株をわけるのが難しい。TURNフェス4に向けてアルゼンチンから来日していたアーティストのアレハンドラ・ミスライも参加し、一緒に作業を行った。畑作業の後は全員で糸紡ぎの練習。毎回参加している人からは「だんだんと畑に愛着が湧いてきた」というコメントも生まれる。ラマノ利用者にとってお休みの日となる土日には、仕事場であるラマノには行かないという意識が強く、なかなか「手のプロジェクト」に参加する人がいなかったが、この回から利用者と親御さんが一緒に参加するようになる。

するすると糸を紡いでいくアーティストの五十嵐靖晃

糸を紡ぐスピンドルという道具

高野施設長（左）とアーティストのアレハンドラ・ミスライ（中）

［写真は全てA］

vol.4　10月21日(日)

それぞれの時間で紡がれる糸

いよいよ収穫の日。ふわふわに開いた綿花から真っ白な綿を摘み、母屋の縁側で日干しをする。午後は事前にラマノのメンバーが摘んで乾燥させておいた綿花を紡ぐ。中に入っている種を手で取り出しほぐしてから、専用のブラシで繊維の方向を整え、棒状に整える。それをスピンドルというコマ形の道具で糸に紡いでいく。作業に熱中する人、お喋りを楽しむ人など、参加の仕方も人それぞれ。初めて参加した人からは「手作業をしながらだと、自然と周りの人とコミュニケーションできる」という意見があった。

vol.5　12月16日(日)

紡いだ糸、どうしようか？

今年最後の綿花の収穫。開かなかった実は、枝から切って室内に吊るして開くのを待つ。前回に引き続き糸紡ぎをしてから、最後には、今後「手のプロジェクト」でやってみたいことについて、参加者全員で意見交換を行った。「平日の利用者さんと関わってみたい」「何か物を作って完成させるのではなく、一本の糸になるだけでもよいのかもしれない」「紡いだ糸で、巨大なあやとりをやってみるのはどうだろう」などなど。この後、紡いだ糸がどのように展開していくか、乞うご期待！

世代も背景もさまざまな参加者たち。お喋りをしながら糸を紡ぐ

収穫した綿花

［写真は全てA］

気まぐれ八百屋だんだん

大田区にある「気まぐれ八百屋だんだん」（以下、だんだん）では、地域の人たちを対象に英会話や読み聞かせなど毎日さまざまな活動を行っている。今では全国で展開されている「こども食堂」の活動を最初に始めたのはだんだんで、現在も毎週木曜日にこども食堂を開いている。また、不登校で学校に行けない子供や居場所のない子供たちにも、居場所を提供している。だんだんを立ち上げ、切り盛りする代表の近藤博子は、子供から大人まで、一人ひとりが活躍できるステージをつくりたいという想いがあり、イベントの講師やボランティアスタッフなどそれぞれの関わり方をつくっている。

TURNとの関わり ——— TURN には 2016 年より参加し、アーティストの永岡大輔が交流プログラムとして、子供たちが一緒に社会や未来を考える場「こども会議」に参加。2017年からは、永岡とともに TURN LAND として「おとな図鑑」を展開。学校や家庭など普段の生活ではなかなか出会えない働き方をしている人と出会い、子供たちがいろいろな仕事や選択肢を知り、「生きることって面白い」と思える機会をつくっている。
2018 年からは新しく「だんだん HEKIGA プロジェクト」をスタート。だんだんでボランティア活動を行っている高校生たちがコアメンバーとなり企画を考え、地域の子供たちと一緒に、だんだんの外壁に壁画を描くプロジェクトである。壁画のテーマは、「未来へつなぐ、虹色の花」で、それぞれの夢を込めた大きな絵を描いた。
今後はだんだんの近隣の障害福祉施設と協力してプログラムを実施するなど、地域の施設や団体などがつながれるきっかけづくりを行いたいというビジョンを持っている。

第 1 回「だんだん HEKIGA プロジェクト」の様子。だんだんにたくさんの地域の子供たちが集った（写真：鈴木竜一朗）

多様な働き方、生き方と出会う

おとな図鑑

子供が多様な“おとな”の働き方、生き方と出会うプロジェクト「おとな図鑑」。これまでに、木こりで牧師の鈴木宣仁、数学者の荒木義明をゲストとしてお招きした。小さい頃はどんな子供だったか、どうして今の仕事をするようになったのか、普段どんな働き方をしているかなど語った後は、ワークショップを実施。子供たちが実際に手を動かしながら、その仕事の魅力を体験した。
こども食堂が今では全国各地で展開されているように、今後おとな図鑑もどんどん広がっていくことを、近藤は望んでいる。「面白いアイデアがあれば、それを広めていけばいい。だんだんだけでいいことをするのではなく、それが誰でも実践できるフレームとして広がっていくことに興味がある」と近藤は言う。ゆくゆくは各地で開催されたおとな図鑑の内容をまとめて、一冊の『おとな図鑑』をつくることを目標に、今後も活動は続いていく。

［写真上］2017 年 8 月に開催した第 1 回おとな図鑑では、木こりで牧師の鈴木宣仁をゲストに迎えた ［写真下］2018 年 2 月の第 2 回おとな図鑑のゲストは、数学者の荒木義明。「しきつめ」のワークショップには子供も夢中で参加した

壁画がつなぐ、交流の場

だんだんHEKIGAプロジェクト

プロジェクトメンバーは、日頃だんだんのこども食堂のボランティアスタッフを行う高校生たち。メンバーの一人、真鍋太隆は小学生の頃からだんだんに通い、「いつかだんだんに恩返しがしたかった」と言う。
彼らの呼びかけで、公開制作日には地域の子供たちが集まった。「未来へつなぐ、虹色の花」というテーマからイメージした絵をそれぞれ考え、壁に描く。初めは慎重に描いていた子供たちも、徐々に自由になり、壁いっぱい色とりどりの絵で埋めていった。進行具合を見ながら全体のバランスを考えたり、子供たちが喧嘩しないように周りに気を配ったりする高校生たち。だんだんがこれからも地域の子供たちの居場所であり続け、そしてさらに多様な人々が出会い交流する場になればという願いを込めて、みんなで大きな絵を描いた。

［写真下］参加した地域の子供たちとプロジェクトメンバーの高校生たち（写真上下：鈴木竜一朗）

東大生態調和農学機構

東京大学大学院農学生命科学研究科附属生態調和農学機構（東大生態調和農学機構）は、2010年、大学の附属施設である農場と緑地植物実験所を統合し、演習林田無試験地の教育研究機能を組み入れ設置された。30ヘクタール以上の面積に、耕地（畑地、水田、樹園地）、林地（演習林）、温室、見本園などがあり、農学における統合的な教育研究を実践している。多くの地域住民や市民との連携によってさまざまな教育・研究プログラムが実施されているのも特徴。

TURNとの関わり ——— アーティストを中心に、交流先施設の人たちや地域住民などが集まり、TURNの活動を日常的に実践できる第三の場（サードプレイス）をつくり出すことを目的に、2017年度より東大生態調和農学機構の圃場（ほじょう）を借りて、同大学との共同研究と位置づけ、TURN LAND事業に着手。
アーティストの岩間賢とともに、初年度はシューレ大学を参加者に迎え、2年目の今年度は西東京市内の障害者支援施設さくらの園生活介護が加わり、月に一度農業活動（小麦と大豆の栽培など）とアート活動（ワークショップなど）を複合したプログラムを実施している。また、活動をとおしてどのような効果が参加者にもたらされるのかを、生理学的、行動的、心理的、また社会的な指標から測定し、検証している。

2018年 実施内容

第1回　1月16日（火）
監修者の日比野から「土色から空色のグラデーションで塗ってみよう」との指令を受け丸太に着彩を施す。完成した標識は圃場の目印になった。

第2回　2月28日（水）
圃場を散策しながら集めた葉っぱ、小枝、雑草など並べ、観察。絵の具の顔料になる予定。

第3回　5月11日（金）
透明のアクリル板を持って機構の敷地内を散策し、自分だけの地図を完成させた。

第4回　6月1日（金）
前半は大豆の種まき。農業で流通する品種や在来種など9種類の大豆を畝をわけてまいた。後半はオーブントースターでつくれるそば猪口と箸置きの制作。

第5回　6月14日（木）
まいた小麦の収穫体験。鎌で刈り、束ねていった。

第6回　7月20日（金）
手打ちしたうどんを、前回制作したそば猪口で試食。

第7回　9月6日（木）
前半は収穫した枝豆の食味試験。食感、風味などわずかな違いを確かめた。後半は全4回で実施する紙版画のワークショップ。初回は簡易な模様を作って試し刷りから。

第8回　10月5日（金）
6月にまいた大豆を収穫した。粒が入っていない莢（さや）を取り除き乾燥機にかけた。後半は、紙版画のモチーフを考えてみる。

第9回　11月9日（金）
大豆を脱穀し、選別。後半は、来年のカレンダー用の紙版画を刷る。

第10回　12月7日（金）
収穫した大豆のうち3種類を使用し、それぞれの大豆から豆腐をつくった。

※1月は版画制作仕上げ、2月は味噌作り。そして3月には機構内の研究発表会が実施され、1年間の活動を報告する。

［写真は全てA］

アーティスト

岩間 賢

1974年生まれ。東京藝術大学美術学部博士後期課程（美術博士 Ph.D）修了後、文化庁芸術家在外研究員として中国で創作活動を行う。場と人の対話を生み出す作品やプロジェクトを国内外で展開。現在、愛知県立芸術大学美術学部准教授。

研究代表者

安永円理子（東京大学 大学院農学生命科学研究科准教授）
深野祐也（東京大学 大学院農学生命科学研究科助教）

交流先施設

シューレ大学

不登校やひきこもりを経験した若者たちが主体となって、自分に合った生き方を創り出す大学として東京都新宿区に生まれたオルタナティブ大学。2015年からTURNの交流先施設として参加している。

社会福祉法人さくらの園

西東京市を拠点に、障害のある人たちの就労支援、生活支援を行っている。本プログラムには生活介護事業所と就労支援センター「一歩」が参加協力している。

TURNで見つけたもの

瀬戸口裕子

舞台鑑賞のサポート活動を行うNPO法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク（TA-net）のスタッフとしてTURNのイベント運営に関わる瀬戸口裕子。その活動の中で“見つけたもの”とは…。

私にとってのTURN

いつも浮かぶのは「自由」とか「自在」という言葉です。「自由」とは、さまざまな壁や境界に囲まれた不自由な環境の中でも、いつでも自由に創造していく力であり、「自在」とは、それまで経験したことのないことに出会ったとき、自分の感性を拠り所とし、他者との関係性をつくったり、変化させていったり、いつでも無限の可能性を引き出すこと。
そして、それが守られているプロジェクトがTURNだと感じています。
私は何よりもTURNで紡がれていく言葉が好きです。どちらかというと、外側に発信するための言葉というよりも、自分の内側や、目には見えない感覚を探りながら、そこに合う言葉を探しているような、内面から滲み出てくるような言葉が多いと感じます。モヤモヤしていることをじっくり見つめながら、それを言葉にしていくことで新たな視点を見つけていく、言葉によって世界が広がり、それまでとらわれていた呪縛から解かれていくそんな瞬間もあったり、新しい体験をしたときに湧き出た感情や感性に真摯に向き合い、本気で自由に言葉として表現していく、それがTURNの魅力だと感じています。

心地よい新たな関係

TURNとの最初の出会いは、2015年11月8日に開催された第3回東京フォーラム「ONE DAY TURN PARTY」でした。私は、同年に東京都美術館×東京藝術大学の「とびらプロジェクト」のアート・コミュニケータ（とびラー）になり、そこで知り合いになった大政愛さんに誘われたことがきっかけでした。そのときは、TURNがこんなにも大きく広がっていくとは想像もできませんでした。
その4ヶ月後、また運命の巡りあわせか、文化庁の芸術選奨文部科学大臣賞に日比野克彦氏、同賞新人賞にTA-netの代表の廣川麻子氏が選ばれました。TA-netの廣川さんは「みんなで一緒に舞台を楽しみたい！」を合言葉にそれまでほとんど情報保障がつくことのなかった芝居や劇場関係のアクセシビリティの仕組みをつくりました。そこで私も一緒に活動をしていたというご縁もあって、TURNのアクセシビリティはTA-netにつなげ、手話通訳を担当させていただいています。
TURNのアクセシビリティの打合わせでは、奥山理子さんをはじめ、NPO法人Art's Embraceのスタッフの皆さん、TA-netの事務局長であり当事者の石川さんと、手話通訳者、文字支援者も一緒に、毎回丁寧に話し合っています。その打合わせの時間さえも、「一人ひとりの異なる全ての人に届く新たな文化体験をつくりだす」大事な瞬間だと感じています。
「耳が聞こえない人」と言っても実にさまざまで、全く聞こえない人から聞こえづらい人、手話を習得している人、いない人、いろいろな人がいます。私自身もこれから老いていくにつれ、確実に耳が聞こえづらくなるだろうし、決して他人事ではなく身近に考えていかなければならないことだと思っています。耳の聞こえない人にとっての「情報保障」というのは、生きるため、社会参加するために絶対に必要なことなのに、現実はまだまだそのことが浸透していません。それが、いつも残念だと思う一方で、実はそのことで心が揺らいだり、迷うときがあるのです。福祉や耳の聞こえない人たちのコミュニティの中では、日常の中でごく当たり前に、「障害者の権利」とか「言語、アイデンティティ、文化、マイノリティ、運動、排除」というような言葉が出てきます。人が平等に生きていく上で「権利」を守ったり主張したりする事はとても大事なことだし、平等な社会は当然だと思っていますが、そんな強い言葉を使わなければならない状況が日常化していることに悲しみを感じることもあるのです。また、時折「情報保障をつけなければ」という思いが強くなりすぎてしまって、それが逆にお互いの自然な関係をつくる上での障害になってしまうときもあるのではないか、とも思うのです。
私は、何か違う方法でお互いに心地よい新たな関係はつくれないのかな、と心の中で探していました。
そんなときにTURNに出会え、私には見つけられなかったものを、TURNで見つけてもらえるかもしれない、見つけてほしいと思ったのです。

壁のようなものが、色づく瞬間

忘れられないのは、2017年に富塚絵美（ちょり）さんに声をかけてもらい参加したTURNフェス3の《光の広場》で、私は手話通訳としてではなく作品の一部として登場するという、まさにTURNの中でTURNする大きなきっかけをもらったことです。私はこの作品をつくり上げていくプロセスの中で、大きな変化を経験しました。最初は耳の聞こえないパフォーマーのマリーさんへの手話通訳を主にしていましたが、だんだんと私が手話通訳することが邪魔になっていると感じるようになっていったのです。マリーさん含め出演者たちが、通訳という第三者をとおしてではなく直接対峙して、そこで生まれる、わかりづらさや、もどかしさ、逆に通じたときの喜びなど、もっと生の感覚・感性を感じていきたいと変化したことを感じたのです。「通訳は必要でもあり、邪魔でもある」と悟りました。でも私は「邪魔」と思われることは全く嫌だとは思わず、むしろ嬉しかった。普通であれば、そこで私の役目は終わりなのでしょうが、ちょりさんは、そこから私を新たな一個人として創造してくれたのです。私にとって、あらたな関係が生まれたターニングポイントだったと思います。ちょりさんの作品の中では、社会の中で生きづらさを感じている人やその周辺にいる人たちが、溶け合ったり、もみくちゃになって踊ったり遊んだりしながら、お互いの色を知り、一人ひとりの人間として、その人のリアルさを引き出し、そこから生まれてくるものを大切にしながら、お互いの違いに気づき合っていくこと。無理やり理解させようとするのではなく、自然な関係を紡ぐ中で、一人ひとりの人間の「生」の豊かさを表現していく優しさをも強く感じました。結果的には、みんなちょっとずつ違うところもあるけど、そんなに大きな違いはないんだと気づいたり、さらに個々の魅力も発見するという大きな収穫を得ることができました。そして最後には「みんなで一緒に夢を描いていける」ようになり、そこにはもう自分たちの権利を守らなければならないような強い言葉は必要なくなっていました。
TURNフェス4では「日常非常日（ピョウジョウヒジョウビ）」がテーマでした。未知の世界と既知の世界、まさに日常と非日常が自由に交差していた空間でした。その「日常非常日」の景色は、新しいはずなのに、何故だかとても懐かしいという感覚にもなりました。私はこれからもTURNの中で、人の心にある壁のようなものが色づく瞬間を見つけていきたいと思います。

D

TURNフェス3での《光の広場》の様子

瀬戸口裕子
手話通訳士、アート・コミュニケータ。NPO法人TA-net会員。
TURNでは年間のイベントをとおして手話通訳を担当。

特別寄稿企画「外から見るTURN」vol.2

であっTURN、まわっTURN、くるくるTURN

マリー／Sasa

聴覚に障害を持ち、TURNの参加者からパフォーマーとして深く関わるにまで至ったマリーが語る、TURNという場所の価値とは…。

初めてTURN

初めてTURNした日。アーツ千代田3331のROOM302で、文化プログラムやサッカー、ブラジルや「交流」の話を、手話通訳をとおして見ながら（聞きながら）、私はずっとTURNって、一体なんなのだ？とぐるぐるしていました。そして、「ぐるぐる」できるだけの情報を手にしていることが、たまらなく嬉しく、ニヤニヤしていました。
2016年6月のトークイベント「私があなたにTURNする7日間」。そのときのTURNには、まだ手話通訳や文字支援という情報保障はなく、どうしても登壇者のお話が聞きたかった私は、思い切って「手話通訳をお願いしたいのですが…」とメールを送りました。それがTURNとの最初の接点でした。
紆余曲折あって、一度は、ダメかも…と諦めかけたイベントでしたが、最終的に手話通訳を配置していただけることになって、大変ありがたい、濃い時間を過ごすことができました。
そのとき、日比野さんが「ロンドンのUnlimited※はリミットがあるという発想から来ている。TURNは、リミット（限界）という考え方ではなく、むしろ一人ひとりの『違いを超えること』に目を向けたい」と答えてくれたとき、私は一緒にぐるぐるしたいと思ったのです。
それからTURNの展示や、TURNミーティングを覗いたりする中で、TURNフェス3、4では富塚絵美（ちょり）さんと一緒にパフォーマーとして参加する機会もいただきました。

TURNを見る

私は聴覚障害者です。普段は補聴器を使っていますが、補聴器を外すと、自分の声もわかりません。
聴覚障害は、外から見ることのできない障害の一つです。「見えない障害」ということは、自分にとっても他の人との違いがわかりにくく、言葉にして説明することがとても難しいということでもあります。
一人ひとり異なる聞こえなさを抱えており、私でない「あなた」が「私」になれば、この聞こえなさがどれほどのものか、きっとわかってもらえるだろうに、それが叶わないもどかしさ、困惑と常に隣り合わせです。
出会った頃のTURNやTURN in BRAZILでは、聞こえない人たちが そこで「今まさに起きていること」を知ることができる環境は正直十分ではありませんでした。トークに手話通訳はありましたが、流れている映像に字幕はなく、説明を受けながら体験するコーナーでは見てわかる説明がなかったために何をどうすればいいのかわからず、「ただすごいなー」と思って通り過ぎるだけの展示もありました。
大きな変化があったのが2017年のTURNフェス3、TURNミーティングから。手話通訳、文字通訳が常に配置されるようになり、聞こえない友達にも、ぜひ行ってみて！と気軽にお勧めできるようになりました。
普段、美術館やアート関連のイベントでは、聞こえる人たちは次々に音声ガイドというラジオのような機材を借りて、いわゆる「作品解説」を受けながら鑑賞することができます。聞こえない人、特に一人で鑑賞したい人は、事前に予習していくか、当日パンフレットを見るか、どうしても、独りよがりの解釈になってしまいます。
「音声ガイドというものが実は結構面白いらしい」と知ったのは、TURNではありませんが、日比野さんの解説が文字起こしされていた、岐阜のメディアコスモスのイベントでのことでした。数枚の紙の上で日比野さんの独特の言葉の選び方、言い回しがそのまま文字になっていました。一人では得られない、違う視点からの作品の味わい方の手がかりがあるという、新鮮な体験は、作品鑑賞の時間をより濃密にしてくれました。こうした機会は、どこででも誰にでも用意されているものであってほしいと思います。
2018年のTURNフェス4は、ぐっと成長して、多様な「違い」を切り取ることのできるフェスでした。さまざまなガイドツアーが開催され、多言語、障害当事者、家族、支援者それぞれのナビゲーターによる「多言語」「聞く」「見る」「車椅子」「妹のわりきれなさ」などをテーマにしたツアーが目の前をぐるぐる回っていくのを見ているのは感慨深いものがありました。
例えば「折形/ORIKATA」「コッパーランド」のコーナーでは、「ここで今、何をすればいいのか」が文字で書かれていて、聞こえない人だけでなく、人と話すのが少し苦手な人でも、自分のペースで体験することができるようになっていて、誰かに説明を求める必要もなく、楽しい体験ができました。

A

TURNフェス4初日のスペシャルライブで
「ピジョッピジョッピあー」を奏でる、
クラリネット奏者の島田明日香（左）とマリー

私のTURN

この2年間は、私自身がTURNした時間でもありました。私は自作の詩などを手話で朗読をする“サインポエット”として、時々ライブをしていますが、震災を経て、それから仕事や諸々の環境の変化に追われて、「表現する」ことと向き合う時間を見失っている時期が続いていました。
2017年から、ちょりさん始め、多くのアーティストの方と触れ合い、引き寄せられるようにその後のライブの舞台となる「空間」との出会いもありました。まるで抑えられていたものが迸（ほとばし）るように、次の2018年はフェスで知り合った、新人Hソケリッサ！の皆さんとともに、聞こえる聞こえないという違いを超えて楽しむことのできる、インクルーシブな詩の朗読と音楽、ダンスの即興ライブパフォーマンスイベントを年に2回主催する、という激動の1年を過ごしました。その原動力はTURNによってもたらされたと言って違いありません。
その2018年のTURNフェス4は、衝撃の時間になりました。普段「手話」と「身体」による表現をしている私が、初めて自分の「声」を「表現する素材」として捉え直したのです。補聴器を外してパフォーマンスしている間、一体自分の声がどういう大きさで発せられ、どんな風景になっているのかも全くわかりません。まさに日常非常日（ピッジョッピジョッピ）。ちょりさんが好きと言って素材として使ってくれる声、しかし、自分にとっては未知の声。掴みどころのない、怖いチャレンジでもありました。
一方で、「聞こえていない」ということは、この世界の、地球の空気を震わせているさまざまな音が、音の形をして届いてこないにしても、「何かが欠けている」ということではない、と私は常々思っています。音楽の伝え方、感じ方は耳から「聴く」だけだけではないのです。触れるもの、響くもの、見るもの、そしておそらく香りや、味によってでも、「五感の音楽」として、私たちはいつでも音楽をそれぞれの感じ方で伝えたり、受けとったりすることができる。TURNは、それらも思いも全て受け止めてくれました。
そこで、私は今、「聞こえない私にとっての『声』」の響きを探ることにとりかかっています。2年前まで決して好きではなく、表現の手段としては完全に対象外であった自分の声と向き合うことにしたのです。
TURNと過ごす時間は、新たな発見と出会い、自分自身のTURNの繰り返しでもあります。

これからのTURN

2018年12月、TURN LANDの一つ、小茂根福祉園で大西健太郎さんの『「お」ダンス』ワークショップに参加しました。『「お」ダンス』は初めて会った人との「手の会話」がとても気持ちよく、「五感の音楽」につながる要素がたくさんあります。「おダンサー」（「手の会話」をするふたりの周りで「お」と掛け声をする人たち）が手話の指文字「お」で掛け声をしてくれるので、安心して「手の会話」を続けることができ、何回でも参加したくなる場でした。
「安心して参加できる」というのは、実はとても大きな一歩につながるものであり、大切なことなのですが、TURNはそれを何気なく実現できるようになっているな、と思います。
2年前に比べたら、どんどんひらかれた場になってきているTURN。これからも、誰もが安心して心をひらき、出会い、TURNするきっかけを掴める場所であることを続けていってほしいと思います。
TURNすることがいつもの日常になっているかもしれない未来に向けて。

※第30回オリンピック競技大会（2012／ロンドン）の文化プログラム「ロンドン2012カルチュラル・オリンピアード」の一つで、障害のあるアーティストの創造的な活動を支援することを目的に設立された。

マリー／Sasa
サイン・ポエット（手話の詩人）。「Read_taste_music」総括。聞こえる世界に育った聞こえないパフォーマーとして、手話や日本語などによる狭間の表現を追求している。2018年ゆるいユニット集団「でんちゅう組」結成。この指とまれ担当。旧平櫛田中邸などで、みて感じてきいて楽しむインクルーシブ・パフォーミングアーツを展開。

TURNフェスから学んだこと

佐藤慎也

TURNフェスに着目する佐藤慎也が考察する「第四世代の美術館」とは…。

TURNのための場

TURNでは、活動のベースとなるTURN交流プログラムが各地で展開されるとともに、それらを一堂に集めるTURNフェスが行われている。参加するアーティストにとって、コミュニティにおける日々の活動と年に一度の公開の場、どちらが本番なのかと問われれば、意見がわかれるところだろう。しかし、TURNのための場を考えるとき、TURN交流プログラムでは、それぞれのコミュニティの場で行われているため、個別の要求の上に設定されている。しかし、TURNフェスでは、それらが一堂に会する共通の場をどのように設定するのか、という問いが成立する。
これまで4回開催されてきたTURNフェスは、いずれも東京都美術館の公募展示室を会場としてきた。東京都美術館の前身である東京府美術館は、日本初の公立美術館として1926年に開館、1943年に名称変更された。1975年に新館へ改築され、3層にもわたる広大な公募展示室がつくられ、2012年の大幅な改修工事によって、現在の姿になった。その際に、公募展示室の床仕上げは、静かな環境の中で鑑賞ができるように、カーペット敷きに変更された。また、壁仕上げには、フックを用いて簡単に絵画を架けられるように、小さな穴の開いた有孔板が使われている。しかし、多くの美術館の展示室では、床仕上げにはフローリングや石のような硬い材料が使われているし、壁仕上げには穴の開いていない白く平滑な材料が使われている。それらの一般的な展示室の仕上げと比較すると、改修後の公募展示室には、非常に「ゆるい」仕上げが採用されている。それらは、視覚的なことが最優先される「もの」としての美術作品の展示にとっては、決して歓迎されるものではなく、多くの市民が発表を行うための場であることから選ばれた、機能的な仕上げである。
TURNフェスは、そんな公募展示室を会場にしてはじまった。3日間限りのフェスティバルであるから、本来ならば、アートセンターやイベント会場などが会場に選ばれ、いわゆる美術館では行われなかっただろう。むしろ、このようなフェスが、緊張感あふれる美術館のホワイトキューブで開催されたならば、見る方も、見せる方も、きっと居心地が悪かった。しかし、その会場に美術館という場を当てはめることは、TURNが現代における美術のひとつのあり方だと考えれば、当然のことである。そう考えたとき、このゆるさを持った展示室が、まさにTURNフェスの会場としてふさわしい場であることに気づかされた。

みんなの楽屋

最初のTURNフェスを見て、そこで繰り広げられていたことに可能性を感じ、アーティストの富塚絵美や学生たちとともに、勉強会をはじめることにした。それは、TURNのための場を考えることを目的としていたが、個人的には、建築に関わる身として、10年近くアートプロジェクトに関わり、さまざまな現場で考えたことを、今後につくられる美術館に返したいという思いもあった。その勉強会の結果、TURNのための場には、「もの」のためではなく、「人と活動」のための空間が必要であることがわかってきた。そして、その成果として、TURNフェス2では、「あわい〜（富塚絵美＋佐藤慎也研究室）」名義で、《みんなの楽屋》と題した作品を発表した。人が思い思いに過ごすことのできる楽屋を公募展示室内につくり出すために、カーペットの床、有孔板の壁に、さらに紐を用いて「あわい」天井を付け加えた。
「楽屋」という呼び名は、「もの」のためにつくられた展示室に、「人」が長時間滞在するための口実を与えるものでしかない。最終日にパフォーマンスを上演するという設定のもと（実際に上演は行われた）、その準備のための楽屋を展示することとした。TURNフェスを展覧会だと思い、視覚的な作品を見に来た観客は、その楽屋に何を見てよいのかわからないまま通り過ぎていく。あわい天井もまた、通り過ぎる人たちにとっては、特に感知されるべきものではない。しかし、楽屋に滞在して、本番を待つパフォーマーたちは、そこを少しでも居心地のよい場とするために、ものが掛けられる有孔板の壁とフック、そのまま座り込むこともできるカーペットの床を手掛かりに、居場所をつくり出していく。そして、パフォーマーたちが少しでも落ち着いて留まれるように、あわい天井が、巨大な展示室のスケール感を抑えている。そんなTURNフェス2の会期中に、印象的なことがあった。出展者のひとりであるダンサーの森山開次が、この楽屋の隣を会場とするトークのために待機しているとき、美術館の展示室という場に対して戸惑いを見せ、所在無げにしていた。そんな姿を富塚が見て、「ここは楽屋です」と声を掛けたところ、森山は「楽屋であれば、居方がわかる」と、リラックスして富塚たちとストレッチをはじめた。展示室が本物の楽屋となった瞬間であった。

第四世代の美術館

《みんなの楽屋》での実験に引き続いて、「第四世代の美術館」ということを考えている。それは、建築家の磯崎新が、美術館を三つの世代にわけて論じていることを延長させて、新しい美術館の可能性を考えるものである。「第一世代の美術館は、一八世紀の末までに成立した、王侯貴族の私的コレクションを公開する目的で設立され」※1たもので、「ルーヴル美術館」をはじめとして、額縁や台座を持った具象的な作品が、有彩色の壁面に展示されている。第二世代は、「美術が内包している想像的空間の質が変化しはじめ、その展示空間もさらには新しい型が要請され（中略）美術作品はその近代主義的視点によって、究極的に平面や立体に還元され、これが均質空間に浮遊する状態をイメージ」※2しており、白い展示壁面を持った、いわゆるホワイトキューブと呼ばれる均質な展示室がつくられる。第三世代は、「生存している芸術家が自らの作品を自由に空間的に設置するような傾向とかかわって（中略）サイト・スペシフィックな作品と呼ばれる（中略）すなわち空間に独特な性格をみなぎらせるような強度が要請されて」※3いる。
第一世代が具象的な「もの」、第二世代が抽象的な「もの」、第三世代が場所性を伴った「もの」のための場とまとめられるとすると、芸術祭やアートプロジェクトに見られる美術作品の変化から、第四世代は、アートプロジェクト的またはパフォーマンス的な、「人」が含み込まれた作品という傾向を持つと考えられる。そして、TURNで展開されているような「人」が含み込まれた作品を美術館へ持ち込むためには、「第四世代の美術館」と呼ぶべき場が必要となるだろう。TURNフェスにおける公募展示室の使用、さらに《みんなの楽屋》での実験は、それを考えるための重要な参照事例となる。
「第四世代の美術館」の展示室には、居心地のよさが必要ではないかと考えている。もちろん、展示室を居心地のよい場とするためには、外部につながる窓の設置や、飲食を可能とする規則の変更など、他の要素の検討も必要となるだろう。そこまでいくと、もはや美術館でなくてもよいのではないかと思うかもしれない。しかし、この美術館の変化は、美術の変化が要求するものであり、そんな作品を収集・保管、展示、調査研究することもまた、これからの美術館の役割であるとするならば、そんな可能性もあり得るのではないかと考えている。

《みんなの楽屋》でストレッチをする森山開次（中）と富塚絵美（右）

※1　磯崎新『造物主議論』（鹿島出版会、1996年）39頁。
※2　同上、41頁。
※3　同上、43頁。

佐藤慎也
日本大学理工学部建築学科教授。1968年東京都生まれ。建築に留まらず、アートプロジェクト、演劇作品制作にも参加。「アーツ千代田3331」改修設計（メジロスタジオ共同設計、2010）、「八戸市新美術館」建設アドバイザー・運営検討委員会委員（西澤徹夫建築事務所・タカバンスタジオ設計共同体設計、2021開館予定）など。

TURN FES

ピッジョッピジョッピ
日常非常日

TURNフェス4では、日比野克彦による造語「日常非常日（ピッジョッピジョッピ）」※をテーマに、一人ひとり異なる日常が出会うことで生まれる“違い”を知り、それを楽しむ場を展開した。各所でのTURN交流プログラムを通して生まれた展示・ワークショップや、アーティストや他分野からのゲストに出会うとともに、トークやツアーなどをとおして、人と人の出会いを創出し、それぞれの知見が豊かになる機会となることを目指した。また、手話通訳と文字支援などのアクセシビリティサービスとともに、TURNフェスサポーターによる来場者へのサポート、アーティストたちとのコミュニケーションをとおして、さまざまな人と出会いながらTURNを体感する3日間が生まれた。

※日常非常日――2004年に開催された『アジア太平洋こども会議・イン福岡』（主催：NPO法人 アジア太平洋こども会議・イン福岡）で日本を訪れた子供たちが、思わぬところで自国での日常と異なる日本の生活文化に触れた際の驚きを、日比野克彦が絵本にした時のタイトル。

日 時：2018年8月17日（金）― 19日（日）
会 場：東京都美術館　ロビー階　第1・第2公募展示室
主 催：東京都、アーツカウンシル東京・東京都美術館（公益財団法人東京都歴史文化財団）、特定非営利活動法人 Art's Embrace、国立大学法人東京藝術大学
運営補助：TURN サポーター
TURNツアー実施協力：東京都美術館×東京藝術大学「とびらプロジェクト」

《NENNE｜ねんね》―Xプレイスへの第一歩

山 城 大 督

取材・文：長瀬光弘

美術館の中で、人が座ったり、寝転んだりしてくつろいでいる。4平方メートルの小上がりのスペースで、子供が無邪気に遊び、親はその姿を微笑ましく眺め、ただのんびりとした時間が過ぎていく。周囲では、他のアーティストや関係者によるライブやトークなどが行われ、常に何かが同時多発的に起きている。そのスペースにも、時折アーティストが訪れてはパフォーマンスを行ったり、物々交換を行ったり、緩やかなイベントが突発的に起きる―。
山城大督が、TURNフェス4に持ち込んだこの不思議な場の名を《NENNE｜ねんね》という。「無目的な場を美術館の中につくりたかった」と語る山城は同時に「当日が来ないでほしいと思っていた」とも回顧する。その真意、そしてフェスを終えた山城の中に芽生え始める「Xプレイス」構想について、山城に語ってもらった。

A

息子がTURNフェス3で得た体験

「TURNフェスの場で何かを生み出せないか」――4回目を迎えたTURNフェス（以下、フェス）への参加にあたって、こうした考えが頭を巡っていました。これまでは「作品を発表する場」としてフェスを捉えていたのですが、今年は視点を変えてみたかったのです。
それから、数年前から子育てが自分の作品やプロジェクトにダイレクトに影響を与え始めていて、TURNでも素直に制御せずに受け入れたい、という思いもありました。というのも、私の息子もTURNに影響を受けていて、フェス3に連れて行ったのがきっかけで、井谷優太君と友達になったんですね。体に障害を抱える井谷君は、フェス3でタブレット端末のアプリなどを駆使して音楽パフォーマンスを披露しました。そのアプリが当時3歳だった息子は面白かったらしくて、一緒に音楽を奏でたりして井谷君とコミュニケーションを取っていたんです。それがきっかけとなって、家に帰っても井谷君の話をよくするようになりました。
それから、もう一つ大きな体験をしています。浜松に

ある認定 NPO 法人クリエイティブサポートレッツ（以下、レッツ）のたけし君という、重度の知的障害を持つ子との交流です。たけし君は１人では食事もできないし、トイレにも行けません。母親であり、レッツの理事長でもある久保田翠さんはたけし君に対して、さまざまなジレンマを抱えながら、福祉施設を作ったり、表現活動をとおしたりして、全ての人が共生できる社会を模索しています。
息子がたけし君と出会ったときの話です。たけし君は息子が持っていたお菓子を奪って、ウロウロしながら全部食べました。でも、周りの人はそのたけし君の行為を咎めようとしません。息子はそのことが気になったらしく、後で私に「なんで、あの子はお菓子を取って食べたのに怒られないの？」と聞きました。確かに、そのとおりだな、と私は思ったんですね。同時に、息子から「あの子はどういう子なの？」と聞かれて、うまく答えられなかったんですね。自分も、息子もたけし君という存在をどう受け止めているのか、同じように戸惑った。まだうまく説明できないんですが、ものすごく貴重な経験をしたな、と思いましたね。
自分の子供が、TURN に関わることで、新たな出会いを経て何かしら持ち帰ってくる。そんな体験をしてくれたのが嬉しかった。それを、他の子供、あるいは大人でもいいので、多くの人がそうした体験をできる場があるといいな、という思いがありました。

柔らかいプロジェクトへの苦悩

でも「ここは、こういう体験をする場です」と何か目的のある場所、コントロールされた場所にはしたくありませんでした。そうすると人間は構えてしまいますし、先入観が生まれてしまう。そういう、ゴールが用意された“堅いプロジェクト”にはしたくなかった。
「何も目的のない場所ですよ」という空間をフェス４の中に生み出したい。特に何もルールは設定しない、“柔らかいプロジェクト”にしたかったのです。でも、一言で“柔らかい”と言っても、それを実現するのは難しいもの。どうすればいいのか、なかなか思いつかなくて、まずは名前だけは決めようと《NENNE｜ねんね》と名付けました。
それと、もう一つ決めたのは「自分はできるだけその場にいよう」ということ。自分も、その場にいる“当事者”として、何かが起きるその内部にいる。そうやって、このプロジェクトと向き合いたかったのです。
何も決まっていないプロジェクトというのは、アーティストにとってはリスクがすごく高い。未完成のものを、不特定多数の人たちの前に出すわけですから、怖さもあ

A

C

ります。だから、場をどういう形にするかも、ギリギリまで考えました。最初は布団を敷いたらどうかと考えていたのですが、「寝る」という目的を暗に示してしまうので、違うなぁと。「何もしない」ことがこんなに難しいとは思いませんでしたね。
結果的には、自分の目が届く４平方メートルの小上がりのスペースをつくることにしました。そこに、子供が飽きないようにいくつかおもちゃなどを置く。ただ、それだけのスペースです。それが決まったのが、フェスまで一週間を切っていたタイミングでした。こんな形で本番を迎えていいのか、当日まで不安はありました。本当の意味で「やるか」と思えたのは、フェス当日の朝です。

当事者とそうでない者の差

実際にフェスが始まると、時間によってこんなにも場が変化するものなのか、というのが興味深くて、不安はいつの間にか消えていました。知り合いが子供を連れてきて、自分の子供と何か遊んでいる。その横で、近況について話したり、TURN ってこんなプロジェクトなんだよって話したり。そんなすごく穏やかな時間が流れたかと思えば、私が席を外している間に、物が散らかっていて、全然違う場所みたいになっている。またしばらくしたら親子連れが入ってきてゆっくりしていて、お父さんが転がって寝そうになっていたりする。

集まった子供たちと突発的にツアーをしたのも面白かったですね。ただ、見て回るだけなんですけど、子供たちがフェス４の風景を見て、何を受け取ろうとしているのかを観察するのが楽しかった。わざと、反応に困るだろうなっていうところに連れてってみたり。
あとは、場が硬直しないように、井谷くんに協力してもらってその場でパフォーマンスを行ってもらったり、子供向けのワークショップをやってみたり。そんな、「柔らかくあり続けるため」の試行錯誤を３日間かけて行っていました。
フェスの間中、ずっと自分は「当事者とそうじゃない人の差」がどこにあるのかということを考えていました。《NENNE｜ねんね》にすっと入る人もいれば、遠巻きに眺めて、それ自体「何かの展示なのかな？」という目で見ている人もいる。
自分は当事者として《NENNE｜ねんね》の中にいるし、ついさっきまで全然知らなかった人が同じ場所でくつろいでいる。そうすると、外から見ている人にとってはその人も当事者になるわけですよね。その差ってなんなのだろう、もっとその差が曖昧になって、混ざり合うことができないのだろうか。

Ｘプレイスと名付けてみた

《NENNE｜ねんね》は子供がいる人だけを対象にした場所ではないんです。親子のためだけの場所ではない。子供、大人、社会、それぞれ単体の関係性が混じり合う場所を自分はつくろうとしていた、とフェスの後の振り返りで思うようになります。
そんな場所を、自分なりに「Ｘプレイス」と名づけてみました。サードプレイスという言葉があります。家がファーストプレイス、学校や会社がセカンドプレイス。その二つに属さない、心地のよい居場所としてサードプレイスがあり、例えばお気に入りのカフェや公園などを指します。そんなサードプレイスを突き詰めていった先に、不特定で不確定な場所「Ｘプレイス」があるんじゃないか。
それがどんなものなのか、まだ皆目見当もついていないのが正直なところです。でも、次にフェスの会場で何か場所をつくるとしたら空間のサイズを広げてはどうだろうか、という思考はしています。今回は４平方メートルでしたが、次は 40 メートル× 8 メートルとかどうでしょう。この大きさは、東京都美術館の一部屋くらいの大きさです。そうすると、自分の目が届かないテリトリーが生まれます。そこでは一体、何が起きるか？ ときにその場が一つになったり、ときに複数の状態が成立していたりするでしょうか。学校の校庭のような、ドッジボールをやっているテリトリーがあったり鬼ごっこをやっているテリトリーあったり、そんな場所が生まれるかもしれません。

無目的になって、混じり合う

TURN フェスの会場でもある美術館という場所には、ほとんどの人が目的を持って来るはずです。それに美術館はアクセスしやすい場所にはあまりなくて、いくつかの交通手段を経てたどり着く場所でもあります。そこまでして美術館に来て、人は無目的になれるのか、という実験でもある。
一度無目的になった後に、自分のテリトリーを見つけ、「ここにいていいんだ」という感覚を手に入れられる場所が TURN フェスの中にあったらどうだろう。そして子供、大人、障害の有無、国籍の違い…いろんな背景の人が混じり合って、“当事者”と“そうでない人”の差がなくなったらどうなるだろう。
TURN について、日比野さんの言葉も借りながら自分なりに「人が陸に上がって、二足歩行になって、脳が発達して、人間の文化が進化している。それを折り返して戻ってみて、海の中の生物、人間が人間になる前の存在の英知を借りてみること」と解釈しているんです。そう考えると、人間って手が二本生えていて、目が二つあって、耳があって、口があってというのを基準にしているけど、それは基準でもなんでもない。完全、不完全という概念自体、ただ人が考えているだけ。
言ってしまえば子供だって不完全なんです。一人で歩けないし、経験もないからいろいろ予測もできない。じゃあ“大人”である自分が完全かといえば、そうでもない。例えば井谷くんのように障害を抱えた人も、子供も、大人も、みんな実は一緒なんじゃないかと思うときが、最近あるんです。そうした感覚を得られる場所としてのＸプレイスを、僕は模索し始めているのかもしれません。

山城大督
美術家、映像作家。1983 年大阪府生まれ。映像の時間概念を空間やプロジェクトへ応用し、その場でしか体験できない《時間》を作品として展開する。2006 年よりアーティスト・コレクティブ「Nadegata Instant Party」を結成し、「MOT アニュアル 2012：風が吹けば桶屋が儲かる」（東京都現代美術館、2012）、「あいちトリエンナーレ 2013」など全国各地で作品を発表。現在、京都造形芸術大学アートプロデュース学科講師。

TURNの始まりと日比野克彦のショートステイ体験

2015年から始動したTURNの前身として、日本財団アール・ブリュット美術館合同企画展 2014−2015「TURN（ひとがはじめからもっているカ）／陸から海へ」が開催された。
日比野克彦は、社会福祉法人やNPO 法人の運営する4箇所の障害者支援施設に赴き、ショートステイ※の体験をとおして、53点の作品を制作した。日比野がここで経験した障害のある人たちとの生活が、現在のTURNの原点となっている。

※「ショートステイ」とは —— 障害のある人（あるいは児童）や高齢者が、家族など介護する人の事情や心的負担の軽減のため、一時的に福祉施設の入所支援を利用すること

［ショートステイが行われた日程・場所］

2014年7月29 −31日
みずのき　社会福祉法人松花苑（京都府亀岡市）

2014年8月18 −24日
あゆみ苑　社会福祉法人創樹会（広島県福山市）

2014年9月8 −10日
ワークスみらい高知
特定非営利活動法人ワークスみらい高知（高知県高知市）

2014年9月22 −24日
アルバ　社会福祉法人安積愛育園（福島県郡山市）

B

B

「みずのき」にみる福祉施設のTURN LAND

京都府亀岡市にあるみずのき美術館は、障害者支援施設みずのきの創立5年目の1964年に開設された絵画教室から生まれた作品を所蔵するとともに、2012年の開館時より社会福祉法人の公益事業として地元地域と連携したプロジェクト型の企画を多数実践している。フェス4では、みずのきとみずのき美術館における、1960年代から今日に至るまでの福祉とアートの取り組みの変遷を、年表やコレクション展示をとおして紹介。TURN LANDとの親和性が高い取り組みとして、地域との関係性を志向した先駆的な姿勢を辿った。また、TURN参加アーティストの久保田沙耶が2017年から始めた、みずのきの利用者やスタッフとの交流をとおして制作した作品《どこまでわたし／どこまであなた》を展示。18日（土）には、みずのきのヴィジュアル・アイデンティティを手がけたアートディレクターの菊地敦己と、美術館開設構想時より関わる学芸員の保坂健二朗をゲストに招き、これまでの出来事とともに、今後の展開を議論するオープンミーティングを実施した。

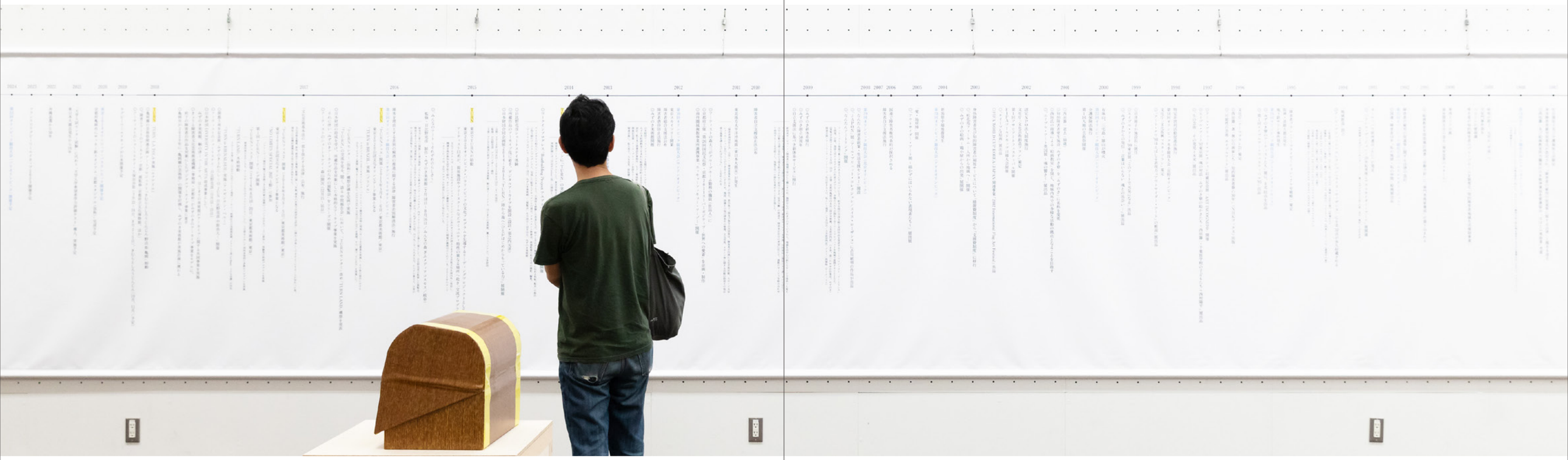
［トーク日程］

8月18日（土）13:30〜15:30
ゲスト：菊地敦己（グラフィックデザイナー、アートディレクター）
　　保坂健二朗（東京国立近代美術館主任研究員）

C

A

久保田沙耶の作品

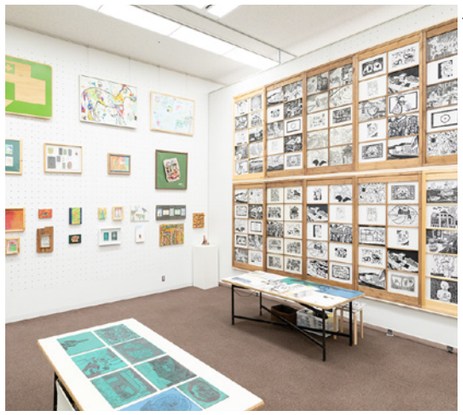

A

年表「みずのきとアートの取り組み」

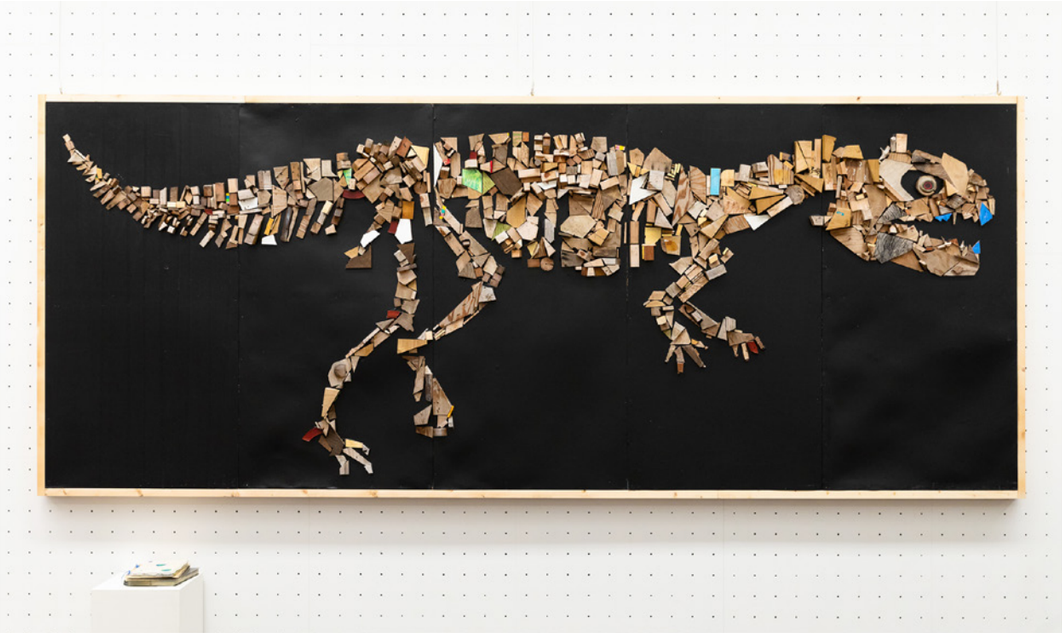
袋田病院の精神科医療とアートの取り組み

茨城県の精神科医療を専門とする袋田病院。2001年より造形活動を取り入れ、2013年より病院を「美術館」として見立てて一般の人を迎え入れる「アートフェスタ」を開催している。アートを介して精神科医療と向き合い、患者や利用者の社会参画を促す実験的な試みをとおし、社会へ問題提起を行ってきた。この袋田病院の取り組みを、フェス４ではTURN LANDの先駆的な活動と位置づけて紹介する。会場では、造形スタッフとして袋田病院に勤務し、アートフェスタのディレクションを務めるアーティストの上原耕生が、普段病院で行っているワークショップを展開し、患者や利用者が制作した作品も展示した。
また、袋田病院でのアートフェスタの変遷を言語化し、関係者や一般の人たちに幅広く伝えていくために、冊子『袋田病院のアート的社会実践～精神科病院が「美術館」になるまで～』を制作した。これまでのエピソードや関係者の思いを振り返りながらその活動の意義を言語化してもらった。フェス４終了後に開催された、第６回目のアートフェスタ「袋田病院美術館 Art festa 2018」では、TURN LANDに親和性のある現場を見せてもらった。医療従事者や患者や利用者という普段の立場や関係性を越え、一人ひとりが「袋田病院美術館」の当事者であり、表現者（アーティスト）としてこのイベントに関わる。そして来場者が袋田病院の敷地を行き交っていた。今年のテーマは「精神科病院によるアート的社会実践」。医療従事者や利用者自身が、身の回りの環境やその仕組みを意識的に変えていく日常的な実践の重要性を自覚的に社会へ問いかけていく。活動を地域に根ざしていこうとする試みが広がる様子を目の当たりにした。

A



A



袋田病院のワークショップで形づくられた恐竜

イラストで見る、TURN LANDの現在進行形

フェス４では、TURN LANDを展開する５つの施設の活動を紹介するコーナーを設けた。
2017年度からスタートしたTURN LANDでは、福祉施設やコミュニティがアーティストとともに市民にひらかれた参加型のプログラムを企画することで、TURNを日常的に実践する場をつくっている。TURN LANDの多くは、TURN交流プログラムの経験を経て、施設が主体となり活動が展開されている。現在、町田市にあるクラフト工房 La Mano、世田谷区のハーモニー、大田区の気まぐれ八百屋だんだん、板橋区立小茂根福祉園、そして西東京市にある東京大学大学院農学生命科学研究科の附属施設である「生態調和農学機構」の計５つの場所で展開している。
このコーナーでは、それぞれの施設が目指すTURN LANDのイメージや地域との関わりなどを、イラストレーターのふるやまなつみに彩られたイメージで紹介。また、これまでの活動記録として、写真やスケッチなどのアーカイブを展示しているほか、小茂根福祉園のコーナーでは、利用者の言葉からインスピレーションを受けてつくられたアーティストの宮田篤による作品も展示。それぞれの施設の資源を活かした活動のアーカイブに、足を止めてじっくり眺めていく人たちの姿が印象的だった。

A

C

田村尚子が伝えるラ・ボルド精神科病院の世界

写真家の田村尚子は、フランスのラ・ボルド精神科病院※に出向き、2006年よりそこで暮らしている患者や職員と交流を重ねながら、病院の敷地内や利用者の様子を撮影した。フェス4ではTURN交流プログラムのように、施設の患者、利用者やスタッフと日常的な時間をともに過ごした田村による写真と関連資料を紹介。また、ゲストを招いたトークを3日間にわたり展示空間の中で実施した。

［トーク日程］

8月18日（土）
15:00 ～ 15:45　三橋輝（医学書院）
17:30 ～ 18:30　管啓次郎（比較文学者、明治大学教授）

8月19日（日）
16:15 ～ 17:15　遠山昇司（映画監督）

※ラ・ボルド精神科病院 ── フランス中央部のサントル＝ヴァル・ド・ロワール地域に位置し、1953年、精神科医のジャン・ウリによって開設された。患者の自発的な活動を促すため、病院内は基本的に閉鎖せず、患者がどこでも巡回できるよう配慮しているほか、日常的に使用する公共スペースは患者が自ら管理している。

A

A

田村尚子（左）と遠山昇司のトーク

C

上田假奈代と編む施設の魅力

詩人の上田假奈代が、田村尚子とラ・ボルド精神科病院との関わりを詠んだことばの世界を披露した。

水の森

上田假奈代

窓から見える
ラ・ボルドは　水の森
土地の名は　ソローヌ

葉脈のさまがちがうさまざまな木々の
影のうしろにまえに
風がとまり
風がはこぶ

たえず這いずり回るちいさな虫は
水の森で
ちいさな声で
名前を呼ぶ

門はなかった

土はつづく

はじめに手紙を書いた

郵便配達人は
ラ・ボルドの精神病の患者に
その手紙を渡しただろう
受け取ったイヴは
その手紙のにおいを
嗅いだかもしれない

一分ほど歩くとラ・ボルドに到着する家から
出勤したウリ先生は
数日机の上に置かれた手紙を
イヴから受け取る

書斎のような診察室の壁に
かけてある
日本の古い絵
墨色の一匹の魚が棲む国から来た
手紙

ウリ先生は　予感する
その人が来ることを

飛行機でパリへ
電車で二時間半、揺られてブロア駅で降りて
迎えにきてくれた車に乗って　三〇分あまり
おおきなカバンとカメラ
けれど、このカメラはまだ使わない

ラ・ボルドの患者やスタッフたちと
いっしょにランチを食べて
撮影を申し出るも、断れる
半日の滞在は　すぐに帰る時間になる

ふたたび

カメラはポラロイド
撮った写真は本人への贈り物

写真に写り込んだみんなの顔は
診察室の先生に見せる顔とは違う、ね
年に一度は、訪れる

毎日、あたたかいスープを
みんなでわけて食べるように
ラ・ボルドの日々を
まなざしにとらえ
みんなに　すこしづつ返していく
その人が
ファインダーを覗かずに
ゆっくり　みつめてきたことを

その人は
「星座の会議」に　ついに出なかった

天気は　変わりやすい

村の人々のなかには
まだじろじろと彼らを見る人もいる

空が広い

ウリ先生もスタッフたちも
いきいきと工夫する

葡萄畑が広がって

土が　つづく

ラ・ボルドは、ラテン語の「境界」

そっと頭を撫でられた
「ラ・ボルドに、またおいで」

風が　さそう

散歩するように　本をひらく

チョコレートクレープはカメラ
マリファナ葉巻タバコはカメラ

ジャン・リュックは　うたう

夕暮れになると
虫たちは　いっせいに鳴きはじめる

その声は　風の声
なつかしい人の声
もう思い出すことはないと思っていた人の声

窓から見られた
ラ・ボルドは水の森

「ねえ、タバコあげるから、
クリスマスに、電話、ちょうだい」

上田假奈代 ── NPO法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）代表。1969年生まれ。3歳より詩作、17歳から朗読をはじめる。1992年から詩のワークショップを手がけ、2001年に「詩業家宣言」を行う。平成26年度文化庁芸術選奨文部科学大臣新人賞。

映像を通して新たな視点に触れる シアタースペース

フェス4 では、年間をとおして行っている TURN のドキュメントに加え、TURN へ示唆をもたらすさまざまな現場を追った映像・映画を上映するシアタースペースを新しく設置した。TURN LAND と親和性のある場所や、TURN の参加アーティストが関わるその他の活動の様子などをとおして、新たな視点に触れながら TURN を思考する場となった。

『ニーゼと光のアトリエ』

監督：ホベルト・ベリネール／2015 年／105 分

1940 年代、ブラジル・リオデジャネイロのペドロ２世病院の精神科医療に携わり始めた女医のニーゼ・ダ・シルヴェイラ。当時の治療法に異議を申し立て、理解を得られない中で病院内に創作活動を取り入れようと果敢に立ち向かってきた道のりを描いている。長い年月を経て多くの作品を輩出し、国内外の展覧会に招聘されるようになった。現在も、病院の敷地内にある美術館は、一般の鑑賞者や研究者を受け入れ、利用者とのさまざまな出会いを生み出し続けている。

「森山開次 × こころみ学園」

撮影：冨田了平／2018 年／30 分

栃木県足利市田島町に位置する障害者支援施設のこころみ学園。ブドウ栽培、ワイン醸造、山里整備、しいたけ栽培などの活動を行う福祉施設の自然溢れる風景の中で、ダンサーの森山開次が交流した記録映像。

『ソローニュの森』

制作：田村尚子　音楽：山口とも／2017年／ 8 分 45 秒

2016 年から三度滞在したのち、写真をまとめ、関西日仏学館（現、アンスティテュフランセ関西）にて制作、発表したものを、2008 年にラ・ボルド精神科病院のアトリエ・ドュ・シネマで上映。次の日にはウリ院長の呼びかけにより、約 70 名ほどの患者、ドクター、スタッフが集まり再度上映が行われた。音楽はフォトモンタージュを見ながら演奏された山口ともによる即興演奏が付けられている。

『VOICE 写真と音楽』

制作：田村尚子　音楽：猿山修、Ultra Living ／
2017 年／ 4 分 47 秒

ラ・ボルド精神科病院で滞在・撮影をする際、どのような作品を作っているかを紹介するために、同病院を撮影した写真とともに上映し、さまざまな交流のきっかけになった映像。

『KOMONE 1／TURN』

監督：田村 大（らくだスタジオ）／ 2018 年／約 30 分

重度の重複障害がある人から就労を目指す人まで、その人の特性に合わせた生活支援を行う福祉施設の板橋区立小茂根福祉園。TURN の映画制作を行っている田村大が、アーティストの大西健太郎や宮田篤の施設での交流する様子を追う。施設の日常に、定期的な TURN 交流プログラムが展開されることで、日常と非日常としての TURN が、次第に混ざり合っていく様子を記録したドキュメント映像。

『「ロミオとジュリエット」から生まれたもの ―2017』

制作：じゆう劇場／ 2017 年／ 約 90 分

手足に障害があってもライブで演奏できる方法を独自に考案し、表現活動をとおして、心のボーダーレス化を追及する音楽家の井谷優太。自身のコンサートのみならず、演劇の領域でも活躍する姿と出会うことができる井谷参加プロジェクト「じゆう劇場」による演劇公演『「ロミオとジュリエット」から生まれたもの –2017』の公演映像。　協力：特定非営利活動法人鳥の劇場

『すべての些細な事柄』

監督：ニコラ・フィリベール／ 1996 年／ 105 分

年に一度、観客を募って上演会を催す、フランスのラ・ボルド精神科病院。自然豊かな森の中で台本をもとに患者とスタッフが稽古をする。その練習風景から本番までの様子や、ラ・ボルドの住人の日常を温かい視線で捉えるドキュメンタリー映画。

『破片のきらめき 心の杖として鏡として』

監督：高橋愼二／ 2008 年／ 80 分

八王子にある平山病院の〈造形教室〉を主宰する安彦講平。40 年以上にわたって安彦が携わってきた精神科病院内でのアトリエの日常を、創作活動に取り組む患者の様子とともに捉えた 10 年間のドキュメンタリー映画。安彦は、茨城県にある袋田病院にも赴き、施設内でのアートの取り組みへの萌芽を生み出している。

［シューレ大学映像作品］

初年度から TURN に参加しているシューレ大学は、引きこもり・不登校など、生きづらさを抱える若者の学びの活動支援を行っている。シューレ大学で学んできた学生による、それぞれの視点を映し出した映像を上映。

『光のあざ』

監督：豊 雅俊／ 2016 年／ 35 分

『王子になった乞食』

監督：山本菜々子／ 2014 年／ 5 分

『冬の火』

監督：高橋貞恩／ 2015 年／ 3 分

『ベアテ・シロタ・ゴードン』

監督：豊 雅俊／ 2011 年／ 30 分

『ニーゼと光のアトリエ』―絵筆を選んだ精神科医からの継承―

2016年、TURN in BRAZIL の際に、リオデジャネイロにあるアール・ブリュットの美術館を訪問した。そのときの体験をきっかけに、今回のシアタースペースでの上映作品として『ニーゼと光のアトリエ』を選出した。この映画で描かれているのが、その美術館の前身である。
現存するアール・ブリュット美術館の様子とともに、映画の中で描かれた施設の変遷を振り返る。壮大な物語をもつ美術館や施設の人々に、今日においても引き継がれているものはなんだろうか。

2016年、ブラジルで TURN の発表を実施した際、現場のリオデジャネイロ中心地から少し離れた郊外にアール・ブリュットの美術館があると聞き、アーティストの五十嵐靖晃と赴く。そこで、私たちが最初に出会ったのは、裸足でふわふわと歩く一人の男性だった。美術館は、複数の棟にわかれた広大な精神科病院「ペドロ２世病院」の敷地内に位置する。木々に囲まれた、人気の少ない静かな精神科病院の空間で、その男性は路肩を一人でゆっくりと歩いていた。そののどかで自由な気風に触れながら、病院の正面入り口から対局に位置する美術館に辿りつき、施設内をさまざまなスタッフが案内してくれることになった。
コレクションされている約 3 万 5000 点の作品は、全てこの病院の患者によって創作されたものであり、1952 年に設立された美術館で展示したり、他の美術館へ貸し出したりすることで、施設内で生まれた過去と今の作品を発信し続けている。美術館の中には、絵を描いたり彫刻をつくったりするアトリエも併設されており、美術館のスタッフや来場者のみならず、患者も行き交う場所となっている。実際、スタッフが急遽上映してくれたドキュメンタリー映像を見ている中、ふと後ろを振り返ると、映像に登場する作家であり病院の患者でもある当の本人が顔を覗かせていた。精神科病院の敷地内には、医療施設や入所施設のみならず、演劇スペース、コミュニティスペースなど複数の機能を併設し、敷地内が一つの「まち」になっているような印象を受ける。また、興味深いことに、この美術館が携えるコンセプトの一つが「エコ・ミュージアム」となっている。「エコ」は環境の意味ではなく、「コミュニティにひらかれている」という意味で用いられ、患者も含めいろいろな人が居合わせることができる、小さく豊かなコミュニティ形成を目指しているという。まさに TURN センター構想（現在の TURN LAND）に通じるビジョンが地球の裏側のローカルな地域でも生まれていたことに、五十嵐とともに感銘を受けた。それぞれの作品のコンセプトや、過去に行われてきた治療と患者の関係を丁寧に説明してくれたスタッフからは、アートや表現への愛のある眼差しが溢れていた。元々アートとは縁がなかったこのスタッフは、前の仕事で体調を崩して無職になっていたときに、地元の幼馴染でもある美術館の学芸員が声をかけてくれたという。
美術館で出会った人たちをとおして、作品や表現することへ温かい姿勢と人と人のつながりが見受けられ、そして美術館が地域のネットワークや雇用の受け皿になっているその姿に、施設の変遷の中でゆるやかに脈々と継承される並ならぬエネルギーが流れているように感じた。

この豊かな場所を創設した精神科医ニーゼの信念とその奮闘を描いたのが、『ニーゼと光のアトリエ』である。ロボトミー手術や電気ショック療法、インシュリン治療などが当時の医学界で脚光を集めていた 1940 年代に、暴力的な治療を断固拒否し、絵画のワークショップや動物セラピーを取り入れた。当時の医師たちが、もっぱら解剖学的、物理的・科学的要因のみを高く評価する傾向の中で、彼女は患者一人ひとりの「心」に向き合ったのである。
同僚の医師たちの治療方法に異議を唱えたニーゼは、看護師によって運営されていた予算の少ない作業療法の担当を言い渡された。実際のところそれは、修繕やトイレ掃除など患者を働かせる担当部署であった。がらんどうの作業部屋を見渡した彼女は、まず、快適な場所に変えていくことから始める。看護師が患者に対して威圧的に接することも珍しくなかった気風の中、彼女が看護師に説いたのは「まずは（患者）をよく聞き、観察すること」。そして、病院に通う利用者を「患者」ではなく、「クライアント」と呼ぶことをルールにした。また、精神は身体と同様に、自己治癒力をとおして本来の形に戻ろうとするというユングの理論に共鳴し、その実践として、それぞれ好きな服を選ばせ、森林へピクニックにいく会を催すこともあった。そしてユングが着目した「無意識」に関心を持ち※、それを表現していくための手段として、患者に絵筆を持たせた。話すことだけを優位におかず、言葉にならない思いも大切にし、絵や彫刻など創作をとおして自己を表現していくことを推奨したのだ。いつしか作業部屋は、患者が思い思いに創作をする活気あふれる場所に変わり、一人ひとりの様子や表情が柔らかくなっていったのである。
彼女の実践に通底していたのは、自由な精神と、患者たち一人ひとりと対等であろうとする信念である。科学が動かないのであれば、芸術をとおして社会を変えようとしたニーゼ。75 歳で引退を強要された後も、車椅子生活になっても、病院での創作ワークショップへ通い続けた。彼女の姿と、彼女が大切にしてきた信念を継承し、またそれに基づいた誇りとともに、今日のペドロ２世病院内の美術館と施設に携わる人々の姿がある。

畑まりあ（アーツカウンシル東京）

© ココロヲ・動かす・映画社○

※ユングからの影響に由来し、ペドロ２世病院内の美術館は「無意識のイメージの美術館」と名付けられている。

海外アーティストがTURNフェスに初参加！

初めて、海外からのアーティストがTURNフェスに参加し、会場に新たな空間と時間が生み出された。これまでの海外展開で生まれたつながりが活かされ、2017年に南米で展開したTURN in BIENALSUR（ビエンナーレスール）に参加した二人のアーティストが来日。ペルーからのヘンリー・オルティス・タピアと、アルゼンチンからのアレハンドラ・ミスライは、母国での経験と日本での交流を実践に織り込み、展示とワークショップを披露した。

ヘンリー・オルティス・タピア

ペルー古来のシクラと日本のしめ縄

ヘンリーは、渋谷区の障害者支援施設「はぁとぴあ原宿」での約２週間の交流を経て、展示としめ縄をつくるワークショップをフェス４の会場で展開した。ヘンリーは当初、BIENALSURで用いた、天然繊維を用いて輪っかや結び目をつくるペルー古来の「シクラ」と呼ばれる技法をもとに形づくろうと考えていた。しかし、日本の生活に触れていく中、日本の自然素材を用いた特殊性や機能性に魅了されていく。そして、ペルー・アンデス地方の技法とも類似する（特にアンデスの草でできた縄を編んだりひねったりする技法で作られたインカの橋「ケスワチャカ橋」）日本の神事に使用される「しめ縄」を学ぶことにする。儀式的な側面や自然への敬意といった側面においても、日本とペルーそれぞれの関連性が見えてきた。

今回の展示の基軸となった藁を用いた太いしめ縄は、いずれも「はぁとぴあ原宿」の利用者たちと制作を進めた。ヘンリーは、しめ縄の制作工程で、利用者の人たちが関わった証を残そうとした。太いしめ縄から垂れるように吊るされた複数の細い縄を、一人ひとりの利用者の年齢の数だけ藁を用い、その人が両腕を広げた長さにしたのだ。そしてヘンリーは、施設でこれらの細い縄を編む際に、縄の端と端で本人と向かい合って座り、ゆっくりと編み仕上げていった。

A

C

C

シクラ

約5000年前に起源をもつシクラは、インカ帝国の公用語であるケチュア語※で「袋」を意味し、イグサやトトラ（ガマの一種）などの素材を用い、「シクラ編み」と呼ばれるかぎ針編みをベースにつくられる。ペルーでは、カラル遺跡やビチャマ遺跡などで昔のシクラが発見され、最古のシクラは建築構造物の基礎の一部であったことが解明された。また、その制作は、常に共同作業で行われてきた。先土器時代には、有機物や廃棄物を入れるものとして利用されている。結び目や針を用いて作られたネットの形状には幅広い用途があり、袋や網として、漁や採集などの活動に用いられたほか、ミイラとなる死体を包み飾るためにも使われた。

何世紀にもわたる知識と技術の伝承である湾岸地域特有のシクラは、現在リマやワウラに工芸品として残る。古代から用途は変化し、消滅の危機にさらされながらも細々と生産が続けられている。

※先住民言語の一つ。アンデス地域の広い範囲に分布している。

アレハンドラ・ミスライ

アルゼンチン北部に伝わるランダと日本のさをり織り

アレハンドラは、約３週間、台東区の「台東つばさ福祉会」が運営する二ヶ所の障害者支援施設でTURN交流プログラムを実施した。一ヶ所は、障害を持つ人の自立と社会参加を支援する通所施設「つばさ福祉工房」、もう一ヶ所は、宿泊を伴う共同生活や生活体験を提供する「たいとう寮」。アレハンドラは、二つの施設にそれぞれネット状のパネルを設置した。日々の活動の合間に、利用者がそのネットにロープや糸を結んだり、縫ったりといった簡単な作業に触れられるようにしたのだ。平日の日中はつばさ福祉工房で、夜や休日にはたいとう寮で作業を続け、全体の約半量が編みあげられた状態で、TURNフェス４の会場に持ち込んだ。フェス４でのワークショップでは、来場者が続きを施せるようになっていた。どこから編み始めてもよく、またその編み方もそれぞれの参加者に委ねられた。

アレハンドラが活用した刺繍の技法は、長年アレハンドラが研究してきた伝統工芸に基づいている。アルゼンチン北部のトゥクマンという町に古くから伝わるレース編み「ランダ」の技法に、今回アレハンドラがつばさ福祉工房で出会った「さをり織り」の素材や技法も加えられており、作品に一層の奥行きと彩りを添えていた。

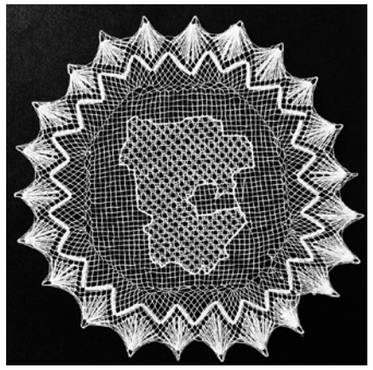
A

C

B

ランダ

ランダはアルゼンチンのトゥクマン、とくにモンテロスという地域にほぼ限定して行われている手工芸。モンテロスの集落の一つであるエル・セルカドには、レース編み職人の女性たちが多数在住している。
ランダは植民地時代より発展した。1565年にイバティン（トゥクマン州の最初の首都）が創立され、ここに定住したスペイン人女性たちがその技能の一つとして針編みレース製品の手仕事を持ち込み、口頭で子孫に伝えたことが始まりと言われている。現在この手工芸に携わるレース編み職人は約40人いるとされている。
ランダは、レース製品の一部をなす織物で、結び目をつくり、繊維を圧縮して大小の網目を描く。ヨーロッパでは 15 世紀より、レース製品の総称的な呼び名となった。モンテロスでつくられているレースは非常に独特で、職人は想像力を働かせて刺繍する箇所に特別な名前を刻んでいく。



岩田とも子と折形とブエノスアイレス

2017年に TURN in BIENALSUR に参加したアーティストの岩田とも子は、ブエノスアイレスに約１ヶ月半滞在し、主に知的障害を持つ人たちの通所施設「カミノス」に通い、利用者やスタッフと交流した。日本で学んだ伝統的な礼法「折形（おりかた）」の折る・包むという行為を丁寧に共有していく交流を行った岩田。施設の人たちとまちなかに繰り出し、落ちている小さな枝や小石などを集めたり、集めたものを包んだりすることで、折形を共有していった。
フェス４では、TURN in BIENALSUR 現地でも展開した鏡のインスタレーションをとおして、地球の裏側に思いを馳せたり、映った自身や他者と対話したりした。また、折形を体験できる展示やワークショップも行い、その合間にはブエノスアイレスやカミノスでの岩田による経験が語られた。

A

B

《あちらのあなたに石の意思を供える》の様子

A

《あちらの誰かと言の葉を交わして包む》の様子

TURN-LA TOLA

2018年6月から7月上旬にかけて、地球の裏側エクアドルにて、TURNを開催。参加アーティストの小野龍一と大西健太郎がエクアドルで展開した経験をもとに、フェス4ではその一部を紹介した。
小野は、TURN-LA TOLA（エクアドル）で制作した「PURENO」という空間楽器を再現した。「PURENO」を構成しているのは、ピアノから伸びる無数の糸。その糸に引き寄せられ、来場者が試しに1本弾いてみる。すると、同時に他の弦も共振しハーモニーが立ち上がり、あらゆる他者がこの楽器を通してアンサンブルへと参加する／させられる。空間におけるあらゆる音を総体的に「音楽」と見なす「もののね」的な、音楽というメディアが持つ包摂性（一種の暴力性）を現前させるという挑戦である。小野が演奏するピアノの音を体感するとともに、来場した子供や大人も弦に触れながら、弦の振動によって共鳴する音と空間に耳を澄ました。
大西は、新潟県十日町市莇平（呼称：アザビロ）という集落に古くから伝わる伝統的な盆踊り「シッチョイサ」を用いて現地の人たちと交流を行った。参加者それぞれによる「シッチョイサ」をもとに、それらをラ・トラ地区の道端で行うパフォーマンスへと作りかえ、最終的には10組のパフォーマンスがまち中に展開された。フェス4の会場では、その様子の一部を写真やテキストなどで報告。また、小野とともにTURN-LA TOLAのプロセスや現地の人たちとの体験を振り返るトークも開催した。
（TURN-LA TOLAの詳細は、137頁を参照）

A

A

8月18日（土）13:30～14:30　大西健太郎《東京のラ・トラのアザビロ》

フェス4でも繰り広げられた大西主導の「シッチョイサ」。板橋区立小茂根福祉園の利用者をはじめ、TURNサポーターなどさまざまな“ダンサーズ”と一緒に《東京のラ・トラのアザビロ》というタイトルで「シッチョイサ」を行った。まず歌い手が節にのせて歌い、合いの手として周りの人たちが「シッチョイサ！」「ヨシタネー、ヨシタネー」と声をかけるシッチョイサのスタイルを美術館の中でそのまま再現。突如歌声と掛け声が会場内に湧き上がり、来場者を驚かせた。パフォーマンスの後半では小茂根福祉園の利用者が歌い手となり、自分の思っていることなどをマイクパフォーマンスし、会場からは熱い合いの手が入るなど、盛り上がりを見せた。その場にいる人を巻き込みながら、スペースを目一杯使う《東京のラ・トラのアザビロ》に多くの来場者が魅了された。

A

さとちゃんとの交流、《共生するアトリエ》への思い

伊勢克也

取材・文：長瀬光弘

アーティストの伊勢克也が実施したプログラム《共生するアトリエ》。これは、美術館内で複数のアーティストがモデルデッサンや彫刻をリアルタイムで行い、来場者も自由に参加できるという企画だ。この突拍子もないプログラムが生まれた背景には、かねて伊勢が交流を重ねてきた岡本智美の存在がある。岡本は自閉症を抱えながらも、母親の薦めで女子美術大学短期大学部（以下、女子美短大）に入学。同校で教鞭を振るっていた伊勢と出会い、アートの世界にのめり込んでいく。岡本との出会い、TURNへの参加、《共生するアトリエ》のさらなるステップまで、伊勢がその思いを語る。

A

《共生するアトリエ》でデッサンする伊勢克也（右）

何が起きるのか、ワクワクしていた

《共生するアトリエ》を語る上で、岡本智美さん、通称さとちゃんとの交流は欠かせません。さとちゃんとの最初の出会いは13年前、私が講師を務める女子美短大に彼女が入学してきたときです。彼女は自閉症を抱えており、東京都立八王子養護学校（現名称：東京都立八王子特別支援学校）に在籍していました。当時、各種学校にあたる養護学校には大学への受験資格は与えられていませんでしたが、大学入学を目指した年に教育法の改正※があって、その道がひらかれました。とはいえ、実技試験だけでなく筆記試験が課せられるので、入学はできないはずでした。しかし、当時、本学の短期大学部に書類審査だけで入学が可能な「別科」という1年だけのコースが開設されていたのです。
入学はさとちゃんのお母さんの推薦でした。もともとさとちゃんは、美術活動には興味があったようで、いくつかアートを学べる学校に願書を送っていました。お母さんは教育法の改正については何も知らなかったようで、本当に偶然のタイミングで入学したことになります。
初めてさとちゃんと会う日、私はワクワクしていたのを覚えています。さとちゃんが女子美短大で活動する

ことで、どんなことが起きるんだろう、どんな風景が生まれるんだろう。そんなことを考えながら、さとちゃんがいる部屋に入ったんです。最初見たときは「大きい子だなぁ」と思いましたね（笑）。多動でウロウロしていて、“異質な存在”と感じると同時に、ワクワク感は高まりました。
お母さんの言う通り、彼女は美術が好きなようで、作品づくりに対する姿勢もすごくて、一回つくり出すと無限に続くんじゃないかというくらいつくり続けるんです。とにかく、集中力がすごい。
いろんな表現や素材に挑戦し、最後の頃に塑像やテラコッタ制作に出会います。これが、良かった。立体物は、物理的に限界があるので、終わりが来る。さとちゃんもすごく楽しそうにつくって、のめり込んでいきました。

変化するさとちゃんの環境とTURNとの出会い

そして女子美短大を卒業した後に、ある美術団体が主催する美術学校にお世話になることが決まります。そこでは、月謝を支払う代わりに、作業スペースや材料を提供してもらって自由に作品づくりができました。そして、なんといっても、そこにはさとちゃんの作品を評価して、心から受け入れてくれる先生方がいたのです。モデルを見ながら人体塑像を制作するアトリエですが、先生方は作品づくりの技術的なこともサポートしてくれ、彼女にとっては最高の環境でした。
しかし、しばらくして美術団体の体制が変わり、状況も徐々に変化していき、さとちゃんがそのアトリエでの制作を終える日が来ました。詳しい事情はわかりませんが、人が変われば、受け入れ体制も変わります。こればかりは、仕方ないのかもしれません。ただ、言えるのは、さとちゃんがいた時期のそのアトリエは他に例のない特別な場であったということです。自閉症を持つ作家とアーティストが共生することで化学変化のようなことが起きた。そのことはさとちゃんがそこで制作した数十体の彫刻作品に見ることができます。
その後、さとちゃんの作品制作の場所は八王子のいくつかの施設がメインとなります。その施設は自閉症やダウン症の方を対象にした施設で、利用者の作品を商品として販売し、工賃としています。そこで、さとちゃんは初めて自分の作品を売る、という体験をするのですが、そのことに少し抵抗を感じていたようです。売れなかった作品は施設に戻ってきて、白く塗りつぶされたり、破棄されたりしてしまうからです。
これは、スペースの都合や材料の再利用という観点から仕方のないことではあるのです。その施設が悪いわけではない。でも、さとちゃんはそれがどうしても受け入れられなかった。「最近、智美は作品づくりが楽しくないようです」そういった連絡をお母さんからもらうこともありました。
そんな折「TURN に参加しないか」と日比野さんから声がかかります。日比野さんは大学の先輩で長く付き合いがありますし、これも何かの縁だろうと参加を承諾。日比野さんからは「伊勢さんはお年寄りの相手が上手だから、デイサービスの施設に行ってみたら」と言われ、NPO 法人ももの会が運営する「桃三ふれあいの家」という施設に通うことになります。そこで、高齢者と一緒に俳句の会などに参加して、時間をともにする交流プログラムを行います。この交流をどう受け止めればいいのか、TURN ってなんなんだろうか、しばらくはそういったことを考える時期が続きました。
桃三ふれあいの家との交流を続けながらも、どこかでさとちゃんのことがずっと頭にありました。そんな中、ふと「そういえば、福祉関係の作業所って見たことないな」と思ったんですね。それで、福祉を目的としたアトリエを見に行きたい、と TURN 運営スタッフにお願いして、「綾瀬ひまわり園」や「アトリエ・エー」などいくつかの施設を見学しました。まだまだ、自分には知らない世界があるんだと気づかされましたね。都内には実は福祉関係の作業所が少ない、といったこともそのとき初めて知りました。その後も TURN LAND や小茂根福祉園のイベントにも自ら足を運んで…まんまと TURN されちゃったんですね。
そうこうしている内に TURN フェス 4 で何をやるか、考えなければいけない時期にさしかかってきました。その時の自分は、施設見学などを経たこともあって「さとちゃんがもう一度作品づくりを行える場所を用意したい」という思いが日に日に強まっていました。そうした思いを、何かしら形にするべく《共生するアトリエ》構想を提案したのです。

アーティストの領域にいる、“あちら側”の人

美術館は、アトリエと同じくアーティストのための場所。アーティストの領域に、さとちゃんのような“あちら側”の人が来て、作品づくりをしたらどうなるだろう。来場者も一緒に参加できるようにして、みんなが思い思いに作品をつくる。そんな多種多様な人たちが、共生するアトリエがあったら面白い。

塑像作品を制作するさとちゃん

この企画を運営サイドは快諾してくれて、フェスの会場レイアウトを変更したり、私のオフィスに置いてあったさとちゃんの彫像作品を搬入したりと、すごく協力してくれました。美術館にアトリエをつくるという考え自体があまりないもの。本来は、出来上がった作品を展示する場所ですからね。TURN というプロジェクトだからこそ、できた企画だと思います。
当日、久しぶりにさとちゃんに会いました。最後に会ったときよりも、何だかきれいになって、大人の雰囲気になっていましたね。何よりも、さとちゃんが楽しそうに作品づくりをしている姿を見られて、本当に良かった。久しぶりに一緒に時間を過ごせて、楽しかったです。実は、交流はしていても一緒に作品をつくったことはそこまで多くなかったんです。全てさとちゃんと相談しながらやったんですよ、さとちゃんも新鮮だったのか、いろいろとアイディアを出してくるんです。それがホントすごくてどんどん盛り上がっていく。そういう何気ないコミュニケーションが普通にできたようで、すごい良かった。
あと、面白かったのが来場者が意外に積極的に参加したがったんですよね。モデルが立っているのが物珍しかったのでしょう。「もともと絵を描いてたんですよ」っておもむろに描き出す男性がいたり、中国人が翻訳アプリで「私も描いていいですか？」って聞いてきたり。
さとちゃんがモデルにポーズを付けるのも面白かったですよ。タイトルも付けるんです。例えば、確か「8020」だったと思います。モデルを務めてくれた大久保由美さんが、昼食後に口に歯ブラシをくわえていたんですよ。それで、「じゃ、歯ブラシを持ってポーズとって」ってことになった。描き終わって、「さあ、さとちゃんタイトルは？」「うーん、はちぜろにいぜろ」、で、みんな「？？？？？？」。で、すぐに大久保さんが「80歳で20本は歯を残そうっていう8020運動のことじゃないですか？」って。「すごい！さとちゃん！」って盛り上がってね。実は、すごくたくさんの知識を持っているんですよ、彼女。
それから、最後にさとちゃんがつくった塑像作品も良かった。タイトルは「運ぶ人」。最後に「どんなのつくる？」ってさとちゃんに聞いたら、何か運んでいるポーズでつくりたいって。実際は何も持っていない両手を胸の前に持ってきて歩いているようなポーズなんだけど、制作の最後にポンっと彼女が粘土でつくったある塊を乗っけたんですよ。ちょうどそのとき、日比野さんがふ

らっと来て「何を運ぶの？」って聞いたんです。そうしたら、さとちゃんが「木を植えて、自然とともに…」とすごい勢いで話し始めた。自然に対するメッセージを彼女なりに込めてつくっていたんでしょう。

《共生するアトリエ》が生み出す風景

そうしたさとちゃんの作品づくりへの姿勢は、実は参加していた他のアーティストにも影響を及ぼしています。タバタ コウタというアーティストは彫刻を、身体表現と同じ感覚でつくるタイプなんだそうですね。スポーツ感覚とでも言うのでしょうか。そんな彼が、さとちゃんのように、何かしらテーマを設定した上で作品をつくるというスタンスを見て、大きな感銘を受けたみたいなんです。
そうした交流をさとちゃんのお母さんもすごく喜んでくれて、私に感謝のメールが来ました。お母さんとしても、さとちゃんの新たな姿を見ることができた。そのことが驚きでもあり、うれしかったようです。
このように、TURNフェス4の《共生するアトリエ》ではいろいろと印象的な場面がたくさん生まれました。アーティストの領域であるアトリエに、さとちゃんのような自閉症を抱えながらも、美術に対する情熱を持った人が入り込む。それだけで、刺激が生まれる。
そんな《共生するアトリエ》を一度で終わらせず、どこかにそうした空間をつくってしまおうと今計画しているんです。さとちゃんのお母さんも協力的で、一緒に場所を探してくれています。うまくいけば、そこでさとちゃんは好きなだけ作品づくりに没頭できる。私の作業場もそこに移して、アーティストや障害を抱えた人などいろんな人を呼んで一緒に作品をつくる。内外のアーティストも参加できるレジデンスが理想かな。そこにはいつもさとちゃんがいる。そんな風景を想い描いています。
いろんな人が交わることで、何かが起きるんじゃないかという楽しみ。それが日常的に起きるような場所を生み出すために、《共生するアトリエ》構想はまだまだ続いていくでしょう。

※教育法の改正 —— 学校教育法施行規則の一部を改正する省令が、平成15年9月19日文部科学省令第41号をもって公布され、同日施行された。これにより、高等学校卒業程度認定試験の合格（見込み）者のみならず、志願大学の認定を受けることで、当該大学の受験ができるようになった。個別の入学資格審査の実施、受験資格の認定は各大学の判断となっている。

A

ステージ会場を歩くさとちゃん

伊勢克也

アーティスト。1960年岩手県生まれ。自然／人工物／メディア空間等さまざまな環境で発生し存在するモノやイメージが形づくる形態をテーマに作品を制作し、さまざまなワークショップを行なっている。制作のためのプロジェクトや制作された作品は全て「Macaroni」という名称でまとめられている。現在、女子美術大学短期大学部教授・デザインコースメディア担当。

浜松市根洗学園にみる療育施設のTURN LAND

浜松市根洗学園は、過去40年にわたり、子供の中に内在する「発達していく力」「学ぶ力」に期待をかけ、親と先生と子供の三者が一体となって子供の育ちに取り組んでいる。当施設の療育の現場に「異物」を迎え入れるという考えから、約10年前から、アーティストをはじめ、外部の専門家との活動を始めた。活動は認定NPO法人クリエイティブサポートレッツの協力を得て始まり、現在、コーディネーター役を務めているのが「大と小とレフ」の鈴木一郎太だ。フェス4では、鈴木のディレクションのもと、TURN LANDに示唆を与える根洗学園での取り組みを紹介。美術家の深澤孝史との定期的な関わりから根洗学園で生み出された「おべんとう画用紙」や「根洗療育玩具工房」など、9年間続いたプログラムの一部を展示した。

A

kuriyaによる「多文化ユース・ツアー」

一般社団法人kuriyaによる、多様な背景を持つ若者たちとともにTURNフェスを巡るツアーを開催。kuriyaは、国を超え異なる文化で暮らす若者たちが、それぞれの違いを活かしながら活躍出来る社会を目指し、次世代を担うリーダーとして若者たちを育成している。今回のフェスでは、多様な背景を持つ若者たちが主体となり、参加者とともにツアーを行い、アクセシビリティについて考え、多様性・多文化を体感する機会となった。

多言語vlogツアー

11:00～12:00（所要時間：60分）
kuriyaのメンバーとともにフェス4を巡りながら、多言語（やさしい日本語・英語・ネパール語）で印象に残った企画や場所などをvlog（ビデオのブログ）として記録。その後、ブースで自ら撮った映像を紹介しあうことで、このフェスに多様な人たちが参加するためには、どのようなアクセシビリティが必要なのかをディスカッションした。

多文化六面パズルツアー

14:30～17:00（所要時間：2時間30分）
ユース、メンバーとともにTURNフェスを巡り、会場の中から参加者がそれぞれ6つの文化を見つけ、撮影。その写真を使った自分だけの六面パズルを創り、異なる文化に対する新しい視点や、発見をシェアするグループワークを行った。

B

C

今井さつきによる《人間ノリ巻き》

今井さつきによる《人間ノリ巻き》は、人を巻き込めるほどの大きなノリ巻きの中に体験者が入って、板前さんに扮した作家本人に勢いよく巻かれる作品。自分や友達のノリ巻きができあがったら、写真を撮ってオリジナルの名前をつけてメニュー表を作る。フェス4では、TURN 公式ロゴカラーのノリ巻きの具が準備された。参加者が選んだ好きな具と一緒にノリの上に寝転んでぐるっと一巻き。そのダイナミックな様子に、巻かれる本人だけでなく見ている人からも歓声が上がり三日間笑顔が絶えず、1日限定50名の参加に、「予約したい！」という声があがるほど、常に賑わいのあるコーナーとなった。
老若男女を問わないだけでなく、聴覚障害や視覚障害、身体障害のある交流先のメンバーも一緒に楽しむことのできた《人間ノリ巻き》の体験は、TURN らしい「アクセシビリティ」の可能性を考えるきっかけともなった。

A

永岡大輔と山崎大造と造る竹の《球体の家》

アーティストの永岡大輔による《球体の家》は、球体型の家を実現するものであり、同時にその家を用いて、大地に線を描こうというもの。現在、《最初の家》と題し、「もし人類が最初に球体の家をつくったとしたら、それはどのようなものか？」を思索するとともに実践している。竹で家を編み、土器で生活具をつくり、それをもとにどのような食が良いかを尋ねながら、原初の《球体の家》の中で生まれる線が想像されている。
フェス4で実施したワークショップでは、参加者が竹作家の山崎大造とともに竹を用いた小さな《球体の家》づくりに挑戦。竹というシンプルな素材に触れながら、我々の生活、ひいては社会にとって大切なものは何かを一緒に模索した。
※ ワークショップは、17日（金）9:30 ～ 17:00 に実施。

A

中崎透が木っ端でつくる《コッパーランド》

アーティストの中崎透が、いろいろな形をした木っ端を組み合わせたりつなげたりしながら、木っ端とともに遊ぶ《コッパーランド》を展開。木っ端が置かれるというシンプルなアクションによって、ときに出張《コッパーランド》のように、TURN LAND 展示エリアに出没したり、アーティストの山城大督による《NENNE｜ねんね》の子供たちの傍に広がって行ったりと、会場内の余白に人が立ち止まり集う「場」が即興的にできていった。また、木っ端を置く、塗る、入れ替えるという簡単なアクションでその場をつくることにも参加できるため、参加者の小さなクリエイティビティが発揮され、会期中常にその様子を変えながら TURN フェス会場を彩っていた。

A

アート・コミュニケータ東京

アート・コミュニケータ東京は、東京都美術館と東京藝術大学が連携して行っている「とびらプロジェクト」でのアート・コミュニケータ（愛称：とびラー）の活動を任期満了した有志たちが、新たな活動の機会を持つために設立した。年齢も、職業も、住んでいる地域も違う一市民の立場から、アートを通じて「人と人」、「人と地域」をつなぎ、よりよい社会を創ることを目指し活動している。フェス4では「日常非常日（ビジョウヒジョウビ）シート」をもとに、「自身にとって“非日常”だと感じるポイントを見つけること」をミッションに来場者が鑑賞・体験する機会をつくり、経験したことを通してコミュニケーションが生まれる場を創出した。参加証としての特製缶バッジを身につけた参加者が会場を行き交った。

A

A

DOOR LABO

「アート×福祉」をテーマに、「多様な人々が共生できる社会」を支える人材の育成を目指し、現代の福祉をより広い視点で捉え直す体系的かつユニークなカリキュラムを展開している「Diversity on the Arts Project」（愛称：DOOR プロジェクト）。東京藝術大学にて、2017年より文部科学省が推奨する履修証明プログラムとして始動した。DOOR プロジェクトの修了生が集う「DOOR LABO」は、現在福祉施設などでワークショップを実施するなど、東京藝術大学での経験を活かし積極的な活動を行っている。フェス4では、来場者と対話をしながらその場で生まれる手の動きや気持ちを大切にしながら、一人ひとりが心地よいと思う○△□の布をつくるワークショップを展開した。来場者の手によって、みるみる増えていった繋がった布によって、会場の壁面が彩られていった。

A

A

鈴木一郎太の3日連続トークシリーズで語られたこと
―異質、はざま、地域―

文：長瀬光弘

連日さまざまなゲストを招いてパネルディスカッションや対談が行われたトークスペース。美術館の中に突如として現れるその空間では、話者と参加者が向き合い、ときに真剣に、ときに笑顔を交えながら、多種多様な対話が繰り広げられる。そんなスペースで、「大と小とレフ」取締役の鈴木一郎太がゲストを招き３日連続トーク企画を行った。トークシリーズではどのような対話がなされ、企画、司会を務めた鈴木は何を思ったのか…？

鈴木一郎太は10年ほどアーティストとしてイギリスで活動。その後、故郷である浜松市にある認定NPO法人クリエイティブサポートレッツにて『たけし文化センター』※1の起草に携わり、さまざまな事業と連携した企画を担当していく。アートと福祉という二つの領域を行き来しながら活動を続けてきた鈴木の経験を、TURNにもぜひ活かしてほしい。そう考えていた運営チームは、フェス４への協力を打診する。そこで、鈴木から提案されたのが、３日連続のトークシリーズだった。このトークシリーズの設計意図について、鈴木に聞いた。
「福祉とアートがプロジェクトを実施するにあたり、価値の違いを内包した状態を保ちながら動くことができるのか、その先にどんな可能性がひらかれるのか、をポイントとしてトークの企画を進めました。
“一つの目的のために結託する”というよりは、“アーティストが力を発揮すること”、“当事者や支援現場にとって有意義なものが生み出されること”、というように別々の目的意識が生まれてしまうことはよくあります。それに対して、双方が乗ることのできる目的をつくる、歩み寄るなど、方法はいろいろある中で、“共通項を見出しながらもダブルスタンダードを維持する”ことができないか考えたかったのです。違いがプラスに転じ、その間でどんな振る舞いや配慮があり、専門性にはどんな相違があるのかなどの要素をそれぞれのトークに割り振っていきました」

いずれも濃密な対話がなされた三本のトークを、紙面の都合上、ごく一部となってしまうが、印象的な対話の抜粋版とともにご紹介したい。

※１　たけし文化センター ―― 障害などあらゆる特性のある個人が持つ文化を発信、創造する拠点。日々、さまざまなイベントやワークショップなどを開催している。

8月17日（金）14:00―15:30

異質なもの同士の出会い
―アーティストと療育現場の相性―

松本知子（浜松市根洗学園園長）
川口淳一（結城病院リハビリテーション部作業療法科科長）
片岡祐介（音楽家）

10年ほどアーティストとの取り組みを継続している浜松市根洗学園園長の松本知子、活動に参加するアーティストの片岡祐介、作業療法士の川口淳一を招き、実際の現場の様子からトークを広げた。“異物”としてアーティストに期待していること、施設への入り方や振る舞い方、アーティストと療育や福祉の相性についてなど、異質なもの同士が出会う現場ならではのリアリティ溢れる発言が飛び交った。

B

（左から）鈴木一郎太、片岡祐介、川口淳一、松本知子

PICK-UP TALK

鈴木　当初自分が施設に入るときに、“異物”であることを大事にしようと決めていました。例えば、初めてお会いしたときには、自己紹介と活動予定を話すのが普通です。でもあえてそうしないので、職員の方々からは警戒されます（笑）。

松本　私はその様子を見ていて、子供たちを守りたい親心もあると思いますが、一方で排除しているようにも感じました。そしてそのような反応が、施設がアーティストを受け入れる最初に起こるということは、障害においても、社会が受け入れる際にもこのようなプロセスがあること、とつながった気がしたのです。

鈴木　アーティストと職員の間で「“想定しないことが起こること”を想定する」という、異物が入ることを前提に最初の打ち合わせするのは、実はとても大事だと感じています。

片岡　僕も「“何も決めない”と確認し合う」ことはします。自分の活動を始めたばかりの頃、現場の雰囲気に流されて異物になりきれなかったこともありましたが、ひんしゅくを買おうが自分のやりたいようにやることの方が、誠実なことだと思うようになりました。

川口　根洗学園では、いつも行っている「からだあそび」※2に片岡さんがくっつく形で行ったことでの“中和感”が、職員さんの不安を緩和させた気がします。

片岡　もしかしたら合わせようとするよりも、お互いがやってることをただくっつけちゃった方がいいんじゃないか、と思うことすらありますね。

川口　それから、医療・福祉の現場で起こる日常の出来事を片岡さんはとても面白がってくれます。特養施設で寝たきりのおじいちゃんが首振っていて、その人の発する「ふーっ」という声に合わせてカリンバを打ち続けていました。徐々にその人の言葉がカリンバの音色になり、まるで話しているかのようになりました。それは僕らの感覚にはないんですよね。

鈴木　触れたことがないものを面白がるっていうのは、誰でもできると思うんです。でも片岡さんはそこで止まらず、驚いたことに対して、音楽家としてのリアクションがあるところが、僕はプロだなと感じています。

※２　からだあそび ―― 作業療法士の資格を持つ先生が中心となって行われていたプログラム。ありもので手づくりされた遊具での遊びを通じて、運動機能、周囲との関係性、心の動きなどに観察の目に向け、課題の発見や日常生活の中で見つかっている課題克服に向けた挑戦などを複合的かつ即興的に行う時間。

8月18日（土）15:30―17:00

支援と表現のはざま

アサダワタル（文化活動家・アーティスト、文筆家）

日常的に支援の現場に入る立場ではなく、内と外のはざまから全国各地で福祉に関わってきているアサダワタル。旧知の仲であり、互いに共通するスタンスで活動を続ける２人が、福祉現場での取り組みを例に出しながら、その可能性を探った。アサダが文筆家という立場で福祉の現場を切り取る際の違和感から、はざまに位置する人間への“期待”を鈴木が示唆する対話は特に印象深い。

C

ゲストのアサダワタル（左）と鈴木一郎太

PICK-UP TALK

アサダ　さまざまなプロジェクトに外部の人として関わるとき、内部にいる当事者たち、例えば障害を持った人や施設、コミュニティの職員の人たちに対して私はある種の「共犯関係」をつくっていこうと思っている。そうやって活動をしていく中で、私は文筆家でもあるので、関わる活動を残したり、広めるために原稿を書くんですね。活動を通して、当事者はこういう思いを持っているんだろうな、職員の人たちはこういうことを言いたいはずだ。そういうことを考えながら書いた原稿を確認してもらう。でも、「何か違う。私たちの気持ちをわかっていない」ということを言われることもあるんです。
それで、モヤモヤを感じることがすごくある。それでも書くのは、施設を一緒に運営している仲間ではない自分のような者が書くことでの公共性が生まれるのかもしれない、という思いがある。

施設の職員の気持ちを完全には理解できないよな、って考えるし。それは、職員側も自分の気持ちを理解できないのと一緒でもある。いや、それは自分のおごりかもしれないという気持ちもある。そんなモヤモヤを抱きながら、じゃあ何ができるのだろうか、というのを考えているところです。こういうモヤモヤ、あるんじゃない？

鈴木　僕はね、期待してるんです。アサダさんも、高崎君※3と車の中で音楽の話をしてましたよね。タブレット端末でお互いの好きな音楽を流し合いながら。それって、人同士の会話です。そうやって、人と人として話せる土壌がどこにあるのか、というのを僕は考えています。でないと、役割だけで見られてしまって、用がなくなれば「やっぱり外の人ね」となってしまうかもしれない。でもだからこそ、僕らみたいなコーディネーター、企画者、ディレクターとかはざまにいる人間が福祉の現場の当事者たちと人同士の会話ができたら、すごいプラスになっていくと思うんです。だから、そういう部分にすごく期待している。

アサダ　平たく言うと、コミュニケーションを取れっていうことですよね。単純に、同じ釜の飯を食ったりする中で、肩書きとか役割以前にあの人こういうこと好きなんだな、とかそういう時間って大事なんだと今の話を聞いて思った。あとは、現場との関わり方を半分内部、半分外部という塩梅でやれるのがいいんだろうな、と思う。でも、それができるのか。完全に異業種で、外の人間として入ります、という状況の中で、それができるのかということを考えていきたいですね。

※3　高崎君 —— 鈴木とアサダがともに関わるコミュニティFM「エフエム熱海湯河原」内のラジオ番組「ふれあいラジオ 雨上がりの虹」のパーソナリティを務めている高崎史嗣さんを指す。高崎さんは精神障害を持つ当事者であり、自身が好きな同人音楽にまつわる内容を中心とした番組を放送している。鈴木が言及しているのは、その番組制作の過程でのアサダと高崎の交流について。

8月19日（日）13:30—15:00

精神保健福祉士とコミュニティデザイナーに聞く「コミュニティと福祉とアートプロジェクト」

山崎亮（studio-L 代表、コミュニティデザイナー、社会福祉士）
新澤克憲（ハーモニー施設長）

コミュニティデザイナーとして知られ、社会福祉士の資格を最近取得した山崎亮と、精神保健福祉士でハーモニー施設長でもある新澤克憲をゲストに迎え、福祉とコミュニティの関係性について対話を行った。TURN LAND の将来を見据え、地域にひらかれた福祉施設のあり方における議論も展開。ディスカッションは都市計画のあり方にまで及び、地域で活動を実践していくにあたり重要な問いをもたらした。

A

PICK-UP TALK

山崎　とある事業でいろいろなタイプの障害特性を感じている人、感じたことがない人が集まって、面白いことやろうというプロジェクトを行いました。活動しながら相互に信頼関係を構築し、なんでも言えるようになって、最終的にはみんなで笑い合える状況をつくろうという目的です。
新澤さんたちも最初に『幻聴妄想かるた』をつくったとき、信頼関係がない外部からは「それは障害者をばかにしているのでは」とか言われませんでしたか？

新澤　ありましたね。「施設長は障害者を食いものにしてる」とか（笑）。最初は、そういう壁がいっぱいありましたが、メンバーたちがテレビやイベントで顔を出して語るようになってから変わってきました。ただ、「かるた」など表現として形になったものを提示した時はわかっていただけるのだけど、ぶつかるのは生活の場面です。例えば、気持ちが不安定になり、一晩中CDを掛けっ放しにして、うるさがられてしまうとか。そういう理解されにくい行動をする人が周囲とどう折り合いをつけて暮らしていけるか、それが一番、苦心するところです。

山崎　まず当事者ご本人たちの人となりを、なるべく地域の方々が知る機会をつくることですね。相手がどんな人かわかればある種の許容量の調整が、できるかもしれない。
ただ、これはもはや都市計画の問題ですが、人間が、こんなに密集して住むべきなのかも考えます。今、顔をあわせたり、話したりしたことがない相手に対して、ぷりぷり怒ったりおびえたりする人が多い。もっと距離を持って豊かに暮らせる都市計画にすべきではないかと考えています。

新澤　今までは地域の中で周囲の物音に神経質になって孤立してしまうのは精神障害の人の課題だったのに、最近は当事者以外の人たちのほうがぷりぷりしてしまう。生活音がお隣に漏れたような場合も「俺も我慢してるから、お前も我慢しなきゃいけない」といったクレームが現場に寄せられることが多いんです。それから、一人のメンバーが部屋で叫んでしまい、ずっと階上の人からクレームが続いていました。それがある日、上の階に外国人が引っ越してきて、お互い言葉が分からず、生活習慣が違うことで、かえって良い状態が生み出されることがありました。メンバーは、上の人から悪口を言われているという妄想がなくなり、上に住んでいる外国人は叫び声が気にならないのか、平和になりました。言葉が通じる人よりも、異質なもの、全然自分と関係ないものに囲まれた方が、衝突点は少ないのではないかと思った瞬間でした。

トークを終えた、鈴木はこう振り返る。
「トークを進めていく中で、福祉やアートをわざわざ意識して言葉を選んでいるときが幾度かありました。意識せずにいると、ただただ『他者との関係』の話をしている感覚になっていたのです。『隣のあの人大変でしょう？』『え、そんなことないですよ』近所の人とそんなやりとりがあったとき、価値観を決め打ちしたらいかんだろと思ったことを思い出しました。
人間社会2.0や3.0はどこにポイントがあるんだろう？いやいや、そんな進化ってことではなく、ただ目をひらいて周囲を見渡すというだけなのかもしれません。あの人があそこにいて、ここにはこんないい具合の光景が広がっている。同じ光景は見られないけれど、それぞれに見た光景はそれぞれに広がりを感じさせるんじゃないでしょうか。まだまだ人の可能性に期待を掛け続けたいし、最良の積み重ねより、いろいろな人の自由が当たり前に舞い出られる状態の方に期待したい。そんなの世迷言のようだったとしても、人がよく生きることを目指す福祉と、人が創ることをどこまでも味方できるアートが組むのであれば、『夢が見られなければ、逆にウソだろう』と一連のトークを通じて思いました」

さまざまな立ち位置にいる人たちが交わすトークから見えてくる、“人の可能性への期待”。鈴木はこの３日間を通して、その“期待”の意味を模索し、確認していたようにも思う。そして、鈴木は振り返りの言葉で、「アートと福祉」という関係性に託す価値を、「夢が見られなければウソだ」とストレートに表現してくれた。アートと福祉の間を行き来する鈴木ならではの、TURNに対する一つのテーゼを示してくれた、3日連続トークシリーズだった。

さまざまな現場の可能性を
多彩なゲストとともに語り合うトーク

フェス３に引き続き、フェス４でも異なる分野のゲストを招き、３日間とおしてさまざまなトークイベントを開催した。TURNの参加アーティストや交流先の関係者と、TURN 交流プログラムや海外展開などの現場を振り返り、それぞれで生まれた萌芽や思考において考察を深めた。また各方面で活躍する実践者とともに、TURN LAND や TURN のコンセプトに親和性がある、他のプログラムの関係者をゲストに招き、教育、福祉、移民、海外展開、コミュニティとアートの関係性、2021 年以降の文化的可能性など、多様なテーマを交えて語り合った。

8月17日（金）

10:45—11:45
オープニングトーク

日比野克彦（TURN 監修者）
森 司（TURN プロジェクトディレクター）
鈴木一郎太（「大と小とレフ」取締役）
司会：奥山理子（TURN コーディネーター）

フェス４のオープニングトークでは、「日常非常日」に託されたコンセプトについて語り合った。「訪れた人それぞれの日常が揺らぎ、『何かそういうのもありかもしれない』という感覚のレベルから TURN を考えていきたい」「アーティストが施設の活動を共有することで、TURN LAND の在り方を考え、広げる機会としたい」といった TURN の企図を話し合い、今回のフェスの全体設計を伝える幕開けとなった。

12:00—13:30
SDGs_2030年に向けて
～未来のコミュニティを考える～

海老原周子（一般社団法人 kuriya）
酒井恵美子（スターバックスコーヒージャパン広報部 Social Impactチーム）
司会：森 司

2030 年は、国連で採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」のための国際目標年。SDGs の基軸となる考えは、「誰ひとりとして取り残さないこと」。移民の若者たちとアートプロジェクトを実践する海老原周子、人のつながりを大切にしながら全国各地でサードプレイスを提供しているスターバックスの酒井恵美子。社会包摂を切り口とした多様性が活きるコミュニティのつくり方をテーマに考察した。移民の若者にとって、アートは生き方の指針を感じられるものになっているということや、パートナー（従業員）一人ひとりが生き生きと働くスターバックスがアーティストと実施したアートプロジェクトを介して提示しようとした個が輝くコミュニティのあり方についてなど、それぞれの経験をとおして体得した視点が語られた。

14:00—15:30
異質なもの同士の出会い
～アーティストと療育現場の相性～

松本知子（浜松市根洗学園園長）
川口淳一（結城病院リハビリテーション部作業療法科科長）
片岡祐介（音楽家）
司会：鈴木一郎太
（詳細は96頁参照）

15:30—16:15
海外と日本でのTURN 交流プログラム①
～アルゼンチンでの経験を通して～

アレハンドラ・ミスライ（アーティスト）
聞き手：畑まりあ（アーツカウンシル東京）

2017 年の TURN in BIENALSUR（ビエンナーレスール）への参加を契機に、アルゼンチンから来日したアレハンドラ・ミスライ。2018年夏、台東区の社会福祉法人台東つばさ福祉会へ通い、利用者やスタッフとの交流をもとに、これまでの経験との違いや共通することについてエピソードを交えて語った。
「計画を元に進むのではなく、交流のプロセスの中で設計され進んできたものが結果として現れた」と語るアレハンドラ。そこにいる人たちのリズムや日常の時間を知ること、真似ること。毎朝のラジオ体操に加わり同じリズムを行うことで、彼女の制作リズムにも新たな方法、見解が生まれた。
※日西逐次通訳有り

16:15—17:00
海外と日本での TURN 交流プログラム②
～ペルーでの経験を通して～

ヘンリー・オルティス・タピア（アーティスト）
聞き手：奥山理子

2017年の TURN in BIENALSUR への参加を契機に、ペルーから来日したヘンリー・オルティス・タピア。2018年夏、渋谷区の障害者支援施設「はぁとぴあ原宿」へ通い、利用者やスタッフと交流した。トークでは、ペルー古来の伝統的な技術「シクラ」を紹介するとともに、その技術と一緒に、来日してから学んだしめ縄編みをベースに行った交流の様子を語り、「自身が（交流中に）行ってきたことは、決して技術を教えることではなく、皆さんと寄り添って同じ経験をわかち合うことだったと思う」と考察した。はぁとぴあ原宿のスタッフも飛び入りでトークに参加し、「ヘンリーと利用者の時間の流れ方が合っていたのではないか。制作の工程でさまざまなシーンを間近で見ることができ、美しい光景が日々あった」と２週間の交流を振り返った。
※日西逐次通訳有り

17:00—17:30
日本での TURN を考える
～ TURN in BIENALSUR への参加を通して～

日比野克彦
五十嵐靖晃（アーティスト）
岩田とも子（アーティスト）
永岡大輔（アーティスト）

2017 年の TURN in BIENALSUR を契機に参加アーティストとして南米に赴いた五十嵐靖晃、岩田とも子、永岡大輔。五十嵐は TURN 初年度から、永岡は２年目から、日本での TURN 交流プログラムに参加している。海外での TURN を通して、彼らがみる今日の風景と、日本の TURN について対話をした。「地球の反対側の世界の日常」と「日本の日常」を行き来する中で、両者の日常がつながったり、反対側の存在を疑ったり、どちらにも属さない自分を発見したりと、三人の作家と日比野がそれぞれの言葉で「日常非常日」な体験について語り合った。

8月18日（土）

10:30—11:30
よもやまばなし
～移住が創起させたアートセンター構想～

イシワタマリ（美術家、山山アートセンター代表）
聞き手：奥山理子

結婚を契機に夫の故郷周辺への移住を決断したアーティストのイシワタマリは、現在、京都府北部の山間集落を拠点に、ひょうたんの生る小規模多機能施設が併設されたアートセンター構想を掲げている。この構想に彼女を駆り立てるものについてトークは展開。イシワタは、「家族」という最少単位のコミュニティに対する違和感から始まった生きづらさの正体について分析し、血縁や地縁に束縛されない新しい人間関係の模索を、アートと福祉が両輪となって取り組むことで可能とする未来を語った。

13:00—14:00
街を生きる
～教育現場での実践を通して地域に投げかけること～

宮下美穂（NPO法人アートフル・アクション事務局長）
鈴木一郎太

小金井市を中心に、小学校でのワークショップや街に介入する文化的実践を行ってきた宮下美穂。その活動がまとめられた報告書を読んだ鈴木一郎太は、「活動」そのものの捉え方における、福祉や教育の現場と文化事業の違いに着目。障害福祉施設や療育施設でアートの企画をコーディネートしてきた鈴木によると、福祉の現場では、プログラムを実施することに目が向き、通常の支援と切り分けられて捉えられてしまうことも多いという。一方で、アートフルアクションの活動では、文化事業ならではの視点や方法で振り返りを行うことで、事業の中で起こった子供たちの変化やその価値を、見える形で現場に返すことができているのではないかと考察した。また、文化事業が教育や福祉の現場へ入る際の連携の仕方や、各者の責任の取り方を考える時間となった。

15:30—17:00
支援と表現のはざま

アサダワタル（文化活動家・アーティスト、文筆家）
鈴木一郎太
（詳細は97 頁参照）

8月19日（日）

10:30—12:00
精神科病院によるアートの取り組み

上原耕生（現代美術家）
渡邉慶子（袋田病院作業療法士）
田村尚子（写真家）
聞き手：森 司

精神科医療の現場にアート的実践を取り入れ、TURN LAND に親和性のある取り組みを行ってきた袋田病院。病院での創作に患者やスタッフとともに精力的に携わってきた上原耕生と渡邉慶子。そしてフランスのラ・ボルド精神科病院にて施設の人たちと複数年かけて交流してきた写真家の田村尚子を迎えて、それぞれの現場の特性とその変遷、出会う人々や風景の変化などを語り合い、活動の継続において地域との関わりの可能性について語り合った。

13:30—15:00
精神保健福祉士とコミュニティデザイナーに聞く
「コミュニティと福祉とアートプロジェクト」

山崎亮（studio-L 代表、コミュニティデザイナー、社会福祉士）
新澤克憲（ハーモニー施設長）
聞き手：鈴木一郎太
（詳細は98頁参照）

15:45—17:15
クロージング・トーク：明日に向けて

日比野克彦
若林 恵（黒鳥社コンテンツ・ディレクター、編集者）
聞き手：森 司

フェス4の締め括りとなるクロージング・トークでは、ゲストに元 WIRED 編集長の若林恵を迎え、TURN について視野を大きく広げたフリートークを展開した。若林からは、「商業的な視点からすると、TURNをわかりやすく定義する必要があるのではないか」という提案とともに、行政と民間といった異なる実施主体によるアートプロジェクトの論点や、ソーシャルセクターの人材不足といった新たな視点を交えて、今後のTURN の展開について語り合った。

出会い、考え、共有する。個性が光る8つのツアー

8つのツアープログラムでは、それぞれ異なるナビゲーターが案内を務めた。ナビゲーターの陣容は監修者、コーディネーター、アート・コミュニケータ、大学院生などバラエティに富んでいる。同じ会場にもかかわらず、ナビゲーターによって全く違う体験を味わえるのが TURN のツアープログラムの醍醐味だ。TURN フェス４のツアープログラムは、「TURN との〈出会い〉を楽しむツアー」と「〈アクセシビリティ〉を考えるツアー」という２つのテーマで展開した。

A

「子供の視点」で楽しむツアー

フェス４のツアーを振り返って

「見えない」「聞こえない」「子供である」「きょうだいが障害をもっている」「福祉施設で働いている」というような、ナビゲーターにとっての日常を TURN フェス会場を一緒に巡ることで共有する８つのツアーは、誰かの日常と自分の日常がつながる「日常非常日」な体験の機会となった。
「ツアー」という名前は付いているが、一般的なギャラリートークのように決められたルートで解説を行うものではない。ナビゲーターが、それぞれの個性的な視点でフェスとの出会い方・楽しみ方を提案する。そこでは、背景の異なる人たちが時間をともに過ごし、「おもしろい」「美しい」などのポジティブな意見に限らず、「よくわからない」「困った」など戸惑いの気持ちまでをもそれぞれが自由に表現する。そして、初対面であるはずの参加者同士が丁寧にその発言に聞き入る。
参加者も自由に感じ考え、それを伝え合うことができる、ゆるやかにお互いを受け入れられていると感じる時間こそが、TURN らしい「ツアー」と言えるだろう。

山口麻里菜（NPO法人 Art's Embrace）

TURNとの〈出会い〉を楽しむツアー

監修者、コーディネーター、アーティストなどがナビゲーターを務めるツアーシリーズ。立ち止まる場所や、深く説明するところが異なり、それぞれの言葉や解釈でフェス４が表現されていく。参加者は、作品との出会いだけでなく、各ナビゲーターとの出会いも含めて楽しんでいる様子だった。

オープニングツアー

ナビゲーター：日比野克彦（TURN 監修）
フェス４のテーマ「日常非常日」という言葉の発案者である日比野克彦とともに会場を巡るオープニングツアー。TURN が生まれるきっかけとなった、2015年のショートステイ体験の話など、日比野自身と TURN の関わりを振り返りながら回るツアーとなった。

TURN フェス４ ギャラリーガイド

ナビゲーター：奥山理子（TURN コーディネーター）
TURN コーディネーターの奥山と運営本部スタッフが案内するギャラリーツアー。奥山自身がキュレーターを務める京都の障害者支援施設「みずのき」の解説や、昨年南米で展開した TURN プロジェクトの様子も合わせて紹介するなど、作品や取組みの裏側についても知ることのできる機会となった。

TURN さんぽ

ナビゲーター：アート・コミュニケータ（とびラー）
東京都美術館×東京藝術大学「とびらプロジェクト」で活動するアート・コミュニケータ「とびラー」がナビゲートを務め、少人数のチームに別れて会場内を“さんぽ”するツアー。ナビゲーターによって違うルートを回り、アーティストとの会話などを通じて、その場を体験し、感じて、考える、TURN を味わい尽くすプログラムだった。

妹のわりきれなさツアー

ナビゲーター：高橋梨佳（大学院生）
自閉症の姉を持つ大学院生・高橋梨佳とともに、会場にいる人に「兄弟・姉妹との関係」について即興的にインタビューしながら会場内を巡るツアー。「連絡先も知らない」という人や兄弟に障害者を持つ人など、それぞれ全く異なる兄弟・姉妹との関わり方から家族のあり方について対話を重ねる新感覚のツアーは各回定員を超える参加者が集まり大盛況だった。

きょうされんメンバーとゆかいな TURN フェスツアー

ナビゲーター：池田晶紀（写真家）、川瀬一絵（写真家）、
黒澤英明（きょうされんリサイクル洗びんセンター職員）、山崎秀仁（きょうされんリサイクル洗びんセンターメンバー）
写真家の池田晶紀と川瀬一絵が、初年度から交流を続けている障害者の就労支援を行う「きょうされんリサイクル洗びんセンター」の職員、利用者とともにフェス４の会場を巡るツアー。本ツアーのナビゲーターである４人は、４年前から交流を続けていてとても仲がいい。そんなメンバーとともに各展示やワークショップに参加していくことで、アーティストや交流先とまるで昔からの友達だったかのような距離感で過ごせる不思議な時間が生まれていた。

〈アクセシビリティ〉を考えるツアー

ワークショップ形式で実施するツアーを中心に構成されたシリーズ。ナビゲーターを務める視覚障害者や聴覚障害者、子供たちなど、それぞれの感覚や日常を追体験しながら、その状況をいかにともに楽しめるかを考えた。

「聞く」をテーマに楽しむツアー

ナビゲーター：石川絵理（NPO法人 TA-net 事務局長）
自身も聴覚障害を持つ石川絵理のガイドのもと、TURN フェス会場にある「音」を探してオリジナルマップをつくるワークショップツアー。参加者は、会場内で見つけた音を画材や折り紙をつかった工作によって表現し、“音の形”を石川に伝える。最後には、参加者が作った“音の形”が会場を模した白地図の上に並べられ、フェス４の音を手の感覚で味わえるマップが完成した。

「見る」をテーマに楽しむツアー

ナビゲーター：美月めぐみ（女優）、鈴木大輔
「演劇結社ばっかりばっかり」で全盲の女優として活躍する美月めぐみと一緒に、視覚情報以外でフェス４を楽しむ方法を考え、試すワークショップツアー。参加者は、それぞれが選んだ会場内のお気に入りの場所について、その風景を文章で描写する「写生文」を書く。最後にみんなで発表しあい、美月やほかの参加者がどのように感じ取ったか共有しあった。目で見えるもの以外の要素も多分に含ませながら言葉を尽くして伝え合うことで、ただ「見る」よりも深みのある鑑賞体験となっていた。

TURN フェスを「子供の視点」で楽しむツアー

ナビゲーター：TURN 運営本部スタッフ・TURN フェスサポーター、子供たち
未就学児の子供たちが自身の興味関心に合わせて自由にフェス４を楽しむことができるツアー。スタッフがアシストしながらもそれぞれの気持ちに正直に動く子供たち。魅力的だと感じたものに一直線に向かっていき、全身で楽しむ子供の感覚や視点を周囲の大人が知ることのできる機会となった。

きょうだい児
―ツアーで出会った、新たなテーマ―

取材・文：長瀬光弘　協力：高橋梨佳

「きょうだいについてどう思いますか？」

「きょうだい児」とは、障害を持つ人の兄弟、姉妹のことを指す。家族として、障害者と長い時間をともにしているにも関わらず、親と比較すれば“悩みや葛藤を抱える当事者”として触れられる機会が少ないのが現状だ。障害者家族の支援を考えたとき、家族の中でも特に障害児者の兄弟姉妹（きょうだい）は長い間支援の対象として見落とされがちだった。研究においても、障害のある当事者や母親を対象にしているものが中心だった。日本においては、1990年代ごろから次第にきょうだいへの支援の必要性が認識され始め、現在ではきょうだいの研究・支援策も増えつつある。きょうだいの会としては、新聞への投書できょうだいを募ったことがきっかけで、1963年に全国障害者とともに歩む兄弟姉妹の会が発足した。

TURNフェス4では、自閉症の姉を持つ大学院生高橋梨佳（以下、梨佳）が、妹としての葛藤や、姉に対する心境の変化を赤裸々に共有する「妹のわりきれなさツアー」が行われた。このツアーは、梨佳が会場を回りながら、自身の体験を語ったり、ツアー参加者や会場内にいるアーティストたちの兄弟・姉妹の関係性についてインタビューをしたりする。
梨佳の姉、舞は、身の回りにあるものをガムテープで埋め尽くしたり、袋などに詰め物をしたりといった行動を頻繁に行う。家族はそうした行動を問題行動として捉え、禁止していた。こだわりが強くうまく制作できないと周囲へ迷惑行為を取ることもあるからだ。
しかし、舞の製作物が、あるときアートとして注目を浴び、展示会に出品された。梨佳は、問題行動だった姉の行為が、ある場所ではアートとして評価される事実に戸惑い、“わりきれなさ”を抱えるようになり、きょうだい関係について考え始めるようになる。
「妹のわりきれなさツアー」で梨佳に「きょうだいとどういう関係ですか？」と聞かれた人たちの代表的な返答を紹介しよう。
「4人きょうだいで、唯一の兄はひと回り年が違う。あまり一緒に過ごしたことがないんだけど、兄は威厳のある存在だった。今はそうでもないんですけど（笑）」
「最近、きょうだいとは、ほとんど接してないです。連絡先も知らないぐらい…です」
「僕の中学の同級生の妹が、重い病気を持っていると聞いたときはショックだった。でも、その一瞬だけ。本人が思っているよりは周囲は気にしないんじゃないかな」
「一人っ子だから、きょうだいってどういう存在なんだろうって、子供のときは考えていた」
「僕のほうが兄ですが、妹に面倒を見てもらっています（笑）」
ツアーを終え、梨佳は「こんなにもきょうだいに対する考えが人それぞれ違うものだとは思わなかった。障害のある、ない関係なしに、フラットにいろんな人ときょうだい関係について話ができて、前向きな気持ちになれた」と振り返る。
かつて、姉について周囲に話すことを梨佳は避けていた。そんな彼女が姉の話を、オープンに話すことは勇気がいったに違いない。しかし、彼女は緊張するそぶりも見せず、落ち着いた声で自分の思いを語り、参加者に話を振っていた。そんな彼女の潔さや企画の斬新性に多くの人が惹かれたのか、このツアーは開催した3回全て定員を超える大盛況ぶりだった。

盛大な家族イベント

2012年、アーツ千代田3331で行われた「ポコラート全国公募展 vol.3」※。全国より1,332作品の応募から、厳正な審査を経て選出された214作品の一つとして姉の制作物も展示された。それを見たときから、梨佳は姉に対する向き合い方を変えていく。
「家にあったガムテープで埋められたダルマが、ホワイトキューブで展示されていて、不思議な感じでした。しかも、姉について、研究者やアーティストの方が議論している講演も行われていた。その講演を聞きながら『私も一緒に、姉について議論したい』と思ったんです」
ずっと一緒にいたはずの自分が“見えていなかった”姉の一面について、真剣に考え、語ろうとしている人がいる。当時大学生だった梨佳は、この事実をきっかけに「障害者とその家族」というテーマに興味を注いでいく。
そして2017年4月、大学院で「障害者芸術表現と家族の関係」をテーマに研究を本格的に始めた。研究では、障害を持つ家族へのインタビューを重ねながら、その関係性にフォーカスをしていく。
研究を続けながら、梨佳にはある思いが芽生えていった。
「おぼろげに自分が企画をして、姉の制作物を展示したいと考えるようになりました。それは、“制作物を見てほしい”というより“姉について改めて考えたい”という気持ちから生まれたように思います」
2018年に入り、フェス4での経験も相まって、日に日にその思いは膨らんでいく。しかし、いざ開催をしようと、一人暮らしをする東京で会場を探すが思うように場所が見つからない。そんな折、両親から「実家の引っ越しが決まった」という知らせが届く。
「20年近く住んできた実家から家族が引っ越すと聞いて、じゃあ“実家”で展示会をして思い出づくりにしよう、と思いつきました」

昔から梨佳は、家の中でイベントごとをつくるのが好きだった。お月見やゲーム大会などを企画し、口で伝えれば済むのに、わざわざパソコンでチラシをつくったりしていたという。そんな梨佳が、慣れ親しんだ家で最後となる“家族イベント”として、姉の展示会を行おうと考えるのは自然の流れだった。
2018年12月15日、16日と2日間にわたって、高橋家の実家を舞台に『高橋舞個展 はってる感じ @ 高橋家』は開催された。TURNジャーナル編集チームもこの展示を見に、浜松市まで足を運んでいる。浜松駅から車でおよそ20分。郊外に佇む、なんの変哲もないアパートの一室でその展示は開催されていた。ドアを開けると玄関一面に靴が並んでいる。中を覗くと、6畳ほどのリビングは人で溢れかえっていた。
来訪者は、舞がかつて通った学校の先生や近所の人、同じように障害者を家族に持つ人たちなど多種多様。高橋一家と懐かしげに話している人もいれば、掲示物（母親が舞について書いているSNSの投稿）を読み込んでいる人もいる。カップルで訪れているのか、若い男女が何か話しながら一つひとつの制作物をじっくりと眺めている光景もあった。
“主賓席”とも言うべき、リビングの窓際のソファには舞が座り、楽しそうに来訪者を眺めていた。たくさんの人が溢れかえるその光景に喜んでいたそうだ。ソファ前のテーブルには舞が“実演”で作り上げたカラフルなダルマと、素材となるガムテープが置かれている。
梨佳の母親と父親は来訪者との会話を楽しんでいるようだった。明るく、さまざまな来訪者と分け隔てなく話す、社交的な母親。部屋を一望できる席に座り、厳格そうだが時折見せる笑顔から優しさが垣間見える父親。
梨佳は、新聞記者やテレビ関係者からの取材に真摯に答えていた。予想よりも多すぎる来訪者に、やや戸惑っている様子でもある。
舞はこの家族とともにまさに“この場”で暮らし、詰め物やガムテープ貼りといった行動を取っていた。ありありと、その情景が目に浮かぶ。

高橋家の面々、色あせた床や壁、使い古された家具、部屋中に散らばる舞の制作物。これら全てが“展示物”として機能しているかのような、不思議な空間だった。
展示会を終えた梨佳は、何を思ったのか。
「終わってみると、自分はただただ盛大な“家族イベント”がやりたかったんだな、と気づきました。これまで高橋家が関わってきた人、新たに関わるかもしれない人。そして、これまでは問題行動だったはずの制作物。それらが一堂に集まる中で、家族で姉のことを考える。そんな“コト”を起こしたかったんでしょう」
では、展示会後に家族でどんな会話が交わされたのか。それを聞いても、はっきりと覚えていないと首をかしげる。
「あれ、何話したんだっけ…？ そういえば特に会話はしていないですね…」
わざわざ会話をしなくても、家族で同じ“コト”を体験できただけで十分、ということなのだろうか。
結果的にこの展示会には、想定を大幅に上回る約250人が訪れた。「正直、ちょっと疲れましたね（笑）。姉も、次の日はいつもより2時間くらい起きるのが遅かったです」。「妹のわりきれなさツアー」も予想外の盛況ぶりだったが、人を集める不思議なエネルギーがこのきょうだいにはあるのかもしれない。

TURNではこれまで、多くの“社会に埋もれがち”なテーマを扱ってきた。2018年、そこにまた一つ、“きょうだい児”という新たなテーマが加わった。梨佳だけではなく、多くのきょうだい児が社会には存在している。彼、彼女たちがわりきれなさを抱えながらも、前向きに日々を過ごせる“何か”を手に入れられるように、今後もこのテーマと向き合い続けていきたい。

※ポコラート全国公募展―― 千代田区とアートセンター「アーツ千代田3331」の共同事業「ポコラート」で公募されたアール・ブリュット作品を中心にした展示会。ポコラートとはPlace of “Core + Relation ART”「障がいの有無に関わらず人々が出会い、相互に影響し合う場」を意味する。

高橋梨佳
静岡県浜松市生まれ。首都大学東京大学院システムデザイン研究科所属。美術館でインターンをしたり、アート・コミュニケータ（とびラー）として活動している。

TURNフェス4 サポーター座談会

TURNフェスの会場運営をサポートする、ボランティアスタッフ「TURNフェスサポーター」。フェス4では過去最大人数となる100人近いTURNフェスサポーターが集結し、会場を盛り上げた。TURNのよき理解者であり、一番のファンでもあるサポーターたちは、フェス4をどのような思いで過ごしたのか？ 過去のフェスでもサポーター体験のある“コア”な3人に、参加した経緯やフェス4の思い出、TURNへの思いなどを伺った。

取材・文：長瀬光弘

アート、TURNとの関係

―― 今日は、TURNフェスサポーターでの活動についていろいろお聞かせください。まずは、自己紹介をお願いします。

佐藤　佐藤卓也です。都市計画に関わるエンジニアとして仕事をしながら、いくつかのアートプロジェクトへ参加しています。TURN フェスには、知人から誘われたことがきっかけで、TURN フェス２からサポーターとして参加しています。

和島　和島千佳子です。普段は幼稚園の職員をしていて、TURNフェスには１から４まで全てサポーターとして参加しています。アート・コミュニケータ（とびラー）で活動もしていて、「とびらプロジェクト」フォーラムでTURNの話を聞いたことがきっかけで参加しています。

山村　山村ゆかりと言います。私もとびラーとして、アート・コミュニケータをしている中で、TURN サポートのアナウンスがあり参加しました。フェス３から参加しているので、今年で２回目です。視覚障害者のガイドヘルパーとしての仕事もしています。

―― そもそもアート関係の活動に参加したのはどういうきっかけでしょうか？

佐藤　３年ほど前に仕事で都市のソーシャルデザインプロジェクトに参加したことがありました。大規模なプロジェクトで、いろんな会社から 40 人ぐらい集まって１年間を通して企画を行ったのですが、実行に移せませんでした。採算が取れない、ビジネスとしてはリスクが高い、といった理由で企画倒れになってしまったんです。

―― １年かけたものが、水の泡に。

佐藤　すごい虚無感がありました。その気持ちを紛らわしたくて、新しいことに挑戦したいと思っていろいろ調べているうちに、アートプロジェクトという言葉に出会ったんですね。採算とかなんとか言わないで、とにかくやる。そんな人たちがいるんだ、という事実に強い興味を持って、アートに関わるようになりました。

山村　私は、２年前までずっと自宅で義父の介護をしていたんです。専業主婦だったので、仕事という仕事もしていませんでした。義父を２年前に看取って、これからどうやって日々を過ごそうと考えていたときに、東京都美術館のアート・コミュニケータ募集の知らせを見たんです。新たな生活の中で“自分探し”をしたいとも思っていて、アートに関わる中で何か掴めるかもしれない。そう思って、アート・コミュニケータに応募しました。

サポーターの和島千佳子

和島　学生の頃に授業の一環で、ある特別支援学校に関わらせてもらったことがあるんです。そのとき、特別支援学校の先生が言っていた「子供は音楽や芸術に生きている」という言葉に出会ったのが、アートに関心を持ったきっかけです。その言葉が今でもずっと残っていて、アートプロジェクトに関わっています。

―― 数あるアートプロジェクトの中で、TURN に参加しようと思ったのはなぜでしょうか？

山村　娘が視覚障害者のボランティアと知的障害者のガイドヘルパーとして働いていて、専業主婦をしているときによく家で話を聞いていたんです。だから、福祉という世界は漠然とですが、自分の頭の中にありました。ぼんやりと福祉というワードが頭にある中で、アート・コミュニケータの活動をしているときに TURN を知り「これだ！」とピンとくるものがありました。アート、福祉、これが自分にとってのキーワードかもしれない。それが、TURN に参加した大きなきっかけです。

和島　私は TURN が立ち上がってすぐのときに知ったので、「これからできあがっていく感」に魅力を感じました。「自分でも、サポーターとして何か役に立てるかも」という気持ちにさせてくれる何かがあったんです。

佐藤　すごい、皆さんしっかりした理由があるんですね。私は、知り合いから誘われて、割と何でも参加するタイプなんで「いいよ」と二つ返事をしたのがきっかけで…。TURN についてはほとんど何も知らなかったんです。最初の説明会のときも、正直なんのことだかよくわからなかった（笑）。言葉は受け取っているんですけど、状況が理解できなかったんです。

「きっちりやろうとしなくていい」

―― TURN サポーターは会場内で来場者にプログラムの説明を行ったり、障害を持った方の鑑賞をサポートしたりといった形でフェスの運営に携わります。本番前に、全員に集まってもらい、説明会を行うのが恒例です。

佐藤　初めて参加したフェス２の説明会で、手話の講習会があったんです。そのときに初めて「そうか、聴覚に障害のある人たちも相手にするプロジェクトなんだよな」というのを、リアルに感じたことは今でもよく覚えています。

サポーターの山村ゆかり（左）と佐藤卓也

山村　作品を展示するといったものでもないですし。アーティスト一人ひとり、やることが違う。イメージははっきりとはつかないんだけど、とにかくやるしかないか、というのをいつも説明会のときは思いますね。

和島　そうですね、確かにはっきりと何をやるか、わからないまま本番を迎えることがほとんどです。他の美術展みたいに、しっかりシフトが組まれて、役割を与えられて、ということでもない。場所の割り振りなどはされるんですけど、そこで何かをしなきゃいけない、というよりは“その場に馴染む”ことを自分は大切にしています。

山村　フェス３のときに大西健太郎さんの《みーらいらい》のスペースの担当になったんですね。説明のときに、大西さん本人が「あんまりきっちりやろうとしなくていい。隙がないと、相手が入りにくいし、いい意味でダラダラやりましょう」と仰ったんです。その言葉で、すごく安心したことを覚えています。何かやるべきことをこなさなきゃいけない場ではないんだな、とそのときに思いました。

―― フェス４についても聞いていきたいのですが、まず「日常非常日」というテーマを聞いてどう感じましたか？

佐藤　また、わかんないのがきたなぁって（笑）。音だけだと何のことだかさっぱりだったんですけど、字面を見ると「あ、そういうことか」というのは直感的にわかりました。

和島　すごくしっくりきましたね。ぴったりなテーマ。

山村　そうですね、なるほど、というのは私も感じました。それがフェス４の入り口でしたね。

佐藤　今年は高校生やご高齢の方、外国の方もいたりして、かなり多様な顔ぶれでしたよね。

三者三様の体験

―― 今年は約 100 人に参加していただき、過去最高人数となっています。高校生もボランティア活動の一環で参加しました。年齢、経験の幅なども過去に比べて一番広かったかもしれないですね。

佐藤　印象に残っているのは１日目の夜。会場にいたほとんどの人がライブステージに行っていて、一人でポツンと担当していたスペースに佇んでいたことです。大分、ゆるい時間が流れていて、その日にあったことをまとめて書いていたんです。そのゆるい空気がよかったのか、通りすがりの人が声をかけてきて、感想やいろいろな意見を話してくれました。その時間が、とてもよかったです。

和島　私はサポーターとして入っている日に、どうしても竹で球体をつくるワークショップに参加したくて、休憩時間をわざと合わせて行ってきました。担当していたスペースのすぐ隣だったので、同じ持ち場の人に「休憩がてら行ってくるから、何かあったら呼んでね」って言って、さっと抜け出して（笑）。それが、とっても楽しかった。

―― さすが、４回目ともなると時間の使い方が上手いですね。山村さんはいかがでしたか？

山村　私は１日目だけ TURN サポーターとして参加したのですが、初めてサポーター長を担当して、あっという間に時間が過ぎていきました。でも、最後にライブを楽しむことができて、すごく充実した１日でしたね。それから、３日目にガイドヘルパーを担当している、視覚障害者の方をお連れしました。その方とは月に１回どこかにお出かけをしているのですが、TURN フェスに連れて行きたくて、誘ってみたんです。

佐藤　へぇ、すごい。

山村　先天的な視覚障害のある若い方で「美術館に行ったことある？」と聞いたら「あるけど、絵は見えないし、説明を聞いてもよくわからなかった」って言うんですよ。だから「美術館の概念が変わるようなことを今やっているから、行ってみませんか？」って誘ったんです。結果的に、すごく楽しんでくれたみたいでよかったですね。参加アーティストのアレハンドラさんの糸を興味深そうに触っていましたし、今井さつきさんの《人間ノリ巻き》も、実際に巻かれてすごい大興奮して喜んでいました。それから参加アーティストの佐藤悠さんの部屋で、すごい長く話していたんですね。会話も弾んでいました。終わった後に「何を聞いてたの？」と尋ねたら、「逆に、いろいろ質問されてたんですよ」と笑っていました。

わからないから、TURN を選んだ

―― 面白いですね。同じ場所なんですけど、皆さんそれぞれ全く違う体験をしています。これまでの TURN フェスとの関わりの中で、それぞれ何か変化はありましたか？

佐藤　TURN フェスに関わる中で、「サポーターを楽しませるサポーターになりたい」という思いを持つようになりました。いつも TURN フェスに参加すると「サポーターが一番 TURN を楽しめるんじゃないか」って感じるんです。それを、他のサポーターにも感じてもらえるように、例えばちょっと飽きてきたような顔をしている人がいたら、担当スペースを変えてみたりしているんです。そうやって、場をよくすることが自分は一番好きなんだな、と気づけたのは TURN のおかげです。

和島　TURN に参加すると、本当に予期せぬことが起きるんですよね。でも、危機感はなくて、あるがまま受け止めることができるんです。それは TURN でしか味わえない感覚。言葉を話すことができない人がいて、どうやってコミュニケーションを取ればいいのかわからない。でも、そこで自分の中からもう一人の自分が立ち現れてきて、自然と手足が動いて何かしらコミュニケーションを取ろうとしている。それが、心地いいんです。この感覚は、言葉にするのが難しいんですよね。あ、でも山村さんうなずいてくれてありがとう（笑）。

山村　すごくわかります、その気持ち。

和島　それが、アートの力なのかな、と思います。

山村　私も心地よさは感じます。TURN に参加していなければ絶対に出会っていなかったであろう人たちと出会い、刺激を受けて、自分の中で眠っていたものが起きた感覚、とでも言いましょうか。
それから自分でも何かやってみたいという思いもどんどん強くなっていって、最近「ブラインドアートの会」というのを始めたんです。視覚障害のある方に自身でアート作品をつくっていただくものです。第１回目は粘土を素材に選びました。いずれは晴眼者にもアイマスクをして同じ体験をしていただき、お互いの作品を触って鑑賞し合う、そのような会を目指しています。これは、TURN の影響がすごく大きいです。

―― サポーターの皆さんから、TURN の世界が広がっているんですね。

佐藤　今日、いろいろ話していて改めて思いましたけど、やっぱり TURN は単純に楽しいんですよね。なんか、人を誘うとき、それしか言いようがないと思う。「楽しいから、とにかく来てみて」って。

和島　何が楽しいのか、いつもうまく説明できないのがもどかしいんだけど、自分もそう言うだろうな。

山村　私も、今回視覚障害者の方を誘ったときはそんな感じでしたよ。「美術館の概念が変わるから」とは言ったものの、具体的な話はあまりしませんでした。TURN フェスでの体験って、人それぞれ違うし、どこを楽しいと思うかもきっと違うはずなので。

佐藤　同じグループだった高校生に聞いたんですよ。「なんで、数あるボランティア活動の中から TURN を選んだの？」って。そうしたら「なんだかわからなかったから」って言ったんですよ。他の活動は資料を読めば、だいたい何をやるかわかるけど、TURN は全然想像つかなかった。だから、選んだって。それでも、最後には「楽しかったぁ」って言って帰っていきましたよ。

和島　あはは、面白いですね。でも、その気持ちすごくわかります。わからないまま参加して、終わってみたらなんだか楽しかった。まさに、TURN サポーターの醍醐味ですね。

TURN サポーターは、フェス当日の支援だけでなく、プロジェクトそのものを支え、そしてひらいてくれる存在だ。より多くのサポーターが、サポートしたい、楽しみたい、と思えるプロジェクトとなるようにこれからも励んでいきたいと、この座談会を通して気分を新たにできた。
特に印象的だったのは、「わからないけど、なんだか楽しい」と三人がともに口にした TURN に対する感想と、和島さんが口にした「不測の事態も、あるがままを受け止めることができる」という言葉だ。
TURN サポーターを経験してみたいという人は「わからないまま、あるがまま」でいいので、ぜひ参加してみてはいかがだろうか。

この場でしか出会えない
一度限りのステージを体感！

フェス４のステージコーナーでは、３日間にわたり、TURN に関わるアーティストたちによるさまざまなイベントが繰り広げられた。TURNフェスの会場でしか味わえないパフォーマンスの数々に会場も盛り上がりを見せた。

A

フェス初日はスペシャルライブを開催

TURN フェス４ 初日８月17日（金）は夜間開館に合わせて、18:30〜20:30にスペシャルライブを実施。TURN に関わる４組の多彩なアーティストが出演。ここが美術館の空間であることを忘れるような、臨場感溢れるライブが行われた。

大西健太郎《オオオノマトペ》

大西健太郎は、《オオオノマトペ》というタイトルで、自身の特性である吃音をテーマにしたパフォーマンスを行なった。2018年の１月、浜松にある障害者支援を行う認定NPO法人クリエイティブサポートレッツが主催する音楽パフォーマンスの祭典「スタ☆タン２」にも出場し、そのときに初めてこのパフォーマンスを行っている。吃りの音の特徴をリズムや身体の動きに合わせて表現。ライブ・パフォーマンスの後に大西は、自身の吃音を自覚したときのことや、吃音を持つ人には言葉を発するちょっと手前で、本人よりも身体自体がもがいている様子に興味と魅力を感じると話した。

A

角銅真実・日比彩湖・金井麻里

音楽家・打楽器奏者の角銅真実は今回のスペシャルライブで、TURN を現代音楽の切り口からアプローチする試みを行った。角銅真実のほか、日比彩湖、金井麻里によるスペシャル編成で実施。現代音楽家スティーヴ・ライヒの「Clapping Music」やフレデリック・ジェフスキーの「パニュルジュの羊」などを演奏し、会場にいる人たちを巻き込みながら、その場にいる人と、そのときにしか生まれない音楽と向き合う時間を生み出した。

A

［写真下］どんどんテンポが速くなっていく「パニュルジュの羊」の演奏に、アーティスト・音楽家の小野龍一も飛び入りで参加。来場者もクラッピング（手拍子）で加わり、会場一体となって楽しんだ。

DJ Yuta & Yuichi《DJ Yuta & Yuichi Live at Tokyo Metropolitan Art Museum》

電動車椅子で生活する音楽家の井谷優太と中原勇一とのユニット「DJ Yuta & Yuichi」。脳性麻痺があり手が不自由な井谷は、タッチパネル式シンセサイザーを使ったスタイルで演奏を行っている。ライブでは、Wi-Fiで機材を同期させながら中原のギターとシンクロさせ、「宇宙」をコンセプトにした即興演奏を行った。最後に井谷は「テクノロジーを使うことで、障害があっても自由に表現することができる。これからも人々の心に届く音楽を演奏していきたい」とコメントした。

A

富塚絵美・マリー・島田明日香《ピジョツピジョツピあー》

アーティストの富塚絵美とパフォーマーのマリー、クラリネット奏者の島田明日香が、フェス４のために創作した楽曲「ピジョツピジョツピあー」。聴覚に障害を持つマリーが普段どのようにして音を感じているのか、友人である富塚が素朴な疑問を持ったことから、この作品がスタートした。耳だけでなく身体で感じるような、そして一人ひとりの中から立ち上がってくる「うた」を「ピジョツピジョツピあー」で表現。初日のスペシャルライブ以外にも、フェス４の３日間、それぞれゲストを迎えてさまざまな「ピジョツピジョツピあー」を展開した。

A

２日目、３日目も目まぐるしく変わるステージコーナー！

８月18日（土）

10:00 〜 11:00
富塚絵美《ぐらんぐらん体操》

全身の力を抜いて、脱力するための体操。車椅子に乗っている方や障害のある方でも、誰でも参加できる内容。当日は、横になって一緒に参加している人たちに手足をぶらぶら揺すってもらい、身体から力を抜くなど、一人ではできないエクササイズを行った。

15:00 〜 16:00
富塚絵美・マリー・島田明日香 × 大久保由美

初日にスペシャルライブを行った「ピジョツピジョツピあー」のチーム富塚絵美・マリー・島田明日香が、ゲストにダンサーの大久保由美を迎えてパフォーマンスを実施。大久保は伊勢克也の《共生するアトリエ》でモデルも務めた。

８月19日（日）

10:30 〜 11:30
大西健太郎《「お」ダンス》

「お」ダンスは、身体の表情や行為を手がかりに、言葉を介さないコミュニケーションをとる試みのこと。ペアになり、言葉を使わずに手や身体の動きだけでコミュニケーションをする「手の会話」を行う。そして、それを観ている周りの人たちが、そのやりとりに心が動かされたときに、「お」と声をかける。そんな、「手の会話」をするペアと声をかける側との有機的なやりとりが「お」ダンスである。大西健太郎がこれまで小茂根福祉園で実施してきた活動で、今回初めて施設の外で実施。当日はフェス４の会場に家族と訪れた小茂根福祉園の利用者も参加し、小茂根福祉園での「お」ダンスとはまた一味違ったコミュニケーションが生まれた。

15:00 〜 15:30
富塚絵美・マリー・島田明日香 × 新人Ｈソケリッサ！× 大久保由美 × 大西健太郎

富塚絵美・マリー・島田明日香が「新人Ｈソケリッサ！」と大西健太郎をゲストに迎えて、パフォーマンスを展開。新人Ｈソケリッサ！は、ダンサー / 振付家のアオキ裕キと路上生活者および元路上生活経験者によって構成されたダンスカンパニー。ステージスペース全体を使いながら、即興的なパフォーマンスを行った。

A

「新人Ｈソケリッサ！」と大久保由美、大西健太郎が加わった富塚絵美・マリー・島田明日香の最終日のパフォーマンス。《共生するアトリエ》に参加していた岡本智美も飛び入りで参加したり、来場していた子供も加わったりするなど想定外のことも起きつつ、その場にいる人たちとのコラボレーションで生まれるパフォーマンスとなった。

五十嵐靖晃の旅

アーティストの五十嵐靖晃は、「TURNは旅」と称し、日本各地、南極、南米など日本や海外のさまざまな地域で展開してきたこれまでの活動をとおして体感した「日常非常日」を紹介した。またゲストを招き、各所でのエピソードを交えながら、アーティストがさまざまな地に赴き交流することやTURNの可能性について語り合った。8月18日に実施したトーク「日本海の旅」では、TURN初年度から関わりのあるクラフト工房La Manoでの交流をこう振り返った。「初めて交流したとき、『遠くに旅をした』気持ちになりました。普段コミュニケーションしているやり方だと上手くいかない。普段ホームで暮らしているときは感じられないような、まるで旅に出たような、遠く違う国に行ったような感覚。それは物理的な旅という意味ではなく、内面的な旅でした」

A

トークゲストの高野賢二（左）と五十嵐靖晃

［トーク日程］

8月17日（金）
15:00 ～ 15:30「太平洋の旅 —海から見た世界の話—」

8月18日（土）
11:00 ～ 11:30「ペルーの旅 —月と糸つむぎの話—」
14:00 ～ 15:00「日本海の旅 —海から見た日本の話—」ゲスト：森真理子（torindo 代表理事）

8月19日（日）
11:00 ～ 11:30「南極の旅 —時間のない大陸の話—」
14:00 ～ 15:00「TURNの旅 —旅する糸の話—」ゲスト：高野賢二（クラフト工房 LaMano 施設長）

テンギョウ・クラとアフリカの施設との出会い

テンギョウ・クラは、ヴァガボンド（放浪する者）を自身のライフスタイルとして、国や地域を問わず移動と滞在を繰り返し、ストーリーを制作している。2017年に国内のTURN交流プログラムを経験したテンギョウは、その後アフリカの複数ヶ国に滞在し、現地の障害者支援学校やコミュニティ・センターを訪れた。フェス4では現地での出会いと交流の様子を捉えた記録写真を展示し、アフリカでの体験と日本でのTURN交流プログラムで見聞きしたことを来場者やゲストを交えて思考した。

A

［トーク日程］

8月19日（日）15:30 ～ 16:00
ゲスト：新澤克憲（ハーモニー施設長）、ライラ・カセム（デザイナー）、
ハーモニーのメンバー、橋本一郎（手話通訳）

野老朝雄と見て触れるデザイン

美術家の野老朝雄は、目の見えない人も見える人も「アルファベット」を体感できるワークショップを繰り広げた。手で触れることでも、アルファベットのかたちを認識しやすいように設計された野老によるオリジナルフォントは、三角定規とコンパスだけで再現できる。また、3つの異なる四角形で描く紋様シリーズ《RHOMBUS WORKS》では、「45個」「60個」のピースによるさまざまな紋様が参加者によって描かれた。
また、18日（土）には、建築家の鳴川肇とともにトークイベントを行い、デザインや設計におけるそれぞれのコンセプトや、社会へ投げかけている視点について語り合った。

A

鳴川肇が問いかける「モノの見方」

建築家の鳴川肇らは、面積比が極力正しい長方形の世界地図オーサグラフを開発した。今回はこの地図図法を用いた作品を展示した。アメリカの地質考古学者、ロン・ブラッキー博士が提供した大陸移動の詳細データを地図化した作品《オーサグラフ・クロノマップ120M》である。1億2千万年前から現在までの5つの時代を等高線のように年代順に重ね合わせたこの地図作品は、絶え間なく動く大陸の軌跡を歪み少なく表現している。地球史の長い時間軸を眺めることができるとともに、これまで見てきた「モノの見方」を問いかける。
※地図の名称は、「authalic（面積が等しい）」と「graph（図）」に由来。

C

［トーク日程］

8月18日（土）12:00 ～ 13:00
野老朝雄（美術家）、鳴川肇（慶応義塾大学 政策・メディア研究科 准教授）

佐藤悠による《お話しを聞きます》

「お話しを聞きます」と称した小部屋に入る。来場者はそこで、設置された電話を通して壁の向こう側にいる“誰か”と話したり、話しかけられたり、ともに思いふけったりする。壁の向こう側にいるのは、アーティストの佐藤悠だ。彼は、3日間を通して77人と話すことになった。多くの来場者は壁一枚向こうに佐藤がいる事実を、通話しながら知る。中には、どこか知らない場所に電話が繋がっていると感じる人もいた。最終日には20分以上も会話をすることもあったという佐藤は、コミュニケーションの時間が長くなるほど、相手がどこにいるのかよくわからなくなるという、興味深い感覚を得るとともに、そのことで逆説的なコミュニケーションの本質について考える経験を得たという。

C

TIME SCHEDULE

8月17日(金)

ツアー

10:00-10:45
日常非常日 オープニングツアー
ナビゲーター：日比野克彦 (TURN 監修者)

13:00-13:45
TURN フェス 4 ギャラリーガイド
ナビゲーター：奥山理子 (TURN コーディネーター)

16:00-16:45
妹のわりきれなさツアー
ナビゲーター：高橋梨佳 (大学院生)

17:30-18:30
「聞く」をテーマに楽しむツアー
ナビゲーター：石川絵理 (NPO法人 TA-net 事務局長)

トーク

10:45-11:45
オープニングトーク
日比野克彦
森 司 (TURN プロジェクトディレクター)
鈴木一郎太 (「大と小とレフ」取締役)
司会：奥山理子

12:00-13:30
SDGs_2030 年に向けて ～未来のコミュニティを考える～
海老原周子 (一般社団法人 kuriya)
酒井恵美子 (スターバックスコーヒージャパン広報部 Social Impact チーム)
司会：森 司

14:00-15:30
異質なもの同士の出会い ～アーティストと療育現場の相性～
松本知子 (浜松市根洗学園園長)
川口淳一 (結城病院リハビリテーション部作業療法科科長)
片岡祐介 (音楽家)
司会：鈴木一郎太

15:30-16:15
海外と日本での TURN 交流プログラム①
～アルゼンチンでの経験を通じて～
アレハンドラ・ミスライ (アーティスト)
聞き手：畑まりあ (アーツカウンシル東京)

16:15-17:00
海外と日本での TURN 交流プログラム②
～ペルーでの経験を通じて～
ヘンリー・オルティス・タピア (アーティスト)
聞き手：奥山理子

17:00-17:30
日本での TURN を考える
～ TURN in BIENALSUR への参加を通して～
日比野克彦
五十嵐靖晃 (アーティスト)
岩田とも子 (アーティスト)
永岡大輔 (アーティスト)

ステージ

18:30-20:30
スペシャルライブ
・大西健太郎《オオオノマトペ》
・角銅真実・日比彩湖・金井麻里
・DJ Yuta & Yuichi《DJ Yuta & Yuichi Live at Tokyo Metropolitan Art Museum》
・富塚絵美・マリー・島田明日香《ピジョツピジョツピあー》

シアター

10:00-11:45
『ニーゼと光のアトリエ』
監督：ホベルト・ベリネール

12:00-13:15
『光のあざ』（シューレ大学映像作品)
監督：豊雅俊
『王子になった乞食』（シューレ大学映像作品)
監督：山本菜々子
『冬の火』（シューレ大学映像作品)
監督 : 高橋貞恩
『ベアテ・シロタ・ゴードン』（シューレ大学映像作品)
監督：豊雅俊

13:30-14:30
「森山開次×こころみ学園」
撮影・編集：冨田了平

14:30-16:00
『「ロミオとジュリエット」から生まれたもの –2017』
制作：じゆう劇場　協力：特定非営利活動法人鳥の劇場

17:00-17:15
『ソローニュの森』
制作：田村尚子 音楽：山口とも
『VOICE 写真と音楽』
制作：田村尚子 音楽：猿山修、Ultra Living

17:30-18:00
『KOMONE 1/ TURN』
監督：田村 大 (らくだスタジオ)

各ブースでのミニトーク・ツアー・ワークショップ

11:00-12:00
多言語 vlog ツアー
ナビゲーター：一般社団法人 kuriya ＋ユース

14:30-17:00
多文化六面パズルツアー
ナビゲーター：一般社団法人 kuriya ＋ユース

15:00-15:30
トーク：太平洋の旅〈海から見た世界の話〉
五十嵐靖晃

———

8月18日(土)

ツアー

12:15-13:00
妹のわりきれなさツアー
ナビゲーター：高橋梨佳

14:00-15:00
「見る」をテーマに楽しむツアー
ナビゲーター：美月めぐみ (女優)、鈴木大輔

15:00-15:45
TURN さんぽ
ナビゲーター：アート･コミュニケータ (とびラー)

16:00-16:45
TURN フェス4 ギャラリーガイド
ナビゲーター：奥山理子

トーク

10:30-11:30
よもやまばなし
～移住が創起させたアートセンター構想～
イシワタマリ (美術家、山山アートセンター代表)
聞き手：奥山理子

13:00-14:30
街を生きる
～教育現場での実践を通して地域に投げかけること～
宮下美穂 (NPO 法人アートフル・アクション事務局長)
鈴木一郎太

15:30-17:00
支援と表現のはざま
アサダワタル (文化活動家・アーティスト、文筆家)
鈴木一郎太

ステージ

10:00-11:00
富塚絵美《ぐらんぐらん体操》

13:30-14:30
大西健太郎《東京のラ・トラのアザビロ》

15:00-16:00
富塚絵美・マリー・島田明日香×大久保由美

シアター

10:00-11:15
『光のあざ』（シューレ大学映像作品）
監督：豊雅俊
『王子になった乞食』（シューレ大学映像作品）
監督：山本菜々子
『冬の火』（シューレ大学映像作品）
監督 : 高橋貞恩
『ベアテ・シロタ・ゴードン』（シューレ大学映像作品）
監督：豊雅俊

11:30-12:00
『KOMONE 1/ TURN』
監督：田村 大 (らくだスタジオ)

12:15-14:00
『ニーゼと光のアトリエ』
監督：ホベルト・ベリネール

14:00-15:00
「森山開次×こころみ学園」
撮影：冨田了平

15:30-15:45
『ソローニュの森』
制作：田村尚子 音楽：山口とも
『VOICE 写真と音楽』
制作：田村尚子 音楽：猿山修、Ultra Living

15:45-17:30
『すべての些細な事柄』
監督：ニコラ・フィリベール

各ブースでのミニトーク・ツアー・ワークショップ

10:00-12:30
『共生するアトリエ』公開彫像制作　※会場：東京都美術館 スタジオ
伊勢克也 (アーティスト)

11:00-11:30
トーク：ペルーの旅〈月と糸つむぎの話〉
五十嵐靖晃

11:00-12:00
多言語 vlog ツアー
ナビゲーター：一般社団法人 kuriya ＋ユース

12:00-13:00
クロストーク
野老朝雄（美術家）
鳴川肇 (慶應義塾大学 政策・メディア研究科 准教授)

13:30-15:30
みずのき美術館運営会議的ミーティング
菊地敦己 (グラフィックデザイナー、アートディレクター)
保坂健二朗 (東京国立近代美術館主任研究員)
奥山理子

14:00-15:00
クロストーク：日本海の旅〈海から見た日本の話〉
森真理子 (torindo 代表理事)
五十嵐靖晃

14:30-17:00
多文化六面パズルツアー
ナビゲーター：一般社団法人 kuriya ＋ユース

15:00-15:45
クロストーク
三橋輝（医学書院）
田村尚子（写真家）

17:30-18:30
クロストーク
管啓次郎（比較文学者、明治大学教授）
田村尚子

8月19日（日）

ツアー

10:00-10:45
TURN フェス 4 ギャラリーガイド
ナビゲーター：奥山理子

11:15-12:00
TURN さんぽ
ナビゲーター：アート・コミュニケータ（とびラー）

12:00-13:00
「聞く」をテーマに楽しむツアー
ナビゲーター：石川絵理

13:00-13:45
きょうされんメンバーとゆかいな TURN フェスツアー
ナビゲーター：池田晶紀（写真家）、川瀬一絵（写真家）、
黒澤英明（きょうされんリサイクル洗びんセンター職員）、
山崎秀仁（きょうされんリサイクル洗びんセンターメンバー）

14:00-14:45
妹のわりきれなさツアー
ナビゲーター：高橋梨佳

トーク

10:30-12:00
精神科病院によるアートの取り組み
上原耕生（現代美術家）
渡邉慶子（袋田病院作業療法士）
田村尚子
聞き手：森 司

13:30-15:00
精神保健福祉士とコミュニティデザイナーに聞く
「コミュニティと福祉とアートプロジェクト」
山崎亮（studio-L 代表、コミュニティデザイナー、社会福祉士）
新澤克憲（ハーモニー施設長）
聞き手：鈴木一郎太

15:45-17:15
クロージング・トーク：明日に向けて
若林恵（黒鳥社コンテンツ・ディレクター、編集者）
日比野克彦
聞き手：森 司

ステージ

10:30-11:30
大西健太郎《『お』ダンス》

14:30-15:00
新人 H ソケリッサ！《ソケリッサ体操》

15:00-15:30
富塚絵美・マリー・島田明日香×新人 H ソケリッサ！×大久保由美×大西健太郎

シアター

10:00-11:00
「森山開次×こころみ学園」
撮影・編集：冨田了平

11:00-12:15
『光のあざ』（シューレ大学映像作品）
監督：豊雅俊
『王子になった乞食』（シューレ大学映像作品）
監督：山本菜々子
『冬の火』（シューレ大学映像作品）
監督：高橋貞恩
『ベアテ・シロタ・ゴードン』（シューレ大学映像作品）
監督：豊雅俊

12:30-13:00
『KOMONE 1/ TURN』
監督：田村 大 (らくだスタジオ)

13:00-14:45
『すべての些細な事柄』
監督：ニコラ・フィリベール

14:45-15:00
『ソローニュの森』 制作 : 田村尚子 音楽 : 山口とも
『VOICE 写真と音楽』 制作 : 田村尚子　音楽 : 猿山修、Ultra Living

15:30-16:50
『破片のきらめき 心の杖として鏡として』
監督：高橋愼二

各ブースでのミニトーク・ツアー・ワークショップ

11:00-11:30
トーク：南極の旅＜時間のない大陸の話＞
五十嵐靖晃

11:00-12:00
多言語 vlog ツアー
ナビゲーター：一般社団法人 kuriya ＋ユース

11:30-12:30
トーク：ハーモニーと、『超・幻聴妄想かるた』を通して知る
　　メンバーの生きる世界
米津いつか（『超・幻聴妄想かるた』編集）
ライラ・カセム（『超・幻聴妄想かるた』デザイン）
佐藤恵美（編集者）
新澤克憲

14:00-15:00
クロストーク：TURN の旅〈旅する糸の話〉
高野賢二（クラフト工房 La Mano）
五十嵐靖晃

14:30-17:00
多文化六面パズルツアー
ナビゲーター：一般社団法人 kuriya ＋ユース

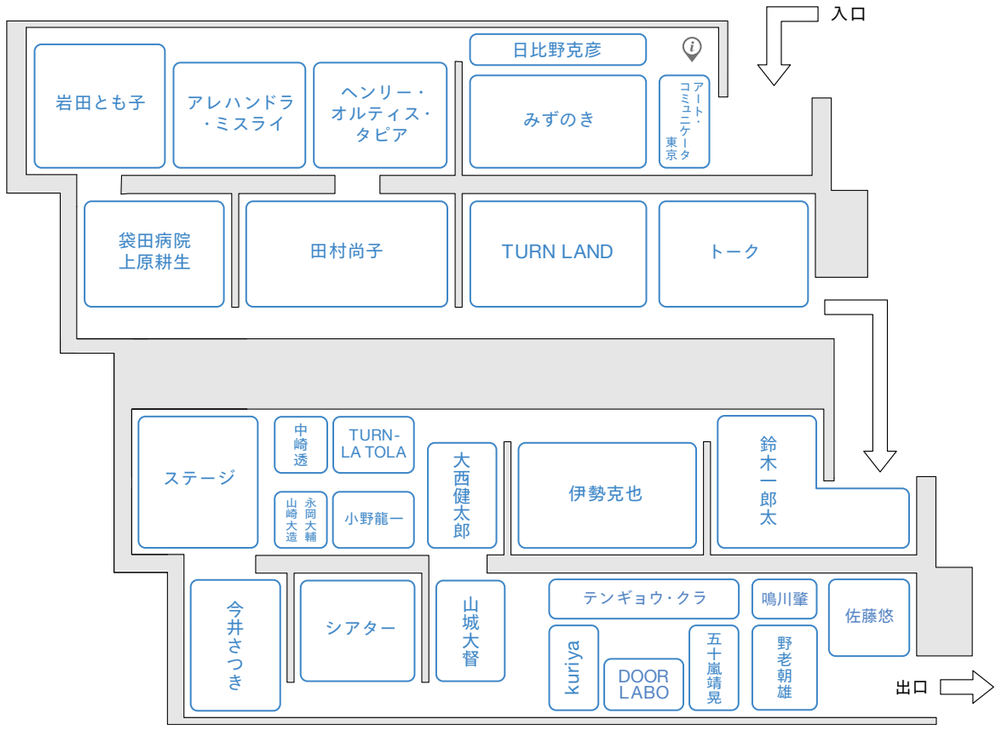
15:30-16:00
クロストーク
新澤克憲
テンギョウ・クラ
ライラ・カセム（デザイナー）
ハーモニーのメンバー
橋本一郎（手話通訳）

16:15-17:15
クロストーク
遠山昇司（映画監督）
田村尚子

※終日ワークショップ

ヘンリー・オルティス・タピア
アレハンドラ・ミスライ
岩田とも子
上原耕生
伊勢克也
中崎透（アーティスト）（17 日のみ）
永岡大輔・山崎大造（17 日のみ）
今井さつき（アーティスト）
山城大督（アーティスト）
佐藤悠（アーティスト）
野老朝雄
アート・コミュニケータ東京
DOOR LABO

TURNフェス4 会場マップ



TURNフェス4に託したこと

森 司（TURNプロジェクトディレクター）

「『TURN』とは、なんですか？」その説明に、今もって苦慮する。理由は多々あるが、一番の理由は、この言葉を聞いた人たちが、次に自身が取るべき具体的なアクションをイメージできないからだが、それ以前にTURNに託されたメッセージを掴みきれないからだ。
TURNという言葉を、未来を創るマジックワードとして使い始めた2014年の時点で、我々が標榜するような含意があったわけではない。意図的というより、文字通りゼロベースでのスタートだったからだ。どこから手をつけていいのか、わかりかねてもいた。

TURNは、言葉の作品ではない。監修者の日比野克彦は『100の指令』（2003年／朝日出版社）という言葉の作品は、「口の中をベロで触って、どんな形があるかを探ってみよう」とか「いつもと違う道で家に帰ろう」といった具体な指令が綴られたものだ。
そのような指令を内包するものではなく、空っぽのホルダーに近いものであった。ただ、そこに入れていきたい漠然としたイメージはあった。行動指針となるメッセージを紐付けして使っていないのは、このことによる。

TURNの提唱を始めた初期メンバーの間には、まだ具体的なイメージの創出はなく、「福祉」と「アール・ブリュット」の言葉の間に身を置く者として、「もっと大事なことを伝えたい、たくさんある行為の価値を認めていきたい」、とする感覚が優先し、暫定的ながらも、これから考え、行動する起点としてTURNという言葉を手にしたというところが正直なところだろう。2014年にTURNという言葉を使い始めたときには、これから出会おうとする世界観を獲得するための自分たちの意識や立ち位置を示す（だけの）言葉に過ぎず、アートもしくはアートプロジェクトを介して向き合っていくことだけがルールのような段階であった。それゆえにTURNと言えば「なんでもありなのか」と義憤に近い言葉が発せられたこともあった。それくらいに荒唐無稽であった。それでもTURNとしての意識的な経験を重ね、議論し考え続けていると、準備すべきことの発見があり、その行為が誘発する認識の芽生えのようなものをハッキリ感じ始め、同時にじわじわと伝播（誤解や誤読も含め）していく感覚を覚えるようになってきた。TURNにまつわる意識のキャッチボールは、TURNの認識フレームを拡張させ、また海外を含めた現場（現地）での実践が、やわらかく意味合いを拡大させながらTURNの可能性を成長させてきた。

2014年からの4つのアール・ブリュット美術館での活動（主催：日本財団）を経て、2015年より東京都が展開する「TURN」となって生み出された言葉をまとめたのがTURN NOTEである。意識や立ち位置の起点でしかなかったTURNが、徐々に輪郭をあらわにしてくる体感を、関係者による時々の言葉でアーカイブし留めてきた。言葉を集積したこのアンソロジー本のタイトルの変化が、そのことを明示する。2016年のTURN NOTEのタイトルは、「TURNを考えたときの言葉」だ。

「TURNの目指すところは、単なるアートプロジェクトでもないし、福祉の次世代型でもない。社会の基盤をよみかえるというか、つくりかえる力がTURNにはあるし、そこまで持っていきたいなと思うんです」
（2016年10月22日に実施したTURN in BRAZIL 帰国報告会での日比野克彦による発言）

翌2017年は「TURN にふれたときの言葉」、2018年は「TURNとつながったときの言葉」である。日比野は、2018年の第4回TURNミーティングの会場で、次のように発言した。

「『TURN』という言葉の出現によって、美術というものが世の中に機能しているんだねっていう理解が一般社会の中に広まっていく。そういう重要な言葉、そして動きになっていくのではないかと思っています。
今、アートや福祉の領域でも、いろいろなところでそういう方向に向かっていて、閉ざされたものをひらいていこうという動きがあるけれど、それらをつないでいく言葉としても、『TURN』という言葉が機能していくといいなと思っています」。

TURNという言葉があることで紡ぎ出されていく行動、言葉、思考がそこにはある。そして、それを可視化し一堂に示す場がTURNフェスに託された役割だ。日比野が施設に滞在した経験から始まったTURN的な交流は、その意味を問うTURN的な会議の開催を重ね、TURN的な活動を継続して展開するTURN LANDのあり方、TURN的な作品や活動を紹介するTURN的なフェスを、それらがどのようなものか実践と考察を繰り返して歩を重ねてきた。2018年のTURNフェス4では、これまでの経験を踏まえ、2020年の開催を視野により拡充した方法での開催を試みた。

2015年に開催した初めてのTURNフェスは、それまでにTURN交流プログラムの実施しかできていなかったため、交流先での経験を手掛かりに素直に素材や出会いそのものを持ち寄って実施した。素朴なもので、フェス感の創出にはほど遠かったと言える。2回目は施設とアーティストの交流の深まりを体感させる内容構成となり、初期の目的であった知り合いの作家の現場に施設の仲間（利用者さん）がこぞって、ときには施設単位で訪ねてくれるまでになった。その間に我々はブラジルでのTURNを経験し、その後の海外展開のきっかけを手にする契機となり、2017年の第1回BIENALSUR（ビエンナーレスール）に参加した。フェス4に参加した二人の海外からの招聘作家は、そのときに日比野たちが出会った作家たちだ。
2017年の3回目の実施に際しては、TURNの一環で交流する作家から、フェスへの参加プログラム案をヒアリングするエントリー方式を採用した。TURNとして自由に想起したプログラムでの参加を可能にし、新たに「アクセシビリティ」をテーマに加え会場の構成も行った。

そのような3年を経て、交流から始まり、フェスを先行させてきたTURNも、ようやく交流先での活動を「TURN LAND」と呼び定め、継続的な活動を展開するイメージが獲得できるまでとなった。TURNミーティングでの議論も豊かに積み重なった。通年の活動の成果を示し、TURNの目指す方向を示唆する場として、フェスをくみあげられるようにまでなった。

これらの経験を踏まえて2018年に開催したフェス4では、タイトルとして「日常非常日」を掲げ、初めてキュレーションを入れ、さらなる一歩を踏み出した。
フェス4では、次のような柱立てを行った。
1）改めて「はじめましてTURN」として、TURNの沿革を示す自己紹介。
2）TURN LANDの先駆的事例と活動事例の報告。
3）トーク・ステージ・シアター・ワークショップなどの複数の参加型プログラムの同時開催。
4）多様なスタイルでのツアーの実施。
5）アーティスト、パフォーマーたちとの出会いの場となるブースとミニトークの実施。

上記5つの柱を全て同一空間に納め、そこに溢れんばかりの人がいる、わくわくする猥雑感を醸し出すフェス会場として構成することを目指した。それゆえに監修者の日比野から「盛り盛りの構成」と笑いながらトークの場で評されたのも当然のことで、「ガッツポーズ」とともに自分はこの言葉を受け止めた。

5つの柱を入れ込む難しさは、美術館が本来、展示空間でありモノとしての鑑賞対象としての作品が主体であり、コンディションよく存在し続けるように室温や湿度などがコントロールされている。そのため、人が長時間その場にいるような環境ではなく、カタログなどの展示風景写真は人物不在のものが主だ。しかしフェス（催事）というからには、モノがあって、人がいる状態だ。人が佇み、滞在するための仕掛けとして、独立した企画として成立する「展示」「講演会」「上映会」を同時に組み、ここにタイムラインが生じるパフォーマンスやツアーを挿入し、人が行き交う広場のイメージを考案した。

それでもフェス会場は美術館である。来場者の多くは、「作品」を、そしてときには「障害者自身が手がけた作品」を鑑賞するモードで足を運ぶ。そこで「もの」から「こと」へと会場内の動線を、「展示」物から「行為」参加へなだらかに移行していく会場構成とした。同時に、展示における時間軸を、過去・現在・未来へとつながる流れで設定した。それゆえ、最初の部屋において約60年間の年表、みずのき美術館の作品とその母体施設での活動、日比野の施設滞在時の作品を紹介した。また、そのことで1）の「TURN そのものの紹介」が叶うというわけだ。

続く海外ゲストなどの仕事を紹介する部屋は、現在の活動が空間的にどのような広がりと可能性を持つものかを示唆するものであった。袋田病院とラ・ボルド精神科病院を舞台とする 10 年の単位での活動がもたらす果実の豊かさを示すものだ。その横で紹介された TURN LAND の活動の細やかさは、始まりは常に小さいことを知る者にとっては、確かな予兆を示すものだったはずだ。3 日間にわたり紡がれた言葉で、壁の白い紙は文字で埋め尽くされた。さまざまなテーマでの語りは、これからの活動のヒントと勇気を与えてくれたはずだ。

TURN は直接的には障害者アートを扱うものではない。しかし、彼ら彼女ら自身の活動を無視するものではない。むしろ、障害者アートという枠からの解放のあり方を探求していると言ってもいい。トークセッションで重要な軸を示してくれた鈴木一郎太による浜松での療育の事例報告と、伊勢克也による障害者と健常者がともに制作できるアトリエの提案は示唆に富むものであった。展示室にモデルが立ち、アトリエ化した風景は、TURN が求める風景の一つだ。ライブエリアとして展示空間に用意された、何もないボイド空間は、広場としてアーティストと参加者で賑わっていた。広すぎるように思えていたボイド空間も、車椅子での参加者が数人加わるだけで狭い場所となる。今井さつきの《人間ノリ巻き》が、からだを横たえ身を任せれば参加できると歓迎されたことと併せて、これまでわかっていなかったことや、気づいていなかったことの多さも身にしみた。
シアターの先に進むと現れる、さまざまなアーティストによるブースは、それぞれの活動を紹介しながらアーティストと出会い、よく知ってもらうことを目的にするものであった。持ち込んでもらったものや資料は、対話のためのきっかけをもたらすもので、鑑賞する対象ではなく、あくまでも目の前の作家自身を想定してのものだ。TURN の活動で得た気づきをその断片でも良いから持ち込んで 3 日間その場所で過ごし語ることを作家へ求めた結果である。山城大督の《NENNE｜ねんね》は、その象徴的な振る舞いだと言ってよい。過ごすという時間を扱ったものだが、託児所と間違えられたそのエリアは、TURNフェスに乗っかる形を取ることでギリギリ成り立つ作品である。フェス 3 の現代芸術活動チーム【目】の参加の仕方に近接するものの、発展系ともみなすことができる。しっかりと作品として定着したものではなく、流動する場そのものを作品化する《NENNE｜ねんね》は、「作家自身の TURNフェス参加」の経験をもたらしたものであることは間違いない。

多様な時間が渦巻いた TURNフェスの会場では、常にどこかで何かが行われていた。そして、各所でのミニトークの音声の記録を残し、「今、何をしているのですか？」と聞かずに済むように、手書きの文字で随時プログラムを掲出した。

TURN フェスの会場は、これまでの「あたりまえ」を一度解体し、新しい「あたりまえ」に置き換えていく作業の連続で、展示空間としてはどんどんドレスダウンしていく方向でのつくり込みを行い、そこにさまざまな時間軸のプログラムによってランダムな人の動き（非導線的）を加味する。フェス 4 の最大の特徴は、時間尺の異なる存在を多様に混在させた 1 点に尽きる。そのように構成され仕上がった空間（開場して人が入った状態のこと）を、参加者として体験する意識で観てまわる。当日になって初めて最終チェックができると言うわけだ。映画を観たり、トークを聞いたり、パフォーマンスを観たりと、ブラウン運動のように会場を不規則に行ったり来たりする。TURN フェスのような構成の場が通年で活動し、日々現場でプログラムが更新されていくような状況に、3 年でかなり先までいけるだろうにと思わずにはいられない。その多層で濃密な時空がもたらす可能性を、それを維持管理するタフさを棚上げしてではあるが。つまりは究極の TURN LAND の設立運営がゴールになり、スタートとなる。そのような実感を抱く現場となった。

そしてもう一つ実感したことがある。TURN で触ろうとする世界は、多くの先人たちがその専門性において格闘し、徐々に徐々にひらいてきた今とつながり、その先を求めての活動である。過去と現在、そして未来がつながっている感覚は、つないでいく活動の勇気となる。フェス 4 の経験を活かし、仲間の力を借りて先に進もう。

「TURN」という言葉が示すものが、徐々に共有されるようになり、その世界観がもたらす世界実現の可能性を信じられるようになってきた。まずは 2019 年夏に開催予定のTURNフェス 5 の準備に力をあわせて取りかかろう。2020 年の TURN フェス 6 は、会場も増えて、場も広くなる想定だ。

森　司

アーツカウンシル東京事業推進室事業調整課長。1960 年愛知県生まれ。東京アートポイント計画の立ち上げから関わり、ディレクターとして NPO などと協働したアートプロジェクトの企画運営、人材育成プログラムを手がける。2011 年 7 月より「Art Support Tohoku-Tokyo（東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業）」のディレクター。2015 年よりプロジェクトディレクターとして TURN を牽引する。

TURN MEETING

TURNの可能性を共有し、語り、考え合う

2018年は、第4回から第6回までのTURNミーティングを開催し、2019年2月には第7回を開催した。毎回異なるテーマを設け、ゲストをお呼びし、TURNの可能性を共有して考える場になっている。また新たな取り組みとして、プログラムの合間にアーティストがパフォーマンスを披露し、会場を盛り上げている。各回それぞれにさまざまなトークが繰り広げられたが、特に印象的だった内容をピックアップして紹介する。

第4回 TURNミーティング

日時：2018年1月28日（日）10:00～16:00
場所：東京国立博物館　平成館大講堂
ゲスト：山城大督（アーティスト）／新澤克憲（ハーモニー施設長）／鈴木一郎太（大と小とレフ取締役））／五十嵐靖晃（アーティスト）／ EAT & ART TARO（アーティスト）／岩田とも子（アーティスト）／永岡大輔（アーティスト）／野老朝雄（美術家）／杉山摩美・ゆーないと（ほぼ日刊イトイ新聞）

第1部
この一年間から考える、これからのTURN
登壇：日比野克彦（TURN監修）

第2部
地域への広がり
登壇：山城大督、新澤克憲、鈴木一郎太、日比野克彦
進行：奥山理子（TURNコーディネーター）

第3部
手業［てわざ］からはじまる交流
登壇：五十嵐靖晃、EAT & ART TARO、岩田とも子、永岡大輔、野老朝雄、日比野克彦
進行：森 司（TURNプロジェクトディレクター）

第4部
トーク「ほぼ日」とTURN
登壇：杉山摩美・ゆーないと、日比野克彦

—

D
パフォーマンスを披露するアーティストの大西健太郎

2017年度の年次報告会となった第4回TURNミーティング。第1部では、監修者の日比野克彦より、「モノではなくコトをつくる福祉施設でのアート活動を『TURN』という言葉に託せないか」「美術館をはじめさまざまな施設が障壁なく行き交うことができるようになるとよい」といった大きなビジョンが語られた。第2部ではTURNのプログラムに参加する山城大督や新澤克憲、そして浜松にある認定NPO法人クリエイティブサポートレッツの施設の立ち上げに携わった鈴木一郎太が登壇し、アートと福祉の活動が社会化することについて議論を深めた。続く第3部では、美術家の野老朝雄を新たに迎え、4人のTURN参加アーティストが登壇。伝統工芸を用いた海外でのTURNや、「手業（てわざ）」から広がるコミュニケーションについて語り合った。最後の第4部では、「ほぼ日」の事業や取り組みについてじっくりと話を伺い、これからTURNの活動を広げる上でのヒントを得た。プログラムの間には、アーティストの大西健太郎による、自身の特性である吃音をテーマにしたパフォーマンス《オオオノマトペ》や、DJ Yutaによる生ライブも実施。多彩なゲストとパフォーマンスで、盛りだくさんの1日となった。

—

PICK-UP TALK

「関わった人たちが、共感して広めていく」

奥山　日比野さんは東京でTURNを始める前に、私が勤めているみずのきも含めて4つ福祉施設にショートステイされましたが、その後クリエイティブサポートレッツに見学に行かれましたよね。きっと4つの施設と趣がずいぶん異なったと思いますが、いかがでしょうか。

日比野　一番衝撃が大きかったのは、やはり最初に訪ねたみずのきでした。世界のいろいろなところに行ったことがあるけれど、みずのきの施設はどういう場所か想像できなかった。どんな世界に行くよりも遠い、みたいな感覚です。そこに行って私はどういう振る舞ったらいいのか、全く想像できなかった。その後レッツにも行くんですけど。そのときには想像できない、という感覚はそれほどなかった。レッツの理事長の久保田翠さんは建築をやって、藝大のデザイン科にも来ていた。そんな経歴を持ちながら、ご自身の息子が重度の障害を持っており、やりたいことをやり切らせる施設をつくっていることに対して、逆にワクワクドキドキ、早く見に行きたいと思っていました。

奥山　みずのきには、異世界に飛び込んで行く感覚があったんですね。ブラジルに行くよりも全然遠いという。山城さんにとっての福祉施設の出会いは、どんな経験としてもたらされましたか。

山城　これまで福祉施設との付き合いは全くなかったんですが、2009年に鈴木一郎太君とレッツに出会って、そのときの衝撃がすごく大きかった。通常、概念化できないものは整理して社会に結びつけようとしますが、レッツは意図的に社会化させないように、みんな必死に守っているように感じました。『たけし文化センター』に「ここってどんな場所なんですか」って訊ねても、誰も答えてくれない。みんな好きなようにしたらいいんですよ、って。なんでこの場所が浜松に生まれているんだろうっていう心のざわつきはすごくありました。

奥山　先ほど、レッツは関係性やあり方を社会化しないって仰ったと思いますが、一方で私は、TURNを社会化します、と言っています。福祉施設と社会の関わりを見る中で、それを社会化していると見るか、いないと見るか、という違いがすごく面白いと思いました。施設との交流が社会化されるものか、そのまま置いておくものかという捉え方って、立場によってかなり違うと思いますし、TURNの交流プログラムを考察して行く上で、面白い視点になりそうな感じがします。交流が何をもって可能になっているか、そこで起こる葛藤から、あるべき姿を話し合っていけたらいいなって思います。ハーモニーでの交流についても少し振り返りたいと思いますが、いかがでしょうか。

新澤　やはり難しい部分もあります。アーティストとの時間を確保しても、「アートになんの意味があるのか、なんの役に立つのか」みたいなことを利用者の方から要求されるわけです。他の施設も工夫されたかとは思いますが、僕らが落とし込んだのは、例えばTURNに協力したことへの対価を工賃としてみなしていくということです。そうやって、なるべく関係が切れないように、出会いの量を減らさないように、いろいろな人と接せられるように工夫はしています。それから、スタッフ間でどのように状況を共有していくか、というのも課題ですね。例えば、アーティストにあわせて時間を設定しても、必ずメンバーがいることは難しい。そのような調整をスタッフの中で行っているときに、スタッフから疑問の声が出るときもあります。

鈴木　最近、福祉施設に行くことは少なくなっているのですが、新澤さんの話で、施設を作ったときの出来事が、いろいろと思い出されました。
それから先ほど話題に出た、日比野さんの初めて施設に行ったとき、どうしたらいいんだろうっていう戸惑いとか、山城さんがレッツで「好きにしてください」と言われて、なんだろう、みたいな戸惑いを他の人も感じています。

D
［左から］奥山、鈴木一郎太、新澤克憲、山城大督、日比野

D
ゲストの野老朝雄

「ほぼ日」の事業や取り組みを発表するゆーないと（左）と杉山摩美

例えば、レッツが期間限定でオープンしていた『たけし文化センター』がある商店街の商店会長さんは、だいぶ頭が柔らかい人なんですが、やはり最初来たときはどうしていいのかわからなかった、と仰っていました。何をしろとも言われないし、何か用意されているわけでもないし、好きにしろって言われてもなぁと、なんとなく座っている。しかし、30分くらい経った頃、「好きにするってこういうことか」ってなんとなく自分の中で腑に落ちたらしくて。その後何年か経ったときに、その商店会長さんが自分の言葉として、多様性とか許容って話を商店街の中でするようになったんです。それは障害だけではなく、単純に全てを受け入れる、というような感じです。各商店会長さんたちを中心に、今後のまちのことについて話し合う集まりが開かれたとき、メンバー表を見て「高齢化していっているというのに福祉施設の人もいないし、女性もいない。こんな偏った中でまちの未来のことを協議しても意味がない」ということをお話されたらしいんです。レッツにいらして数年後だったのですが、あのときに、商店会長さんだからって変に気を使って声をかけたりせずによかったな、と思いました。放っておくと私たちは肩書きでやり取りしがちですが、肩書きとか社会的な立場や属性でコミュニケーションをしないことにおいて、アーティストがそういった施設に行くことで起爆剤のように作用する印象を受けます。

日比野　鈴木さんの商店会長さんのお話は、確かに我々がやる方向の一つにあると思います。先ほど、レッツは概念を概念のままで社会化しようといていないという話と、奥山さんからは社会化する方向で我々は模索していきましょうという話があったと思いますが、鈴木さんの言う社会化というのは、いわゆる仕掛け人がする方ではなく、それを受け止めた人たちが発信したい気持ちになってまわりに声をかける形になっている。社会化って制度や言葉ではなく、関わった人たちが共有して共感し、どんどん広めていくってことが結果として社会化していくことなんだと思いました。商店会長さんは自分なりに考え、障害者施設から学んだことをどんどん広げていく。TURN もそういうことだと思う。福祉の枠から学んだことを、もっとアーティストがさまざまな価値のところに広げていく。鈴木さんの言う、自分ごとにした上で語っていく人々を視野に入れて展開していくのが、これから重要だと思います。

第 5 回 TURN ミーティング

日時：2018 年 5 月 13 日（日）　14:00 ～ 17:00
場所：東京藝術大学美術学部中央棟 1F 第 1 講義室
ゲスト：近藤良平（振付家・ダンサー・コンドルズ主宰）

第 1 部
近藤さんと日比野さんがざっくばらんにTURNを話す
登壇：近藤良平、日比野克彦（TURN監修）

ライブパフォーマンス
出演：「角銅真実とオーケストラ達だ」（葛城梢／寺田燿児／日比彩湖／横手ありさ／角銅真実）

第 2 部
2018 活動計画
登壇：日比野克彦、森 司（TURN プロジェクトディレクター）、奥山理子（TURN コーディネーター）

※13:00～ 映像『TURN One to Three』（監督：田村 大、制作：らくだスタジオ）を上映。

—

第 5 回 TURN ミーティングでは、第 1 部にコンドルズ、ハンドルズ、東京キャラバンなどで多彩に活動する、振付家・ダンサーの近藤良平が登壇。近藤が障害のある人たちと結成したダンスチーム・ハンドルズの映像を見ながら、日比野克彦と TURN に関する話を展開した。途中から TURN 参加アーティストの大西健太郎も混ざり、近藤と大西、それぞれの現場でのアプローチの仕方について話を広げた。第 2 部では、日比野と TURN プロジェクトディレクターの森司、TURN コーディネーターの奥山理子が、TURN フェス 4 のテーマとなった「日常非常日」に込めたねらい、今後の TURN の活動について議論を深めた。さらに「角銅真実とオーケストラ達だ」によるライブパフォーマンスでは、角銅がこの日のために書き下ろした新曲を披露。ベルやペットボトルなど日常生活に身近なものを用いたパフォーマンス含め、会場が湧いた。
また開始前には、TURN の日々の活動を撮影し、映像作品を制作しているらくだスタジオの田村大による『TURN One to Three』の上映会も開催された。

「角度真実とオーケルトラ達だ」によるライブパフォーマンスの様子。来場者に風船を配り、振動で音を体感できるようにした

—

PICK-UP TALK

「テンションと号泣」

日比野　近藤さんは、コンドルズ、ハンドルズ、そして近藤さん個人の活動の中で、伝統的なものの面白さを再発見するとか、みんなで一緒になって踊るという巻き込み型のようなことをされていて、一人ひとりの個性を際立たせて発表する手法をたくさん取られてますよね。

近藤　僕、一人で作業するのが苦手なので、誰かにも何かしらやってもらうことが多くて、結果的に巻き添え型になるのが多いかもしれないですね。
ハンドルズでは、障害者の方たちと一緒に舞台を作っています。僕もあまり経験がなかったので、やれるとこまでやってみましょうというノリで始めたのが、8 年前ぐらいです。本人たち、見る人たち、サポートしている人たち、みんな本当にモチベーションが高くて。最初はどうなるの？ みたいな感じだったのに、一度やったら、次もやりたいってなって。「そうか、やるか」っていうことになって続けてきました。

日比野　参加は、オーディションみたいなことをするんですか？

近藤　いや、皆にいきなり何かをやってもらって、それをパフォーマンスにしています。すぐやらせちゃうタイプなので、何かやってもらってそこで見つけた特徴を引っ張り出します。

日比野　その人の瞬間の動きとか表情とか、そういうところを？

近藤　はい。あと、みんなしぶといです。見て見て、という気持ちはすごいありますね。ちょっと、羨ましいぐらいですね。それから、中学生のチアリーダーの子たちと車椅子のメンバーで空間を作ったことがあるのですが、女子に囲まれて踊ると、みんな自分たちも同じように踊っていると勘違いする面白さがあるんですよね。こういう時間を体験してしまうと、またやりたいって思っちゃう。本番が終わると、ものすごいテンション。テンションと号泣、みたいな。そういうのが面白いですよね。

「イメージのスイッチを入れる」

近藤　「ゾウさんの真似をして」と言うと、多くの人は、手を鼻に見立てます。ハンドルズには、身体に障害があってそれができない人たちがいっぱいいる。でも本人たちは、何かしらの表現で、ゾウの真似が絶対できるという自信があるんですよ。ゾウ自体を知ってるので。足を使ったり、何かしら自分なりの表現ができる。

日比野（左）とゲストの近藤良平

日比野　イメージあるからね。

近藤　イメージがあればできるんです。鬼とかでいうと、急に車いすごと暴れだすんですよ。「今、鬼、表現してみましたよ」って言って。

日比野　スイッチの入れ方ですね。

近藤　そう「これが私の鬼です」って。だから、我々の方がステレオタイプに身体を動かしている。そういうのを目の当たりにすると、単純に自由だなっていうことよりは、気持ちがいいなみたいな感じがします。

「アプローチの違い」

日比野　さっき《TURN One to Three》に出ていた、板橋区立小茂根福祉園と大西さんの活動を見て、いかがでしたか？

近藤　単純にまず体のラインが素敵だな、好きだなと思って。好きっていうの変だけど、ハンドルズをやっているときも、車いすに乗ってる人が車いすでいる姿と、ちょっと横になったときに、全然存在感が違うんですよ。その変化に興味があって。

日比野　近藤さんは、きっとハンドルズのオーディションのときに、「あ、この人たちと何ができるだろうか、どうやってお互いに身体使っていこうか」って思うのではないかと思って。近藤さんは、一瞬にしてその人の個性を見つけて引き出していくっていう技を持っていると思っているんです。

近藤　そうですね、自分で言うのも何ですけど、多分、それは得意だと思います。自分の得意なことを見つけるのは難しいんですけど、人のことなら…。

日比野　こうやったら、きっと喜んで気持ち良くなるだろうなっていうところを、見つけるのは得意。

近藤　基本的に、みんな恥ずかしがり屋だと思ってるんですよ。なので、それを「いいんだよ」って言うと、恥ずかしさが除ける瞬間があって。すると急にみんな冗舌になったりもするんですよね。とにかく１回広げないと、そのままで終わってしまう可能性が高い。要するに、引っ込み思案だったら、それを引っ込み思案のままで突っついても意外と何も出なくて、どんなアプローチをしてでも、なんか開けて広げて、調子よさげにさせる。調子よさげな部分をまんまと出してきやがったと思うと、僕もう、そのときには、その人にはまっちゃっているので。

第６回 TURN ミーティング

日時：2018 年 10 月 13 日（日）　13:15 ～ 17:00
場所：東京藝術大学美術学部中央棟 2F 第３講義室
ゲスト：藤浩志（アーティスト）、上原耕生（アーティスト）、渡邉慶子（作業療法士）、伊勢克也（アーティスト）、山城大督（アーティスト）、稲庭彩和子（東京都美術館学芸員 アート・コミュニケーション係長）、福井千鶴（東京文化会館教育普及担当係長）

【上映会】
森山開次×クラフト工房 La Mano（撮影・編集：冨田了平）

【第１部】
ダイバーシティ社会を見据えた都立文化施設の試み
登壇：稲庭彩和子、福井千鶴
司会：森 司（TURN プロジェクトディレクター）

【第２部】
TURN フェス４を振り返る
登壇：上原耕生、渡邉慶子、伊勢克也、山城大督
司会：森 司

藤浩志による「がまくんとカエルくんの紙芝居」

【第３部】
「場のつくりかた / ひらきかた」
登壇：藤浩志
聞き手：森 司

【第４部】
TURNの展望 ～交流プログラム、TURN LAND が目指すこと～
登壇：日比野克彦（TURN監修）、森 司

—

第１部では東京都美術館学芸員の稲庭彩和子、東京文化会館教育普及担当係長の福井千鶴を迎え、都立文化施設でのダイバーシティ社会を見据えたコミュニティづくりや人材育成について話を伺った。「多文化共生社会の中で、文化や社会を認め合うプラットフォームとしてミュージアムを機能させていきたい」といったビジョンや、「共生社会で生きるために、それぞれの個性が集まって、何か一緒につくったり楽しい時間をともにして豊かな社会をつくり上げたい」という力強い発言もあった。続く第２部では、TURN フェス４に参加したアーティストや施設職員が登壇。写真や映像を見ながら、フェスでの出来事やプログラムの狙いなどを振り返った。第２部と第３部の間には、美術家・アーティストの藤浩志によるスペシャル企画「がまくんとかえるくんの紙芝居」が行われた。絵本「おてがみ」と「おはなし」を紙芝居にし、声を張って読み上げる圧巻のパフォーマンスに、会場中が驚きと笑顔に包まれた。第３部では引き続き藤が登壇し、「がまくんとかえるくん」の「おてがみ」や「おはなし」の物語から読み取れる、アートプロジェクトや作品づくりへのエッセンスについて話を広げた。最後の第４部では、TURN LAND の広がりを中心に、今後の TURN の展望についてトークを行った。

大迫力で紙芝居を読み上げる藤浩志（写真：大野隆介）

—

PICK-UP TALK

「時間の質を変容させるテクニック」

森　紙芝居、ありがとうございました。色々な現場で、マネジメントとは何かというお話をするときに、紙芝居をされてますよね。

藤　はい。学生にも「つくること」について伝えるときにこの話をするのですが、紙芝居の「おてがみ」※から見えるのは、「態度の問題」と、自分たちがつくる上での「フィクションとノンフィクションの問題」だと僕自身は捉えています。特に美術大学の学生は「何かをつくらなきゃいけない」という束縛に加えて、「過去の作品を参考にしながら上質なものをつくらなきゃいけない」という切迫感が与えられ、つくれなくなってしまう現状があります。
この「おてがみ」を読み解くと、そういう考えを１回外して、誰とつくるのか、どうつくるかといった態度そのものや、色々な場所や現場でつくり、次の連鎖を促すことが、実はすごく重要であると感じます。
それから「手紙が届かない」ということに対しての違和感を言葉にすることが表現のきっかけになっているということも重要です。自分の心の中にある違和感みたいなものを、なんでもいいので言葉にする、形にする。それが表現のすごく重要なきっかけなんじゃないかと思います。そこでかえるくんが動いて、がまくんのために手紙を書く。がまくんとかえるくんの関係において、TURN の話の中でも出てきますが、誰かとの関係において表現の価値が見出されるのかを考えたときに、誰でもない世間一般ではなく、隣にいる誰かに対して自分の表現をちゃんと届けることができるかどうか。そう考えることで、自分がつくるべきことが、見えてくるんじゃ

ないかと思います。
「おてがみ」は、こうしたことを教えてくれてるような気がしたんです。かえるくんががまくんに書いた手紙を、実は僕は決していいものだと思ってなくて。「親愛なるがまがえるくん、僕の親友であることを嬉しく思っています。君の親友かえる」という内容、単純ですよね。でもがまくんにとっては価値がある。さらに、すごく重要なことがあります。結局この二人がつくったものは手紙ではなく期待の時間だった、ということです。かえるくんが手紙を書くことによって、手紙が来るのを待つ時間が、絶望の時間から希望の時間に変異した。それはつくるという行為が変容させたわけです。二人が玄関の前に腰を下ろして4日間待つわけですが、「とても幸せな気持ちでそこに座っていました」というワンフレーズがすごく重要です。僕らはものをつくるときに、できてしまったものに目が行きがちです。しかし、実は行為やつくっている「時間の質」そのものがいかに希望に満ちて、楽しいものになっているかが、アートで一番重要なんじゃないかと思ったんです。
そして、ここで大切な役割を果たすものがカタツムリだったんですよね。まさかのカタツムリ。かえるくんが持っていけばいいのに。でも手紙をカタツムリに渡すというあり得ないことが、この4日間という期待の時間を作ったんです。かえるくんが持って行ったら一瞬で終わっちゃいます。アートっていうのは、ある種の常識を超えるテクニックだと思います。「カタツムリ的なものは何だろう」と、僕は物事をつくる上で考えます。カタツムリ的な要素を仕掛けていくことが、普通のプロジェクトと違うアートプロジェクトなのかもしれません。理解していただけましたでしょうか？（会場から大きな拍手）ありがとうございます。

森　一気に喋りましたね（笑）。講座でやると、1時間ぐらい話している内容ですね。

藤浩志（左）と 森（写真：大野隆介）

「何をつくっても許される場」

藤　仙台メディアテークで「ワケあり雑がみ部」っていうのをつくったんですよ。1階に雑がみ回収ボックスをつくったんです。紙袋、紙箱、包装紙、この三つに限定して集めたんですよ。そしたらみんな取ってあるんですよね、特に女性の方が多いんですね。とにかくそういう材料をいっぱい集めて、部員を募集して、メディアテークのワンフロアを部室にして、誰でも参加できる形にしました。部員が100人ぐらい、どんどん集まってきて、みんな自由に勝手につくってます。

森　何をつくってるんですか？

藤　なんでも。つくりたいものをつくるっていうのをやってましたね。七夕飾りをつくったりとか。何かいろいろな人たちが集まってきていて、何をつくっても許されている場になっています。そして、絶対に「指導してやろう」と思っている人を入れないんです。指導者がいないってこともすごく重要です。なんかみんなが勝手につくっている、一生懸命つくってる人がいる、さらに素材がいっぱいあって、それそのものがモチベーションになっていくみたいな、そういう場をつくったりしてました。

森　その設計って、フレーム感のあるものからすると、自由というか、放置されているというか…。

藤　実を言うと部長は僕なんですけど、僕はいないんですよ。部長不在というのも意外と重要。だけど、マネージャーはいるんですよ。マネージャーがちゃんとスタッフとして集まって袋を分別したり、つくっていいですよっていうこと、ここに道具ありますよっていうのを、ちゃんとつないでくれる空気をつくったりする人がいますね。

森　その空気つくってる人も、市民ボランティアなんですか。

藤　これは実はスキルがある程度ある人をお願いしてますね。でも二人だけ。まぁ、そういうこともやっておりまして、何かもっと部室できるといいな、みたいな。いろいろな場所にそういう部活動ができるような、面白い部活動というのがいっぱいできればいいなと思いますね。

※「おてがみ」…アーノルド・ノーベル作の絵本『がまくんとかえるくんシリーズ』の一編。おてがみを一度ももらったことがないというがまくんのために、かえるくんがおてがみを書く。そしてかえるくんは、わざわざカタツムリに配達をお願いする、というあらすじ。

第7回 TURNミーティング

日時：2019年2月2日（土）　14:30〜17:00
場所：東京都美術館 講堂
ゲスト：ロバート キャンベル（日本文学研究者、国文学研究資料館長）／牧原依里（聾の鳥プロダクション代表、映画作家）
モデレーター：渡辺祐（エディター・ライター、J-WAVE『Radio DONUTS』ナビゲーター）
演奏：島田明日香（クラリネット奏者）

合間に奏でられた島田明日香のクラリネット演奏（写真：鈴木竜一朗）

—

第7回TURNミーティングは「多様性のある社会を考える」と題し、異なる分野で活躍するゲストを招いたクロストークを行った。トークでは、牧原依里から投げかけられた、自身が聾（ろう）者として生活する中で感じてきた「聾文化」に対して、聴者である他の登壇者は「聴文化」をどのように感じているか、という問いかけから始まった。聴こえることも多様性のうちの一つであるということに気づかされたというロバート キャンベル。音のない静かな世界を想像することはできるけれど、きっとそれは「聾文化」ではないのだろうと考え始める日比野克彦。そしてトークの間には、島田明日香がクラリネットの演奏を披露し、登壇者にも来場者にも、一層「音」と「表現」について問いを深めることにつながった。
それぞれに「多様性」や「自分の文化」について改めて向き合う中で、キャンベルからは「日本らしい多様性というものもきっとある」という新たな視点ももたらされた。そして日比野は、「多様性はこういうものだと決めるのではなく、私たちが想像すらしていないような世界がまだ山ほどある。自分とは背景や価値観の違う人と出会うことによって、『ない』と思っていた世界が『ある』ことを知る。そのきっかけがあれば、人は他の世界を想像できるようになる。みんなが同じでないからこそ、ともに生きていくことにわくわくできるようになることが、TURNの役割の一つなのかもしれない」と締めくくった。

A

（左から）牧原依里、ロバート キャンベル、日比野、渡辺祐

TURNと私

奥山理子（TURNコーディネーター）

このたび新たに発行することとなったTURNジャーナルでは、TURNをとおして出会い関わったアーティストと福祉施設の関係性の変遷が特集され、またTURNを構成する各プログラムで取り組まれている活動に迫ることができる。
東京でTURNが始まった当初は、眼前に漠然と広がる生きづらさやもどかしさを、社会的な問いとして意識化することから始めるのがやっとであったが（当時はそれこそが重要だった）、こうしてプロジェクトを構造化し、振り返ることのできる活動の実績を積み、それを書籍としてまとめるまでに至った4年目のTURNの変化を体感している。
先日、プロジェクトディレクターの森との会話の中で、「事業設計上、記述されこそしていないが、それでいて奥山が強いこだわりを持って方向付けを促してきた、その勘にも近い核心の部分を一度言語化してみてほしい」と投げかけられた。そこで、本ジャーナルへの寄稿として、「TURN」の命名に込めたことと、先日じっくりと知る機会を得たSDGsを引用するかたちで、TURNの過去と未来を想像しながら、言葉に綴る努力をしてみたいと思う。

TURN命名秘話

TURNには、前身にあたる展覧会があったことはこれまでも度々紹介してきた。しかし、プロジェクト名がなぜ「TURN」になったのか、その理由を知る人はあまり多くはないだろう。
2015年に東京都の事業となった際にこれまでの活動から切りわけを経ているものの、改めてその経緯を述べておきたいと思ったのは、現在のTURNが、「TURN交流プログラム」、「TURN LAND」、「TURNフェス」、「TURNミーティング」によって構成され、それぞれの活動目的の明確性と可能性が増した今、TURNという言葉を希求したかつての状況に触れることが、プロジェクトに携わる人たちの、次の一歩を踏み出そうとする背中を押す手として、添えることができるように感じられたためである。
2013年、私がキュレーターを務める京都のみずのき美術館をはじめ、地方で障害者支援事業を行う4つの法人が開設した美術館による、合同の展覧会が計画されていた。これら美術館に共通する当時の命題は「アール・ブリュット」。しかし、私たちが日頃接していた福祉現場には、すでにアール・ブリュットという概念だけでは表し尽くせない表現の数々があり、またそれらの表現が生まれうる興味深い関係性が存在していた。またそのことを気にとどめてしまう背景には、美術館を担うキュレーターのほとんどが支援員として福祉現場に関わってきたという、従来のキュレーターと異なる特異な経験を持つことが深く関係していた。
そして合同企画展に監修者として関わった日比野克彦とアドバイザーとして伴走した森司とともに、アートとは何か、福祉とは何か、さらには昨今熱を帯びる「アート×福祉」とは何かについてひたすらに議論を重ねた末、私たちが目を向けようとしているその方向、つまり、アール・ブリュットすら抱括し得る、より広い概念を指し示すための、新たな言葉をつくり出す必要性に駆られた。そして、そこからさらに難産とも言うべき熟考と議論を経てようやく、「TURN」「陸から海へ」「ひとがはじめからもっている力」という3つの言葉を引き出したのだった。
まず、「陸から海へ」について。これは日比野による提案だった。人間は臆病な生き物で、知らないところへ足を踏み出すには相当な勇気を伴う。日比野はそのイメージを、10億年前に海の中から陸へあがろうと波打ち際までやって来た生き物たちに例えた。波打ち際で恐怖心を伴っていたであろう攻防を繰り返しながら、少しずつ陸へあがり進化を辿ってきたはるか昔の祖先たち。今ではすっかり陸がふるさとになってしまった私たちは、再び、波打ち際（＝知らない場所）に行ってみるという挑戦を、人生の経験として選択していこうという意図が込められた。
しかし懐古的なことを思考したいわけではなかったので、次にこのイメージを補完する別の言葉を探した。

そして目にとどめたのが、英和辞書に記載されていた「turn」の文字であった。「turn」にはすでによく知られている「回転する、変化する、戻る」、「回転、転回、曲がり角」といった用法があるが、その中に「（生まれつき持っている）性向、気質、雰囲気、能力」を意味する、との記載があったのだ※1。
私たちは「これだ！」と思った。
こうして、3つの言葉がそれぞれ互いに補完し合うようにして立体的に組み合わさった展覧会タイトル「TURN／陸から海へ」※2が誕生した。自分とは異なる背景や習慣を持つ人との出会いを、波打ち際で新しい世界へ踏み出そうとするイメージに重ね、従来の進化とは異なる新たなベクトルでその出会いを築いていこうとするプロセスは、一人ひとりが本来持っている能力や魅力に出会う旅路である。これを私たちは「TURN」と呼ぼう、そして「turn」の語意のアップデートを図ろう、と考えたのだ。さらに私たちは、これを単にタイトルとしてのみ使用するのではなく、さまざまな分野やコミュニティを横断する際の新たな共通コードとして位置づけ、価値観として機能させたいと考えた。

追い風を受け新たなフェーズへ

このようにして誕生した「TURN／陸から海へ」展は、2015年に東京2020オリンピック・パラリンピックの文化プログラムを先導する東京都のリーディングプロジェクトの一つとして展覧会からアートプロジェクトへと形式を変え、名前も「TURN」となって新たなスタートを切った。「陸から海へ」と「ひとがはじめからもっている力」が削除されたのではない。TURNに2つの意味が内包されているという意図に基づくものであると考えている。
そして私は、東京都の事業となった新生・TURNに、ある構想を持って挑んだ。それは、全国のいわゆる典型的な福祉施設にこそ、TURNの担い手となってもらう、ということだ。
日本には現在、約2万団体の社会福祉法人が登録されているという。そして福祉施設でいうと、児童、障害、高齢などを合わせるとその数は7万箇所にも及ぶという。全国のコンビニエンスストアの数が約6万店というから、それよりも多いことを知ると興味深い。
つまり、どのまちにも必ず福祉施設があるのだ。
さらに、それぞれの福祉施設のウェブサイトや紹介文を見ていくと、どの施設でも「地域とともに」「地域の社会的資源となる」などといった文言が並んでいる。特に、2016年の社会福祉法の改正によって積極的に地域貢献事業にあたることが定められたことで、地域貢献は、社会福祉事業従事者にとっての最重要課題としてその改革が迫られている。
しかし一般の人たちの認識はどうだろうか。
これまで一度も福祉施設へ行ったことがない、福祉施設にどうアクセスしたらいいかわからない、そもそも行きたいと思ったことがない、当事者／関係者になって初めて知ったなど、福祉施設は、日常生活とは切り離されたずいぶんと遠い世界にあるものとされている。この理想と現実の間に横たわっている非常に大きな隔たりこそ、私は「波打ち際」として捉えてきた。
この波打ち際を介した互いの世界の行き来を、個人と個人との間においても、領域と領域との間においても促していきたい。それを、物事を創造的に問うていくアートの原理によって取り組んでいくことで、新たな地平を切りひらいていきたいと考えてきた。
福祉施設や社会的マイノリティの当事者を支えるコミュニティでは、繊細で緊張感の伴う状況に直面することが常である。支援をするうえでその人のことをより深く知る手立てを講じないわけにはいかないが、そうした対象者と向き合う日々は、ともすると行き詰まってしまいがちだ。そのために、日ごろ培われてきた専門的な知識や技術に加え、アーティストという存在が可能とする創造的な眼差しを積極的に取り入れていくことを勧めたい。アーティストと出会うことで、私たちは思ってもみなかった部分を刺激され、視野が広がっていき、それが個人のあるいは組織のキャパシティビルディングにつながっていくと信じている。

他方、アーティストやクリエイターなど表現に携わる全ての人たちに対しても、自らの表現の質を高めていく過程として、福祉的な領域に出向き当事者たちと出会ったり交流を重ねたりすることを、ごく当たり前の営みとして取り入れてほしいと思う。当事者の存在は、常に私たちに哲学を与える。
そうして波打ち際で出会った者同士の間に起こるさまざまな TURN を、私は見てみたいのだ。
それが全国各地、文字通り五万とある施設やコミュニティで同時多発的に実施されるようになったとき、社会を、新しいフェーズへと引き上げることができるのではないか。しかし、波打ち際は危険を伴う。慎重に、波動を感じ、海の深さを見極め、周りを見渡しながら、一歩を踏み出す勇気を持つことが互いに求められる難業であることには違いない。だから、「追い風」は重要だ。

だれ一人置き去りにしない

2015年、その年、偶然にも TURN の始動とときを同じくして、国連である重要なサミットが開催された。「国連持続可能な開発サミット」である。そして同サミットで 150 を越える国連加盟国の全会一致で採択されたのが「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」であり、日本でもこの 1 年でよく耳にするようになった「SDGs (Sustainable Development Goals)」と呼ばれる目標である。SDGs では、地球と人間の繁栄のための行動指針が、貧困、自然環境、教育、福祉など 17 の目標と 169 の具体的指針によって計画され、2030 年までの 15 年間で達成あるいは取り組みが持続されている状況をつくり出すことが目指されている。なぜ私がこの SDGs を取り上げたかというと、このアジェンダに盛り込まれている 169 もの行動指針を牽引するために掲げられた、一つのメッセージに深く感銘を受けたためである。

「だれ一人置き去りにしない (No one will be left behind)」

私は TURN に、アール・ブリュットや障害のある人の造形活動のように、特定の専門分野としてではなく、あらゆる個人的背景、属性、分野をも抱括し、普遍的価値観として柔軟な拡張を帯びて成長することのできる可能性を見出し、2015 年に TURN のリード文を作成した際には、TURN を「全ての人に届く文化的体験」と表現した。その後、この 4 年間にたくさんのアーティストとたくさんの交流先施設が TURN をキーワードに現場で試行錯誤の交流を重ねてきた。また、多種多様な専門職の力を借りて、現場で起こった瞬間的ともとれる出来事を、さまざまなメディアにとどめ、さまざまな機会をとおして社会へ発信し続けている。その間思考した内容は「TURN NOTE」に見ることができる※3。これほどまでに関与する人が増え、また TURN というアクションに反応する人が増えるようになった要因として、多様性や社会包摂に対する社会の関心やモティベーションの高まりがあるだろう。SDGs 然りであるし、来る 2020 年を目前に、私たちは明らかな追い風を感じて文化事業を実行する渦中にいる。だからこそ、私たちは「だれ一人置き去りにしない」という態度を決して忘れてはならない。地方の、さらに人里離れた入所施設で何十年も暮らす重度の知的障害の人たちや、遠く離れた南米の地で、制度もまだ不十分な中で自閉症の人たちをケアするスタッフたちについてイメージを馳せる。直接的であるかどうかだけが基準ではないが、きれいごとでなく、彼らへも確実に届いているのだという実感を伴う文化事業でありたい。TURN はそうあるべきだし、そうなることができるアートプロジェクトだと思う。

これまで知らなかった人に興味を持ち、その人の持つ魅力に気づき、互いに知り合うための時間をじっくりと持つことで、何よりも「私」自身と出会い直す。これを持続的に取り組んだ先に、2020 年の先へ続くレガシーとなり得る、新しい社会の価値観、社会の形成、人間の成熟があることを、見据え続けていたい。

C

※1　出典：英辞郎 https://eow.alc.co.jp/search?q=turn（2019年 1月24日取得）

※2　日本財団アール・ブリュット美術館合同企画展 2014-2015「TURN／陸から海へ」 開催期間：2014年11月8日(土) ～ 2015年 9月23日(水･祝)
巡回会場：みずのき美術館、鞆の津ミュージアム、はじまりの美術館、藁工ミュージアム
監修：日比野克彦　アドバイザー：森司
主催：TURN 展実行委員会（みずのき美術館、鞆の津ミュージアム、はじまりの美術館、藁工ミュージアム）、日本財団

※3　TURN NOTE ―「TURN」を考えたときの言葉 2016―（2017年 3月発行）／ TURN NOTE ―「TURN」にふれたときの言葉 2017―（2018年 3月発行）／ TURN NOTE ―「TURN」とつながったときの言葉 2018―（2019年 2月発行）　いずれも発行はアーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）

奥山理子
アーツカウンシル東京 TURN コーディネーター、みずのき美術館キュレーター、東京藝術大学特任研究員。1986 年生まれ、京都府出身。母の障害者支援施設みずのき施設長就任に伴い、12 歳より休日をみずのきで過ごす。2007年以降の法人主催のアートプロジェクトや農園活動にボランティアで従事した後、2012 年みずのき美術館の立ち上げに携わり、現在企画運営を担う。2015 年より TURN に参加。

地球上のいろいろなところにもあるTURN

TURN はこれまで、さまざまな機関と連携し、国内のみならず海外の複数カ国での展開も実現してきた。2016年にはブラジル、2017年にはアルゼンチンとペルー、そして 2018年にはエクアドルでプロジェクトを実施。参加アーティストが各国で伝統的な技術や所作を携えて一定期間、福祉施設やコミュニティなどと交流し、その経験をもとに展示やワークショップまたはパフォーマンスを展開している。これまでの海外展開と TURN の関係の考察と、2018年にエクアドルで行われた「TURN - LA TOLA」のレポートから、世界へと広がりをみせる TURN の現在形を切り取る。

他者と出会い、共有する時間

畑まりあ（アーツカウンシル東京）

TURN の海外展開は、ブラジルでの実施を契機に、TURN に出会った人たちのつながりをとおして展開されている。自国に TURN を招き入れることを推進した海外のアート関係者や専門家、現地で出会った福祉施設や地域住民と共鳴する瞬間が幾度となく生まれてきた。それらの出会いは、ときに TURN の視野を更に広げていく。例えば、エクアドルの展開において「地域」を交流先とみなす視点は、ペルーでの TURN の実施プロセスで生まれた。※1 TURNのように、予め構想されたコンセプトや実施プロセスが外部から持ち込まれた場合、それらが各所で活かされていくには、それぞれ固有の条件の上で築かれていくことが必要となるであろう。TURN が出会ってきた先々には、これまでに営まれてきた基盤や考え方があり、まずは耳を傾け、未知なるものを受け入れ楽しもうとする姿勢があった。一方で、未知なるものに足を踏み入れるには、何かしらフックとなるきっかけや関心ごとがあるはずだ。TURN においては何が人々を引きつけたのだろうか。それは、TURN が触知的な空間であること、また多様なものへの向き合い方において、TURN に出会った人たちの心が動かされてきたのではないだろうか。

「理解」するのではなく、まずは触れてみる

初の海外展開となったのは 2016 年。国内でのプログラムに加え「リオデジャネイロ 2016 オリンピック・パラリンピック」に連動するかたちで、ブラジルで実施された。※2「オリンピック・パラリンピック」の祝祭に伴い、TURN の発表会場では世代問問わず、周辺地域の住民とともに観光客や海外で意欲的に活動しつつ一時帰国している人など、国際色豊かな人たちによって賑わいが生まれた。会場内に入ると、大きな木造の立体が備えられていたり、壁には断片的に言葉が描かれていたりする。展示をベースにした通常の展覧会や日本文化の紹介とは異なる空間だが、スタッフの説明を聞きながら、長い時間会場で過ごす来場者の姿が多くあった。参加アーティストの五十嵐靖晃の《糸＝人》(FIO=PESSOA) の一環で実施した糸を巻くワークショップは、その光景は見るだけでは何が行われているのかわからないささやかな行為だ。にも関わらず、それとなく来場者の人たちに参加を促していると、「やってみよう」という人たちが続々と現れ、時には 30人程の大きな一つの輪が生まれた。「理解」を前提にするのではなく、まずは触れてみる、取り組んでみる。ブラジルの会場に集まった人たちのその関わり方によって、静かだが躍動感のある場が生み出された。

それぞれの特異性と向き合う

来場者には、経済的に恵まれない地域で活動を行う人や障害者支援施設で働く人など福祉領域からの人たちも多く訪れた。中には、障害を持つ家族のそれぞれの状況や、福祉や社会において何が課題であるかを語り、TURN 交流プログラムで行っていることに共感の意を示す者もいた。来場したある医師は、TURN 交流プログラムの様子を捉えた映像に映っていた、自閉症をもつ子供がふと五十嵐に寄り添い抱擁する場面をみながら、「なぜこの子は、他者と身体が触れることを許したのか」と質問した。この医師は、自身の世界に他者が介入することを嫌う自閉症の人たちを多く見てきたという。医師

五十嵐靖晃との糸を巻くワークショップを通して、自然と人の輪が広がった

はTURN交流プログラムにおけるアーティストの介入のプロセスの説明に深く頷いていた。ある精神科医は、現在リオデジャネイロ州立大学で取り組んでいる「第三世代大学」※3の設置と実践に携わっているが、領域横断的な専門家によって認知症や高齢化と向き合うことが大事だと考え、今後はアーティストも入れていきたいという。アーティストと日常的な交流を行い、時間と経験を共有することをとおして、異なる人たちが影響し合いながら対等に存在する状況が生まれることに対し、重要性をもって受け入れられた。
2017年、アルゼンチンとペルーで展開したTURNは、TURN in BRAZILに関心をもった国際現代美術ビエンナーレ「BIENALSUR（ビエンナーレスール）」※4の総合ディレクターからの招聘によって結実した。このビエンナーレは、現代美術と社会をつなげていくことを主眼の一つとしている。「社会のさまざまなコミュニティの人にコネクションをもたらせてくれるのではないか」という考えのもと、TURNに声がかかった。国際的なネットワークの構築とともに、「多様性」もテーマの一つとしているこのビエンナーレが、そこから更に推進しているのは、「多様性におけるそれぞれの特異性」を見出すことであり、一人ひとりの特性を学び合うことを特徴とするTURNと通じる。
特性を学び合うこの姿勢は、伝統や地域においても同じような理解があった。TURNの海外展開では、重要な要素の一つとして伝統的な技術や作法を取り入れている。ペルー国立高等芸術学校の学長カルロス・バルデス・エスピノザ氏は、「人と違うことを矯正することに違和感を感じてきた。伝統的なものなど昔の文化を伝えていくことの重要性とともに、TURNのようなプロジェクトは大事である。国立の学校なので、移民、地方からの学生、LGBT、貧困を抱える学生も多く、きっと関心をもってくれると思う」と語っていた。BIENALSURの撮影ディレクターは、アルゼンチンや他国の地域の奥地に入りさまざまな現場を見てきた文化人類学者でもあるが、日比野へのインタビューの際に、自らカメラを回しながら次のような質問をした。「伝統的なモノやコトは、それぞれ異なるが故に、ときに摩擦や対立をも生み出す。そのことについてどう思うか」。「それぞれの伝統工芸や地域には、それぞれの特性がある。それら一つひとつに向き合っていきたい」と答える日比野に、撮影ディレクターは静かに頷いていた。

ブラジルでの実施から引き続く形で開催された、アルゼンチン、ペルー、そしてエクアドルでのTURN。各国で出会った交流先や人々の多くは、モノとしての作品を望むことなく、海外からのアーティストを初めて受け入れることに動揺がなかったことにおいて共通している。TURNのような長期的なプロセスをもとにしたプロジェクトは、異なる人を受け入れ、場に寄り添い、触知的な協働をとおして時間と経験を共有することで、人、伝統、地域におけるそれぞれの特性の一つひとつと向き合う。その進め方に多くの共感と協力を得ることができた。それは、新しい視点や関係性を発生させる契機であり、施設や地域がそれぞれ異なる社会的な課題を抱えながらも、小さなアクションが継続すれば、また数年後には新しいエネルギーが感じられる場所になっていく。互いに影響し合いながら新たな知見とともに更新されていく場所をとおして、経験を常に「生きた」ものにすること、「経験を生きる」ことそのものが期待されているのではないだろうか。翻すと、それは、過去や未来において、そして他者と自身において、人は絶対的に異なるとともに対等に存在するという「複数性」への理解へとつながる。それらの期待を裏切ることなく推進されていることは、プロジェクトの最後に行われる展覧会とワークショップに、交流先の利用者や関係者が集い、そこでの出会いと交流を楽しむ人たちによって高揚感のある場となっていることが物語っていると言えるだろう。

※1　ペルー国立高等芸術学校文化センターのリセット・ディアス・マチュカ館長は、地域において高齢者、ホームレスや非行青年などのマイノリティの人たちが多く、安全性においても懸念されていることに着目。美術館もその課題に向き合うことを一つのミッションとし、地域コミュニティと連携することを始めていた。そして、TURNをとおして周辺のコミュニティとのプログラムを実践してみたいと考えた。その希望を取り入れて、美術館に隣接するコミュニティに住む小学生たちとのTURN交流プログラムが始動した。

※2　2016年6月末から9月上旬にかけて、サンパウロにて4名のアーティストなどがTURN交流プログラムを実施し、リオデジャネイロで発表した。

※3　U3A（The University of the Third Age）。1972年にフランスで生涯学習組織として発祥し、現在世界50カ国以上で広まっている。高齢者を対象にした教育システムであり、各国独自の運営体制で行われている。

※4　2017年7月から10月にかけて、ブエノスアイレス（アルゼンチン）及びリマ（ペルー）にて、7名のアーティストとともに、TURN交流プログラムと展示・ワークショップを実施した。

畑 まりあ

アーツカウンシル東京事業推進室事業調整課事業調整係。東京藝術大学大学院音楽研究科音楽文化学専攻芸術環境創造修了、パリ第一大学パンテオンソルボンヌ修士課程修了。地域住民や他分野の人たちと協働するアートプロジェクトや文化政策に関心もち、2016年よりTURN担当として従事。

“地域”との交流という試み
「TURN-LA TOLA」レポート

植民地時代からの長い歴史をもつ国立のエクアドル中央大学と連携し、TURN - LA TOLAを実施。日本からはアーティストの大西健太郎と小野龍一が参加し、エクアドルの首都キトにおける約1ヶ月間の滞在を通して、現地のアーティスト、学生、そして地域住民らとの交流を重ねた。その集大成として、7月にパフォーマンスを発表した。

期間：2018年6月～7月上旬 ／ 開催地：ラ・トラ地区（キト）
実施場所：エクアドル中央大学、カサ・デ・ラス・バンダス、カサ・ソモス、
ラ・トラ地区の路上、イチンビーア公園ほか。

文：畑まりあ（アーツカウンシル東京）

治安悪化、人口密集…複雑な背景を持つ地域「ラ・トラ」

TURN - LA TOLAでは、特定の福祉施設ではなく、ラ・トラという“地域”を交流先として展開する新たな試みが実施された。ラ・トラ地区は、建築遺産、住民の生活や習慣に残る文化的伝統、旧市街地の中心部に位置する立地などを有し、十分な存在感があるということから、キト市にとって重要な地域社会として位置づけられている。
「ラ・トラ」という名称は、歴史記録によると起源は1629年に遡る。以前、この地域は大農園が広がり、20世紀の半ばまで家屋の多くは日干し煉瓦造りで、家内に大きな中庭を有していた。地域の一部の建物は遺産として登録されており、アンダルシア風の通りが特徴となっている。一方で、文化的な豊かさをもちながらも、社会的な問題が存在する。エクアドル中央大学の調査によると、急増する移住者による人口密集、治安の悪化、ホームレス、家庭内暴力などが深刻化しているという。これには住民たちの複雑な社会背景と、土地のジェントリフィケーションを狙う不動産業界の圧力が絡んでいる。近年、エクアドル中央大学は、ラ・トラ地区の社会的課題と向き合い、住民の文化面やアイデンティティの強化を目指して、アートや文化的な活動を取り入れたさまざまな実践を始めている。

ラ・トラ地区は、キト市の中央東部分にあるイチンビーア山のすそ野に位置し、まちが一望できる

エクアドル中央大学と地域との連携

エクアドル中央大学には、2014 年から「地域における社会関係の構築」を意味する新たなセクションが設けられ、大学と地域の関係を考察し、促進していく取り組みが開始された。また「多様性のある社会」を促進する同大学の取り組みの一つとして、先住民族が多く暮らす北部の地域で、障害者や高齢者を対象にした活動を行っている。学校や施設には、5 ～ 15 歳の障害を持つ子供や高齢者が活動しているが、その地域の先生たちは「どのように対応したらよいかわからない」という状態であったという。そこで、同大学は公立の教育機関として本来の機能を果たすために、この地域との連携を始めた。
同大学芸術学部の活動は、ラ・トラ地区を含む地域を舞台にしたアートプロジェクト『Al Zur-ich（アル・スーリッチ）』を推進するアーティスト集団の協力によって支えられている。TURN - LA TOLA も、Al Zur-ich のアーティストネットワークをとおして、日本人アーティストの滞在サポートや、会場設営のコーディネート及び地域住民との仲介など、さまざまな柔軟な対応によってプロジェクトが結実した。

ラ・トラ地区に隣接する旧市街

エクアドル中央大学の敷地内

小野龍一

小野龍一はキトに滞在し、約 1 週間の制作期間をとおして、さまざまな楽器を演奏する大学生、エクアドル中央大学の教員、地域住民とともに《Sinfonía（交響曲）》という音楽パフォーマンスを行った。小野のプロジェクトは、「もののね」という、空間におけるあらゆる音（声や虫の声、足音など）を総体的に「音楽」と見なす古来日本における音楽観に基づいている。現地の大学生および地域住民とのワークショップは、2 種の要素「演奏（play）」と「聴取（listen）」をもとに計画された。「演奏」では、参加者と一緒に非常にシンプルな図形楽譜を作成し、ある法則に従ってそれを解釈・演奏。「聴取」では、ホールから外に飛び出し、一人ひとりがフィールドレコーディングを行った。その音源をミックスして創作されたサウンドとアンサンブルによって《Sinfonía（交響曲）》が生まれた。

大西健太郎

大西健太郎は、エクアドルへの出発に先立ち、新潟県十日町市莇平（あざみひら）（通称：アザビロ）という集落に古くから伝わる伝統的な盆踊り「シッチョイサ」のリサーチを行い、踊りの間合いや呼吸（リズム）、また村の人と過ごした風景や食事など、アザビロのエッセンスと身体感覚を携えてラ・トラ地区に赴いた。エクアドル中央大学の教員、演劇学科の学生、そして地域住民と共働し、それぞれが「シッチョイサ」を道端で行うツアー形式のパフォーマンスへと作りかえながら『ラ・トラのアザビロ』を展開した。参加者は、地図を片手に、行く先々で、「シッチョイ・トランス」（普段利用している公共バスの特徴を表現したラップとミュージカル）、「シェフズ」（自分たちの好きな料理、観客の好きな料理を再現した歌と音楽）などさまざまな出来事に遭遇していく。観る側／観られる側、受ける側／発する側の関係が、「シッチョイサ！」「ヨシタネーヨシタネー」とあちこちで聞こえるかけ声に揺さぶられて徐々に混ざり合っていった。

楽器博物館「カサ・デ・ラ・バンダス」での小野龍一によるパフォーマンス

大西健太郎による『ラ・トラのアザビロ』の最終地点「プラサ・デ・ヴェルモンテ広場」でのパフォーマンス

地域住民とアートの実践
―検証する視点と長期的な働きかけ―

TURN-LA TOLA 地域コーディネーターのサムエル・ティトゥアニャ（エクアドル中央大学アートマネージメント教授、Al Zur-ich 主宰）に、多様性のある社会や地域におけるアートプロジェクト、そして TURN への思いについて伺った。

実施日：2018 年 7 月 5 日 ／ 場所：エクアドル中央大学
聞き手：畑まりあ（アーツカウンシル東京）

エクアドエル中央大学にて会談の様子。（左手前から時計まわりに）サムエル・ティトゥアニャ、ハビエル・レオン（エクアドル中央大学美術学部長）、レニン・サンタクルス（同大学の「社会と地域連携プロジェクト」コーディネーター）

―― 元々はアーティストとして活動されていたのでしょうか？

そうです。私が現在担うアートプロジェクトの地域コーディネーターという役割は、アーティストとしての経験、そしてキト南部の出身であることの延長線上にあります。キト北部は、アートマーケットやギャラリーが存在するのに対し、南部はそうしたものがありませんでした。だから、私はこの南部地方でアートを始めました。大学でアートを専攻した後、コンテキスチュアル・アートやコミュニティ・アートをベースにアーティストとして活動を始め、80 年代からは、生活の向上を目指した地域住民の組織に参画したのです。2000 年の、スクレ（エクアドルの旧通貨）からドル通貨への移行によって生活や物事の見方も変化し、その後の経済危機では、アートの道具さえ買えない状況もありました。そのような地域や社会的状況の中で、アートとは何かと問いながら、アートの見方を一方的に強いない方法を模索し現在の活動を続けています。

―― TURN を実施するという話を聞いた当初、どのように思いましたか？

ラ・トラ地区で TURN を実施するあたり、まず考えたのは企画を推進していくエクアドル中央大学、東京藝術大学、Al Zur-ich の三者の意向をすり合わせていくことです。Al Zur-ich というのは、2003 年に始まったアーティスト集団による地域アートプロジェクトで、TURN - LA TOLA においても、これまでのネットワークを活かしながらコミュニティや地域住民との展開の窓口を担いました。
またプロジェクトにおけるチーム体制を構築するにあたり、多様な関係性をもたらす機会を増やすことを目指しました。やはり日本人アーティストは言語の壁や考え方の違いに最初苦労していたようです。しかし、違いから生まれる化学反応のような連鎖をとおして、良い作品を目指すというよりも、関わるアーティストや地域住民のマインドへの影響がもたらされることが大切であると考えています。

―― 今回の日本人アーティストの滞在・交流期間についてはどのように思いましたか？

地域でのプロジェクトにおいて大切なのは、時間をかけてそこで暮らす人たちとの関係性を構築していくことです。また交流によって、アーティストたちには地域の人たちからの信頼とともに責任も発生します。アーティストが地域から離れても、そこでの時間や生活は続いていきます。だから地域でのアートプロジェクトは、アーティストがもたらす華やかな時間のみならず、その活動が生活そのものに直結するまでの長期的な視点が大切です。
TURN-LA TOLA においては約 1 ヶ月という交流のプロセスを経ましたが、これはまだ関係性の始まりであるとも言えます。一方で、アーティストが介入する際により良い機能をもたらすことを促す受け皿や拠点があれば、1 ヶ月あるいは 1 ヶ月半という限られた期間でも活動の可能性を多いに期待することができます。今回そのプラットフォームのような役割を Al Zur-ich が担い、まだ十分とはいえませんが、良い基盤となるよう少しずつ向上しているといえるでしょう。

―― 地域への介入の仕方について特に意識していることはありますか？

約 15 年間、アートとコミュニティに関わる活動に携わってきた中で大切にしていることは、アーティストの考えを一方的に押し付けないことです。また、パターナリズムに陥らず、関係性やつながりを大切にしてサポートする方法をとっています。それは、対話をベースに互いのやりたいことを探っていくということでもあります。これは決して簡単なことではないため、この方法が実現したのは、これまでの活動の中で数件のみです。またこれらの活動は、アートを通した政治的な手段を模索し、人々の「権利」そのものへの問いかけにもつながっていきます。

―― 地域住民への働きかけにどのような可能性を見出していますか？

実際のところ、ラ・トラ地区の住民はアートからほど遠いところにいます。そこをつなげていくため、さまざまな取り組みを介入させて実践しています。表面的なレイヤーにとどまらず、深いところにつなげていくところまで目指していきたいです。アートの活動を住民に持ちかけていくと、同意の言葉を口にしながらも行動が伴わない人もいます。そうした場合に、その地域の状態を察することができる。どのような地域においても、それぞれの背景や特性などの文脈に応じて必要性が見出せるはずです。特に、日常生活の中でどれほど教育や文化的な活動へ接する機会があるのか、といった普段の環境が生活者にとって大事であるため、そこに働きかけていきたいと考えています。
TURN - LA TOLA のようなアートプロジェクトは、地域の人たちに、これまでとは異なる光景を見せてくれます。そのことが、人々に問いをもたらし、まちで行われる他の活動にも刺激を与えていくことになるでしょう。また今日、ラ・トラ地区は「観光」「ビジネス」の活性に向かっていますが、住民にとってはこれまでの生活に影響を及ぼすリスクがある。だからこそ、この土地では、TURN - LA TOLA のような実践と、状況を検証する批評的な眼差しとともに経験を積み、豊かな生活を向上させていきたいです。

あとがきにかえて

TURNジャーナルの編集が大詰めを迎える中、第７回TURNミーティングの開催を迎えた。これまでのTURNミーティングは、関係者が集い、語り、交流することを目的としていたが、今回はベクトルの向きを外側へ変え、TURNジャーナルの創刊を意図した想いと同じく、TURNをより幅広い層の人へ知ってもらう機会として設定した。多くの人から知見をもらい、共同して育んでいく。そんな期待を寄せてのことだ。図らずして、今回のTURNミーティングに寄せた期待は早くも叶い、自身にとって学びの多い日となった。より豊かにTURNを推進していくためには、まだまだやるべきことがあると実感する。

TURNジャーナルの編集後記であることは承知しながらも、少し長い枕として、この日に体験したことを備忘録的に記（ジャーナル）しておきたい。

その前に少し振り返ると、TURNミーティングでトークのみならずパフォーマンスを導入し始めたのは第５回目からである。その初の試みでパフォーマンスを行い、空間に躍動感を与えてくれたのは、板橋区立小茂根福祉園で複数年かけて交流を重ねるアーティストの大西健太郎さんである。そのきっかけが次なるTURNの企画につながり、大西さんはエクアドルでTURNを実践することになった。第７回目の今回は、フェス４にも参加したクラリネット奏者の島田明日香さんに、ラジオ番組のトークの合間に差し込まれる音楽のごとく、舞台で生演奏をしてもらった。鬼の練習とともに本番に臨み、超絶技巧曲も難なくこなし素敵な演奏を披露してくれた。
「クラリネットならこの曲を」と日比野さんからのリクエストとしてあがったのは『クラリネットが壊れちゃった』。当日島田さんは、クラリネットを解体しながら、「壊れた」想定で演奏を続けるという素敵な演出をしてくれた。壇上で演奏を聴き、壊れたクラリネットのパーツを手渡された登壇者のロバート キャンベルさんは、トークセッションの冒頭で、彼女の振る舞いの中に含まれた意味（含意）を柔らかく素敵な言葉で語ってくれた。袖口で聞き耳を立てていた島田さんは感激していたという。素敵なエールの交換があったことは、何よりも喜ばしい。また、TURNが掲げる大きなテーマと、曲のテーマを重ね合わせてさりげない仕草で可視化を成せるアーティストへの羨ましさなど、TURNの活動にアーティストの関わりがもたらす可能性を改めて強く感じさせてくれる日となった。

もう一つの素敵な出来事は、言うまでもなく登壇者たちの白熱した深い議論だった。あの会場に居合わせた人の中に少なからず「自身の（当たり前とする）前提が動いた／揺らいだ」感覚を抱く、TURN的な体感をしたのではないだろうか。
ワクワクする議論へリードし、対話を深めたのは牧原依里さんだった。「聾者／聴者」の深い分断をラディカルに提示した無音映画『LISTEN リッスン』を撮った牧原さんは、デフ・コミュニティ（聾者社会）の「聾文化」について言及し、「聴者」側の多様性を問いつつ、その社会の中に「聾者」は手話言語を使う少数者（マイノリティ）として存在していると投げかけた。議論を聞きながら、2017年11月に開催した第３回TURNミーティングで九州大学大学院芸術工学研究院助教の長津結一郎さんが行った講演「アートと社会包摂の文脈」の中で、「社会的排除/包摂」「誰が/何を包摂するか？」の問い立てを通じて、丁寧に説い（問い）ていた「危うさの感覚」が呼び戻された。牧原さんは、「聴者の聞こえ」を前提とする（イメージする）「聞こえない」は、「聾者」のそれではないと告げる。だからこその互いの結びつき方があるはずだと希望を抱く彼女の語りは、カルチャーショックを伴う出会いの必要性を示す姿として見え、フェス５の企画の柱となるヒントをもらった。TURNジャーナルを手に読んでくださった方々には、次回是非、今夏に開催するフェス５の会場で、TURNを体感していただけたらと思う。

TURNジャーナルは、TURNにまつわるさまざまな活動の実態を、興味を抱いてくださった方に、できるだけリアルな感情を含めて状況を理解してもらえることを願って刊行した。今回の特集である「小茂根福祉園とTURNの変遷」は、４年間という時間が醸成してた成果と、これからの課題を浮き彫りにしている。また、TURN交流プログラムとTURN LANDに関わった人たちに及ぼす波状的な影響にも気づいてもらえたとしたら嬉しい。TURNフェスのパートでは、多彩な取り組みとそれらに関わった人たちの思いも含め、TURNフェスの場がもたらす効果をイメージしてもらえたらと願う。さまざまな活動の連関を通して、渦巻いている感情的な出来事含め、TURNの活動を包括的に記録し伝えることのできる媒体として、今後もTURNジャーナルの刊行を行っていきたい。

TURNプロジェクトディレクター
森 司

TURN JOURNAL 2018

平成31年3月26日

監修：森 司（アーツカウンシル東京 TURN プロジェクトディレクター）

編集：長瀬光弘
編集協力：アーツカウンシル東京［浅野五月／奥山理子／畑まりあ］、
特定非営利活動法人 Art's Embrace［天羽絵莉子／岩中可南子／田村悠貴／
東濃匠十／東濃 誠／本島かおり／山口麻里菜］

デザイン：星野哲也

印刷：第一企画印刷

発行：アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）
〒102-0073 東京都千代田区九段北 4-1-28 九段ファーストプレイス 8 階
Tel：03-6256-8435 ／ Fax：03-6256-8829
Email：info@turn-project.com
URL：www.artscouncil-tokyo. jp

TURN 公式ウェブサイト：http://turn-project.com

©2019 Arts Council Tokyo
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture
All rights reserved

TURN

文化でつながる。未来とつながる。

Tokyo Tokyo FESTIVAL

ARTS COUNCIL TOKYO

Arts Embrace

TOKYO GEIDA